NPO法人サロン2002　公開シンポジウム2018

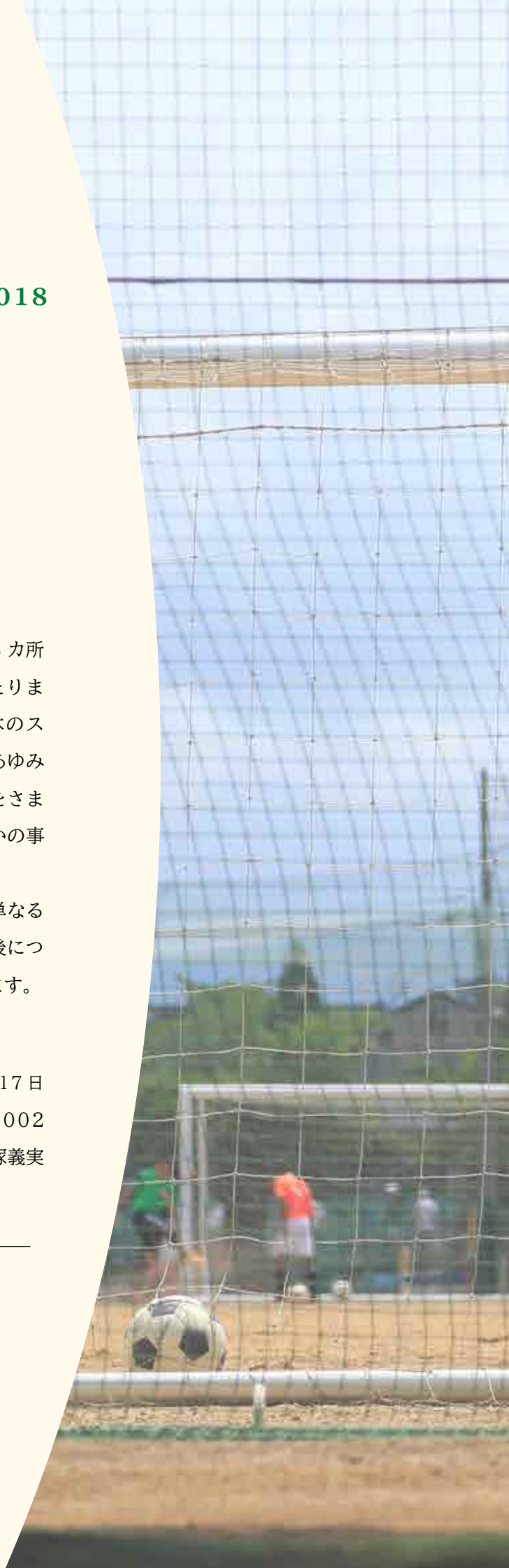
部活動を語ろう！

－高校サッカー百年を機に－

ちょうど今年は、1918（大正7）年1～2月に全国3カ所ではじまった旧制中学の蹴球大会から100年目にあたります。高校野球も今夏が第100回の記念大会です。日本のスポーツを百年以上にわたってささえ続けてきた部活動のあゆみを歴史的な視点で振り返るとともに、部活動の「いま」をさまざまな角度から考察し、「これから」についてはいくつかの事例を紹介しながら語り合いたいと思います。

演者はいずれもこの分野に深くかかわる当事者です。単なる批評や安易なノスタルジーに浸ることなく、部活動の今後について、会場の方々と本質的な議論をしていきたいと考えます。

2018（平成30）年9月17日
特定非営利活動法人サロン2002
理事長　中塚義実



シンポジウム運営　稲見　知足　大河原　誠二　金井　祐樹　岸　清馨
岸　卓巨　小山　基彰　笹原　勉　嶋崎　雅規
関　秀忠　中塚　義実　皆川　宥子　森下　雄旭

シンポジウム開催要項

NPO法人サロン2002　公開シンポジウム2018

部活動を語ろう！

－高校サッカー百年を機に－

特定非営利活動法人サロン2002は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とするNPOです。月例会はすでに260回を越え、公開シンポジウムでは毎年さまざまな話題を取り上げてきました。昨年度はサロン2002の20年のあゆみを振り返りながら、2020東京オリパラ後についても熱い議論を交わしました。

今年は、昨今話題の「部活動問題」を取り上げます。

ちょうど今年は、1918（大正7）年1～2月に全国3カ所ではじまった旧制中学の蹴球大会から100年目にあたります。高校野球も今夏が第100回の記念大会です。日本のスポーツを百年以上にわたってささえ続けてきた部活動のあゆみを歴史的な視点で振り返るとともに、部活動の「いま」をさまざまな角度から考察し、「これから」についてはいくつかの事例を紹介しながら語り合いたいと思います。

演者はいずれもこの分野に深くかかわる当事者です。単なる批評や安易なノスタルジーに浸ることなく、部活動の今後について、会場の方々と本質的な議論をしていきたいと考えます。

シンポジウム終了後は同会場で懇親会を企画しています。さまざまな立場の方が集い、立場を越えて交流を深める場となることを願っています。

多くの方にお集まりいただき、部活動を題材に、ざっくばらんに語り合いましょう。

特定非営利活動法人サロン2002
理事長　中塚義実

記

主　　催　：　特定非営利活動法人サロン2002
後　　援　：　日本部活動学会
日　　時　：　2018（平成30）年9月17日（月祝）　14：00～17：00　（受付13：30～）
会　　場　：　桐陰会館
〒112-0012　東京都文京区大塚1-9-1（筑波大学附属中学・高校　敷地内）
東京メトロ 有楽町線 護国寺駅 5番出口より徒歩8分
東京メトロ 丸ノ内線 茗荷谷駅 より徒歩10分
演　　者　：
中澤 篤史（早稲田大学、全国高体連研究部活性化委員会アドバイザー）
中小路 徹（朝日新聞社、スポーツ政策研究会幹事）
嶋崎 雅規（NPO法人サロン2002理事、国際武道大学）
※中塚 義実（NPO法人サロン2002理事長、筑波大学附属高校、全国高体連研究部活性化委員長）
※コーディネーターを兼ねる

参 加 費 ：　2,000円（ただし学生は無料）　※懇親会参加費は3,000円（学生1,500円）を予定
参加者特典：　シンポジウムに関連する内容であれば、ご自身の所属団体の関係資料を配布できます。
シンポジウム記録を含む、サロン2002広報誌が無料で郵送されます。
部活動をめぐるさまざまな事例や諸課題を、当事者から直接聞くことができます。
部活動にさまざまな形で関わる関係者と直接交流ができます。

参 加 申 込：下記アドレスからご登録ください。
https://goo.gl/7Fk5Xi
NPO法人サロン2002オフィシャルサイトの「お知らせ」からも申し込むことができます。
https://www.salon2002.net/
事 務 局 ：　salon2002.info@gmail.com（担当：岸）

＜特定非営利活動法人サロン２００２とは＞

特定非営利活動法人サロン２００２は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とするNPOです。

全国各地にいる約１００名のメンバーは、学校関係者、スポーツ指導者やトレーナー、スポーツクラブの運営に携わる方、フットサルや草サッカーの関係者、メディア関係者、サポーターやボランティア、スポーツ行政に携わる方や競技団体関係者、医者や弁護士、アーティストなど多種多様です。さまざまな角度からスポーツに携わり、“志”の実現に向けて活動する者で構成されるのが「サロン２００２」です。

NPO法人サロン２００２の主たる活動は、２０１８年７月で通算２６３回となった月例会の開催と、その内容を軸とするホームページの運営です。本公開シンポジウムは２００１年度よりほぼ毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。

詳細はホームページ＜http://www.salon2002.net＞をご覧ください。

＜サロン２００２公開シンポジウム＞

２００１年度…FIFA ｺﾝﾌｪﾃﾞﾚｰｼｮﾝｽﾞｽﾞｶｯﾌﾟ総括
２００２年度…FIFAワールドカップ総括
２００３年度…地域で育てるこれからのスポーツ環境
２００４年度…totoを活かそう！
２００５年度…クラマーさん、ありがとう！
２００６年度…２００６年ドイツで感じたこと
２００７年度…ｻｯｶｰ観戦を楽しもう！-ｽﾀｼﾞｱﾑ編
２００８年度…地域からみたＪリーグ百年構想
２００９年度…２０１９年ﾗｸﾞﾋﾞｰﾜｰﾙﾄﾞｶｯﾌﾟを語ろう！
２０１０年度…育成期のサッカーを語ろう！
２０１１年度…高校サッカー９０年史を語ろう！
２０１２年度…U-18フットサルを語ろう！
２０１３年度…スポーツクラブの法人化を語ろう！
２０１５年度…スポーツで“ゆたかなくらし”を！
２０１６年度…日本サッカーのルーツを語ろう！
２０１７年度…Before2002,After2020-ｻﾛﾝ20周年記念

サロン２００２設立宣言

（２０００年４月１日）

我々は、以下に「サロン２００２の“歴史”」、「サロン２００２の“志”」及び「サロン２００２の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン２００２の設立を宣言する。

【サロン２００２の“歴史”】

サロン２００２は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社・心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、１９８０年代後半からこの名称で活動）を前身とし、１９９７年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン２００２」として活動を行ってきた。

【サロン２００２の“志”】

サロン２００２は、サッカー・スポーツを通して２１世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン２００２の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン２００２の“志”を実現する上で、２００２年FIFAワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン2002の“会員”】

サロン２００２は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン２００２の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン２００２からの“Take”を求めるだけでなく、サロン２００２に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン２００２は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

本シンポジウムの進行と内容

第１部　プレゼンテーション（14：00 ～ 15：45）

１）コーディネーター（中塚）より

本シンポジウムの背景、進め方を共有し、「高校サッカー百年」をざっと振り返ります。

２）演者①　中澤篤史　そもそも部活って何？－国際比較・歴史的背景・重要課題

これから部活動をどうするかを考えるために、日本のいまの部活動の姿は、当たり前ではない、ということを２つの視点から示します。１つは国際比較の視点で、海外はどうなっているのかを検討しながら、「日本」の部活動を考え直します。もう１つは歴史的背景の視点で、昔はどうだったのかを検討しながら、「いま」の部活動を考え直します。その上で、これからの第一歩として取り組むべき重要課題として、生徒の生命と教師の生活を守らねばならないことを問題提起します。

３）演者②　中小路徹　日大悪質タックルと体操問題から見えるもの

日大アメリカンフットボール部の悪質タックルと、体操界の暴力・パワハラ事案からみえる諸問題は、運動部活動にも通底するものです。過度な上意下達、選手の自主・自立が弱い環境、狭い世界の閉鎖性、勝利至上主義、そして、暴力指導の負の連鎖。スポーツ界の不祥事が続く中、二つの問題が織りなす具体的な現象から、部活動の現状と課題を提示していきます。

４）演者③　嶋崎雅規　少子化時代の部活動

「ブラック部活動」と揶揄される現在の運動部活動では、休日もない過度の活動や顧問主導型の勝利至上主義的活動が問題とされています。しかし、一方では少子化による生徒数の減少、顧問の高齢化や実技指導力不足によって部活動が成り立たないという問題も起こっています。こうした部活動の現状を明らかにしたうえで、少子化や部員不足に対応したラグビーの取組みを紹介し、少子化時代の「これからの部活動のあり方」を提言していきます。

５）演者④　中塚義実　ユースリーグと U-18 フットサルから見えるもの

補欠ゼロ・引退なし・自主運営のサッカーリーグ「DUO リーグ」の創設（1996 年）、リーグ構想が公認化される中で見えてきた教育の論理とスポーツの論理の間にみられる“壁”（2004 年）、U-18 フットサルの黎明期から NPO サロンによる全国大会開催（2017 年）などの事例を通して、部活動の可能性と課題を語ります。定点観測を続けながら感じるさまざまな“変化”にも言及します。

第２部　ディスカッション（16：00 ～ 17：00）

会場全体で意見交換します。

演者プロフィール

◆嶋崎雅規（国際武道大学体育学部教授／ NPO 法人サロン 2002 理事）

1962年東京生まれ。早稲田大学第一文学部文学科日本文学専修卒業。1986年4月より帝京中学・高等学校国語科教諭。同年ラグビー部を創部、以後 29 年間高校ラグビー部の指導にあたる。その間、全国高体連研究部活性化委員、東京都高体連研究部委員長、東京都高体連ラグビー専門部常任委員などを経験。2002 年 3 月筑波大学大学院体育研究科修了。専門は体育・スポーツ経営学。主に学校運動部活動を研究テーマとしている。2015 年 4 月より現職。著書に、『Change! みんなのスポーツ』（不昧堂、2002）、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』（かもがわ書店、2013）、『運動部活動の理論と実践』（大修館書店、2016）、『よくわかるスポーツマネジメント』（ミネルヴァ書房、2017）など。

◆中小路徹（朝日新聞社「スポーツと社会」担当編集委員）

1968年、東京都出身。京都大学でサッカー部。1991年、朝日新聞社入社。サッカーを中心にスポーツを担当し、2002 年W杯ではソウル支局で韓国サイドを担当。現在は、競技の枠を越え、部活動の在り方、スポーツ事故防止、暴力的指導対策など、スポーツ環境全般を考える取材をしている。

◆中澤篤史（早稲田大学准教授）

1979 年大阪生まれ。東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科修了。博士（教育学、東京大学）。一橋大学講師・准教授を経て現職。専門はスポーツ社会学・身体教育学・社会福祉学。

スポーツ・身体・人間に関連する社会現象を、社会学を中心とした社会科学的アプローチから探究しています。とくに、運動部活動のあり方や問題などを専門的に研究しています。主著は『運動部活動の戦後と現在：なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』（青弓社、2014）、『そろそろ、部活のこれからを話しませんか：未来のための部活講義』（大月書店、2017 年）。趣味はコーヒーと囲碁。

◆中塚義実（NPO 法人サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭）

中・高・大・院と、異なるタイプの部活動でサッカーを満喫したのち 1987 年より現職。保健体育科教諭・蹴球部顧問として定点観測続行中。筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ前理事長（7 月まで）、全国高体連研究部活性化委員長、東京都サッカー協会フットサル委員会ユース（2 種・3 種）部会長など多種多様な活動に関わる中で、自分自身の「働き方改革」に取り組んでいる。著書に『少年のためのサッカー入門』（長岡書店）、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』（かもがわ書店）、『運動部活動の理論と実践』（大修館書店）など。

第 1 部　プレゼンテーション

1) 司会者から挨拶　笹原勉

では、定刻となりましたので本日のシンポジウムを開始いたします。今日はご多忙の中我々のシンポジウムにお越しいただきまして誠にありがとうございます。私は今日の総合司会を務めます、NPO 法人サロン 2002 の副理事長の笹原勉です。よろしくお願いします。

本日のシンポジウムを主催する NPO 法人サロン 2002 は、スポーツ文化ネットワークサロン 2002 というネットワークを主催しております。このネットワークはスポーツを通じたゆたかなくらしづくりを志に掲げるメンバーの、緩やかなネットワークでございます。メンバーには学校の先生方、研究者、スポーツの指導者、或いは各競技団体関係者、それからメディアの方々、或いは一般のスポーツファン、そういった方々がだいたい 100 名ぐらい集まっております。さらには今回のような毎年一回のシンポジウム開催、それから月例会の開催、このようなことを主に行っております。サロン 2002 という名前で活動を始めてから去年で 20 周年、今年で 21 年目を迎えております。我々はメンバーを募集しております。お手元の資料の中に入会案内がございますので、興味を持たれた方は是非ご入会をお願いいたします。本日のシンポジウムは、日本部活動学会様より後援を頂いております。また、大月書店様、洋泉社様から協賛を頂いております。この二社は今日の演者の方々の書籍を販売してい

る会社でございまして、外側のロビーの方でも本を販売しております。休憩時間、或いはシンポジウム終了後などに是非ご覧になっていただければと思います。

ここで、今日の演者をご紹介いたします。皆さんから向かって左から、本日のコーディネーターで、NPO 法人サロン 2002 の理事長、筑波大学附属高校の教員でもあります中塚義実さん、続きまして早稲田大学の准教授で、高体連研究部活性化委員会のアドバイザーでいらっしゃる中澤篤史さん、それから朝日新聞社の中小路徹さん、スポーツ政策研究会の幹事でもいらっしゃいます。そして、NPO 法人サロン 2002 の理事であり、国際武道大学で教鞭をとっている嶋崎雅規さんです。

ではこの辺で中身に入りたいと思います。マイクをコーディネーターの中塚義実さんにお渡しいたします。

2）コーディネーターより　中塚義美

改めまして皆さんこんにちは。今日のシンポジウム、早速中身に入っていきたいと思います。お手許の開催要項裏面（本誌４ページ）に我々がこれまでどんなテーマでシンポジウムをやってきたのか書かれています。今年のテーマを考えるにあたって、来年・再来年のテーマをどうするかから考えました。来年はラグビーのワールドカップ、再来年は東京オリンピック、これらを取り上げないわけにはいきません。そうすると、やはり今話題の部活動問題をここらで取り上げておかないと、というところから準備がスタートしました。

このシンポジウムの進行と内容を私の方からお話します。サブテーマに「高校サッカー 100 年」を掲げています。メインは「部活動を語ろう！」ですが、せっかく掲げているものですから、この 100 年をざっと 10 分くらいで要約して皆さんにお伝えします。そのあと中澤さん、中小路さん、嶋崎さん、の順でそれぞれまとまったお話を用意してくださっていますのでお話しいただき、最後に中塚の方から話をして第 1 部終了。休憩の間に皆さんからの質問を頂き、それをもとに第 2 部と、このように考えています。と言っている間に持ち時間の 10 分がどんどん減っていきますので、中身に入っていきます。

1　「高校サッカー百年」とは

1918（大正7）年　1～2月にかけて、関西、首都圏、東海で相次いで蹴球大会が開かれた。
これを高校サッカー元年と位置付け、2018年を百年とする

第1回　日本フートボール大会ア式・ラ式
1918年1月12日（土）、13日（日）豊中運動場
主催：大阪毎日新聞社

第1回関東蹴球大会
1918年2月9日(土),10日(日),11日(紀元節)　高師運動場
主催：東京蹴球団　後援：東京朝日新聞社

第1回　東海蹴球大会
1918年2月17日（日）鶴舞公園
主催：新愛知新聞社運動部

＜資料１＞大正７年、1918 年１月から２月にかけて、関西、首都圏、東海で相次いで旧制中学校の蹴球大会、今の高校サッカーの大会が開かれました。そこから今年は 100 年目ということです。関西で開かれた大会は日本フートボール大会。ア式というのはアソシエーション式でサッカー、ラ式はラグビーのことです。ですからラグビーも 100 年ということになります。主催は大阪毎日新聞社です。その１ヶ月後、東京高師運動場、茗荷谷駅から来られた方は、道路を渡ってちょっと行ったところにある東京教育大学跡地、いまは筑波大学東京キャンパスや文京区スポーツセンターになっているあたりで開かれました。後援に東京朝日新聞社が入っています。主催の東京蹴球団は今も活動しています。日本人による最初のサッカークラブと言っていいでしょう。東海地区では新愛知新聞社、今の中日新聞の主催で蹴球大会が開かれました。P.46 以降につけた補足資料にざっと高校サッカー 100 年の年表があり、そこに日本フートボール大会の告知広告が載っています。

100 年の概観をやっていると大変なことになるのですが、やっぱりその前史を押さえておかないといけません。ここでは前史から大戦前のところを中心にご紹介します。大戦後については３名の演者からいろいろ出てくると思いますので、まずその前史のところを見ていきたい。それが今の部活にも繋がってくると考えます。

開国、明治維新。海外からいろんな人や文化がやってきます。スポーツも海外からもたらされ、外国人の居留地にはクラブが生まれます。横浜の YC & AC。設立は明治元年で、今年はクラブ創設 150 周年ですね。10 月初旬にサッカーの方ではタイとバンコクと香港のクラブを呼び、そして筑波大学蹴球部も呼んでもらって 150 年記念の交流試合をやることになっていますが、まずひとつはこういう流れがあります。野球やサッカーも、海外の方から紹介されました。

ただ、日本で野球やサッカーなどのスポーツが広がっていくのは学校を通してでした。とりわけ、体操伝習所の流れを汲む東京高等師範学校、今の筑波大学が、日本のスポーツの発展に大きく貢献しています。嘉納治五郎が校長を務めていたころに今の部活動の原型が出来、卒業生が全国各地に赴任し、広めていきます。

3

卒業後は全国各地へ！

明37(1904)　中村 覚之助→清国山東省済南府師範学堂
明39(1906)　堀　桑吉　→　愛知第一師範
明41(1908)　細木 志郎　→　埼玉師範
明41(1908)　牧野 信寿　→　広島師範
明41(1908)　内野 台嶺　→　豊島師範
明42(1909)　落合 秀保　→　滋賀師範
明42(1909)　玉井 幸助　→　御影師範
明44(1911)　松本 寛次　→　広島一中
大3(1914)　高橋 英治　→　刈谷中
大9(1920)　北村 春吉　→　静岡師範
昭7(1932)　河本 春男　→　神戸一中

赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、全国にサッカーを広めた東京高師は、日本サッカーの宗家」です

＜資料２、３＞日本人による最初のサッカーの対外試合は、横浜外人クラブ（YC & AC）と東京高師の試合です。結果はボロ負けだったようですが、そのあと一所懸命練習に励み、卒業生が全国の師範学校や各都道府県のエリート校である旧制中学校に赴任します。P.47 の補足資料を見てもらうと、全国高校選手権大会の優勝校が出ていますが、戦前は師範学校と旧制中学校ばかりですね。東京高師の卒業生が赴任したところを拠点にしてサッカーが広まっていったことがわかります。

日本代表が初めて編成された 1917 年、大正 6 年の極東大会のメンバーも東京高師です。国内で他にサッカーをやっている日本人はほとんどいなかったわけですから。そして、ボロ負けです。このままではいかんということで、各地の新聞社の人達や指導現場の人達が立ち上がり、先ほど紹介した 3 つの大会が出来たという流れです。ついでながら日本サッカー協会もこのタイミングで生まれました。この話は省略します。

後の議論と関係するかもしれませんので、当時のエピソードを一つ。

広島一中、今の国泰寺高校が、今の天皇杯の地区予選で勝ち上がりました。1924 年の中国地方代表です。ところが、本大会を前に校則が立ちはだかりました。当時の校長は、野球部が新聞社主催の対外試合に参加することを禁止しました。野球部をはじめとして部活が盛り上がり、勉強そっちのけで部活ばかりやっている。人間形成が教育の目的であり、芸人や運動屋、演説使いを作ることではない、という教育観から、校長は野球部に対して強硬な措置をとりました。野球部に対して厳しい指導をすれば蹴球部にも同じようなことがあり、新聞社主催ではなかったけれど、教育関係ではない蹴球協会主催の全国大会への出場を認めてもらえなかったということです。戦前から、教育と競技の間の壁や軋轢はあったのだということです。

戦前の日本サッカー黄金期がこの頃から始まります。＜資料４＞

1930 年の極東大会では日本が初優勝しました。戦前の日本サッカーはエリート層にしか普及していな

5

第9回極東選手権優勝メンバー

ポジション	氏名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場

かったのですが、大学を頂点とする学校運動部での育成強化システムが確立しています。＜資料５＞当時の日本代表の出身中学校を見ると、ここ筑波大附属中高 (旧東京高師附属中) の卒業生も結構います。また神戸一中、大連一中などといったエリート校から旧制高校へ進み、そのまま帝国大学でサッカーをした人達が当時の日本代表を構成していることがわかります。このままいけば２年後のロサンゼルスオリンピックで活躍できたかもしれないけど、アマチュアリズムの問題で 1932 年のロス五輪ではサッカーが開かれませんでした。

6

＜資料６＞そして 1930 年のメンバーの多くが第一線のキャリアを終えたにも拘わらず、その４年後、ベルリン五輪で優勝候補のスウェーデンを破るという「ベルリンの奇跡」を起こします。戦前の学校の部活システムの中で、すぐれた人材が出てきたということ、これはひとつ押さえておかないといけないと思います。

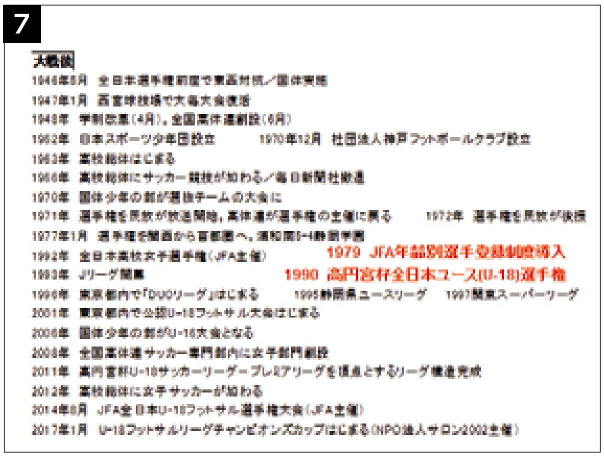
しかし、戦争です。多くの方が亡くなってしまいます。

＜資料７＞戦後教育改革 6-3-3 制、ここから全国高校サッカー選手権大会ということになるわけですが、1963 年に高校総体、今のインターハイが始まります。ただサッカーはもう既に高校選手権大会をやっていたので、当初これには関わりませんでした。サッカーが高校総体に加わるタイミングで、関西での大会創設から全国高校選手権大会をずっと担ってくださっていた毎日新聞社が主催から外れます。この大会自体、しばらく大変な時期を過ごす訳ですが、そこにテレビが関わるようになり、メディアに大きく取り上げられ、首都圏開催となります。サッカー協会も身分での登録制度じゃなく年齢別の登録制度を導入し、クラブと学校が垣根を越えて一緒にやる大会が開かれます。

そのあとのところは年表にある通りです。近年のトピックといえば高体連に女子が入ってきたことや、U-18 年代のフットサル大会、こういったものも出来てきている。あるいはサッカーの方はリーグ戦が全国各地で展開している、というあたりがトピックになろうかと思います。

ということで猛烈な勢いで 100 年を駆け抜けました。ここから本題でもあります、「部活動を語ろう」に進んでいきたいと思います。

最初の演者として早稲田大学の中澤さん、部活動研究の第一人者と紹介してよいかと思います。よろしくお願いします。


7

大戦後
1946年5月 全日本選手権前座で東西対抗／国体実施
1947年1月 西宮球技場で大毎大会復活
1948年 学制改革(4月)、全国高体連創設(6月)
1962年 日本スポーツ少年団設立　1970年12月 社団法人神戸フットボールクラブ設立
1963年 高校総体はじまる
1966年 高校総体にサッカー競技が加わる／毎日新聞社撤退
1970年 国体少年の部が選抜チームの大会に
1971年 選手権を民放が放送開始、高体連が選手権の主催に戻る　1972年 選手権を民放が後援
1977年1月 選手権を関西から首都圏へ、浦和南5-4静岡学園
1979 JFA年齢別選手登録制度導入
1990 高円宮杯全日本ユース(U-18)選手権
1992年 全日本高校女子選手権(JFA主催)
1993年 Jリーグ開幕
1996年 東京都内で「DUOリーグ」はじまる　1995静岡県ユースリーグ　1997関東スーパーリーグ
2001年 東京都内で公認U-18フットサル大会はじまる
2006年 国体少年の部がU-16大会となる
2008年 全国高体連サッカー専門部内に女子部門創設
2011年 高円宮杯U-18サッカーリーグ－プレミアリーグを頂点とするリーグ構造完成
2012年 高校総体に女子サッカーが加わる
2014年8月 JFA全日本U-18フットサル選手権大会(JFA主催)
2017年1月 U-18フットサルリーグチャンピオンズカップはじまる(NPO法人サロン2002主催)

そもそも部活って何？
ー国際比較・歴史的背景・重要課題

中澤篤史

部活動に関する問題意識

皆さまこんにちは。中澤と申します。部活動研究の第一人者なんて恐れ多い紹介を頂きましたが、部活ってそもそも何かを考える話をしろと言われましたので、今日１番バッターとして、発表させて頂きたいと思います。自己紹介として重要なのは、僕はもとDUO リーガーということです。サロン 2002 が高校生の地域リーグとして行っており、僕はそこに参加している東大サッカー部の部員だったのですが、運良く２軍か３軍だったので高校生に混じってここで試合をさせてもらいました。そういったご縁もあって今日は部活とは何かの話を、僕が行ってきた研究をもとに紹介したいと思います。

最近いろいろメディアで部活動が取り上げられることがあって、僕も朝日新聞などからもインタビューを受けたりするのですが、こうした問題の広がりというのを逆にチャンスにして部活動の悪いところ、そしてもちろん良いところもあるので、そのバランスを考え直す、そういう時期に来ているのかなと思っています。今日の発表の１番の根本的な立場ですが、僕がどのように部活動を見ているかというと、そもそも部活動は当然の存在なのかというところに僕の問題意識があります。朝井リョウさんの小説に、映画にもなりましたが、『桐島、部活やめるってよ』という作品があります。これは非常に面白い作品で、部活を切り口に今の学校、生徒の関係を描写しています。注目したいのがこのタイトルで、桐島というバレーボール部で頑張っていた高校３年生の生徒が部活をやめちゃった。なんでなんで？部活頑張るのが当然じゃん、なんで辞めちゃうの？最後までやり続けるのが当たり前でしょ、と、部活動を辞めたことが事件になってしまう、そういうインパクトを狙ったタイトルです。

このタイトルに象徴されているように、僕達は部活という存在を当たり前に思っています。しかしそれを疑うところから見つめ直す必要があるのではないか、部活ってそもそも何だろうという根本的なところから僕の問題意識はスタートしています。そうした中で行ってきた研究として、今日は３つの柱、国際比較、そして歴史的背景、さらに現状を踏まえた上で重要課題について指摘したいと思います。それらを含めて皆さんと部活動を語る準備を整えるというところが、僕の役割かと思っています。

部活動の国際比較

早速はじめに国際比較です。海外にも部活ってあるの？という話です。初めに日本の部活のイメージをお話しますが、僕の手元に、３年前に北海道で開かれた全国中学校体育大会でのサッカー、陸上、バレーボールの写真があります。僕はこうした写真を国際会議の場で海外のスポーツ研究者の、イントロダクションで使います。３ヶ月前も、スイスの国際学会でこういう話をして、日本ではスクールスポーツが非常に盛んだという話をすると驚かれます。今回僕が印象的だったのは、実はサッカーする生徒は一年中、というより３年間ずっとサッカーをしている。バレーボールはバレーボールだけをし続ける。日本にはシーズン制がな

い、と言ったら非常に驚かれたということです。どういうふうにやるの？という質問もされました。いずれにしろ、こうしたスクールスポーツ、部活が非常に盛んだということは海外から見ると非常に珍しく思われるということですね。

日本すごいねという話では終わりません。日本の部活はアメイジングだけれどもクレイジーだ、という目線もあるからですね。海外の報道の例もあります。アメリカのニューヨークタイムスが柔道事故を特集でとりあげました。柔道の事故で亡くなった息子さんの遺影を掲げるお母さんの写真が添えられていて、なぜ日本では柔道で人が死ぬのか。"Japan Confronts Hazards of Judo" 日本は柔道の危機に瀕しているというタイトルですが、しかも学校で死んでる、どうして？さらに教師がそこにいながらなぜ子どもが命を落とすのかということが非常にショッキングなデータと共にご紹介されています。日本のメディアでも大きく取り上げられていますが、海外の反応は非常にシビアです。大阪の桜宮高校で起きたバスケットボール部での顧問教師の暴力による生徒の自死事件、これはちょうど刑事起訴された時の教育委員会の謝罪会見があるのですが、ジャパンデイリープレスは早速「小村」と固有名詞を直ぐにあげて実名報道しています。そうした海外のメディアが、非常に早くて敏感でショッキングなニュースをそのままダイレクトに伝えるということが、日本のメディアを越えて海外にも、日本の部活はどうなってるんだと広まっている。

こうした、死亡事故であったり、生徒が自殺に導かれる稀有な例だけではなくて、日常的な部活の風景にも、海外の目線はおかしいんじゃないという角度で注がれている。ジャパンタイムズという、日本で発売されている英字新聞にも記事が掲載されました。キオスクとかで売っている新聞で、これ買っているのは誰かと言うと、日本に住んでる外国人のお父さんとお母さんです。その外国人のお父さんとかお母さんは、子どもを日本の学校に通わせているわけです。そうすると、今日の晩御飯家族で何食べようかなと思っていたら、なかなか子どもが放課後になっても帰ってこない。部活をやっているからですね。土日に娘とショッピングに行こうと思ってもやっぱり部活で居ない。夏休み、やっと家族でキャンプでも行こうと思ったら部活部活部活…いったい日本の部活ってなんなのよ！外国人のパパとママ怒ってるんですけど！という風にニュージーランド人の記者が僕の研究室を訪れてくれて、部活ってなんなの？とインタビューを受けました。記事は、”All-consuming school clubs worry foreign parents." 激しい部活が外国人の親達を困らせてる、悩ませてる、心配させているんだというタイトルで記事になりました。こうして見ると当たり前に思っている僕達のあり方というのが実はちょっとおかしいところがやっぱりあるのだということを気づくきっかけになる、という風に思います。

もう少し客観的な状況として、世界の中学生・高校生のスポーツの状況を見てみましょう。当然ですが世界中でスポーツは行われているわけです。そうしたスポーツが行われている場所は学校だけとは限りません。地域中心型の国、スカンジナビア諸国だったりドイツなどでは学校ではなくて地域でスポーツをすることが一般的です。特にドイツにはフェラインと呼ばれる総合型のクラブがあり、日本でもそれをモデルにして地域スポーツクラブを振興しようとした背景がありますが、学校の歴史よりも古かったりします。街の誕生と共にスポーツクラブが誕生しています。学校が相対化されているわけですね。

一方、学校にも部活はあるけれどもやっぱり地域にしっかりとしたクラブがあり、選ぶことが出来るという国があります。ヨーロッパの多くの国であったり、南・北アメリカ大陸などが含まれます。

そうした中で、学校中心型で、部活・スクールスポーツが盛んなのは中国、韓国、あるいは台湾、フィリピン、等を含めて東アジア・東南アジアにかたまっていて、中でも日本は大規模に成立していることが特徴的です。中国や韓国などは専門の体育学校にエリート選手が集まって、超ハイレベル部活でオリンピックを目指すみたいな感じで、非常に小規模であり、限られた生徒だけが参加するタイプです。しかし日本の場合は皆さんご承知のようにスポーツがうまくても下手でも、あるいは関心がなくてもみんな部活やりましょうという風になっている。その点で特徴的なところということが出来ます。

そうはいっても、部活があるのは日本だけではないといったので、学校地域両方型のアメリカとイギリスのケースを少しご紹介したいと思います。

アメリカは非常に国土が広大で多様性もあるので、一般化しづらいのですが、カリフォルニア州の部活の様子を調査してきました。ある普通の公立高校では、アメフトが盛んですが、人工芝に恵まれたグラウンドに周りにはトラックがあって、観客席なんかも用意されています。さらにはトレーニングウェイトジムも用意されていて、ヴァースティチーム、いわゆる

一軍の選手が、フィールドでプラクティスをしている間はジュニアヴァースティ、フレッシュメンの、2軍、新入生のチームが代わりにウェイトトレーニングする、みたいな非常にシステマチックに活動が行われている。ヘッドコーチのマイクさん、ちょっと強面の監視しているようなアシスタントコーチなど、人材を豊富に雇われて、非常に恵まれた環境で活動が行われています。何故そんなことが出来るかというひとつの理由が、お金が絡んでいることです。サブグラウンドの電光掲示板に、「スキポルニアピッツア」というピザ屋の広告が入っていまして。全然有名じゃない街のピザ屋さんが、学校・そしてアメフト部に電光掲示板を作ってあげる代わり、店の宣伝させてくれと、ビジネス取引を行うんですね。そのようにお金が回る仕組みがあります。さらに生徒達自身もお金を稼ぎに行ったりします。街のチョコレート工場に行って、チョコレート100個渡してください、それを学校で売ります、街で売ります、その代わり売上の20%を部費にしていいですか、と。ファンドレイジング・アクティビティといってアメリカの部活の一部として組み込まれています。そのように自分でしたいことを実現するために自分で出来ることをする、お金が必要ならお金も自分で稼ぐという、非常に実践的な活動がアメリカでのタイプ。ただ、お金が絡むと商業主義の問題ももちろんあるので、いい面悪い面両方が顕在化しているのがアメリカの部活、という風になっています。

イギリスはロンドン郊外の部活の様子を見てきました。まあお城があって川があって、いかにもイギリスらしい風景に囲まれた学校でしたが、ここの学校では非常に広大なフィールドでラグビー部の活動が行われ、川ではボート部と、非常にイギリスらしい部活が展開しています。これを見ると非常にイギリスの部活盛んだな、なんて思われるかもしれませんが、これはお金持ちの私立の学校なんですね。私立の学校の場合はお金をスクールスポーツの環境整備に投資して、それを目玉に生徒を集めるという、広告宣伝効果を狙っています。しかし、一方で普通の公立学校ではお金が無い、さらに施設もない、だから部活どころではなくて、体育の授業すら出来ないという状況があります。この背景には、昔イギリスは本当に部活が盛んだったのですが、80年代にサッチャーリズムの政権になって教育や福祉にお金が回らなくなって、どんどん教師の労働環境が悪くなっていき、もう部活なんて出来ないというふうに衰退していった。そういう背景があります。昔を懐かしむ熱血イギリス人高校体育教師にインタビューしてみたのですけど、日本ではまだ部活が頑張っているのか、それはアメイジングだね、と彼は言ってくれました。しかし、現在のイギリスだと、公立学校にはグラウンドがなかったり、体育館がなかったり、ましてプールなんてあるわけないので、体育の授業もいわゆる公共スポーツ施設を4つか5つの中学校がシェアしながら使っており、部活なんてもう出来る環境ではなくなっています。公と私の格差が広がっているのがイギリスの部活のケースと言えると思います。

こうやってイギリス、アメリカ、日本の比較をしてみると、アメリカはエリート競技型、イギリスは1部の人だけが楽しむレクリエーション型、日本はやはり生徒の教育ですよね。部活とは教育だと当たり前のように僕達言いますが、それも海外と比較してみることで実は特殊なひとつのあり方なのかもしれないということを思い返すことが出来ます。

部活動の歴史的背景

では、こうした日本の部活がどのようにできたのか、先程の中塚先生の戦前から部活はあったという話を引き継いで、戦後の歴史的な背景ですね、実はここまで部活が拡大した理由、戦後の歴史にあるというふうに思っています。

中学高校の何パーセントの生徒が部活に入っているか、の加入率の変遷を見てみましょう。1955年辺りでは中学生の半分以下、高校生の3人に1人ぐらいが部活に入っています。それがちょっと減って、またグググっと上がっていって、今では部活参加者が中学生7割、高校生5割。これは運動部活動だけですので、文化部を含めると中学9割、高校の7割ぐらいにふくれあがっています。これをざっと歴史的ステージに分類してみると、今の大規模な部活動の状況は90年代以降に完成していることがわかります。そこに至るプロセスを3つに分けてみます。まず1945年から50年代あたりの始まりの時期。1960年代は、詳しく見ると、中高共にちょっとだけ加入率が下がった後、64年に転換的にググっとあがっています。このターニングポイントに何があったのか。そしてその後に拡大した部活動は、そのまま拡大し続けます。70年代、80年代の拡張期です。この3つの時代に何があったのか、というものを考えていきたいと思います。

はじめに戦後の始まりの時期ですが、学校教育全

体を作り直す、そうした戦後の教育改革が進められました。学校を作り直すって、本当に学校がなかったから、まずは青空学校で始まって、校舎がないところから学校教育はリスタートしました。何を教えるべきか、そのコンテンツもゼロベースで見直されました。いわゆる墨塗り教科書で、軍国主義や、天皇のために死んでこいみたいなものはかき消されて、教えるべき内容も新しく作り直されました。そうしたいわば何も無い状態からスタートする戦後の学校教育の中で、実は部活は光を浴びてます。第 1 回陸上インターハイの写真を見ると、優勝した子供たち、この時は旧制中学校の名前が出ていたのですが、そうした子供たちが非常にいい笑顔をしています。やっぱり、思う存分好きなスポーツを楽しむ、そして勝った喜びを味わうということが戦後の荒廃した時期だったからこそ非常に価値あるものとして受け止められました。その裏側に何があったのでしょうか。第一回目の日本の終戦記念日、初めて迎える 1946 年 8 月 15 日、復活した甲子園野球の開会式が行われました。そこに立ってスピーチをしたのはポール・ラッシュという GHQ 将校でした。戦前から親日家として日米の橋渡しをしていた人物です。彼は今だとアメフトの父などと呼ばれているのですが、非常にアメリカ人らしくスポーツ、それを通した人間形成という所に非常に力を込めて語っています。部活は日本の戦後社会を作り直す上で重要な原動力になるはずだ、子供を育てるその時にこのスポーツを活用しようじゃないかと、甲子園復活なんかもバックアップしながら、こうしたスピーチの舞台に立ったのです。それで、この当時、米軍機が空を飛んでアメリカから白球をもたらし、日本の子ども達にプレゼントされるという報道がありました。これは朝日新聞で勉強しました。そうした戦後の文脈において部活動が価値づけられました。少し整理しておくと、軍国主義として戦争の時代に日本の教育が失敗した。これからはそうではないのだ。スポーツを自由と自主のシンボルとして掲げる運動を原動力としながら、一層自治を大切にして、部活をやって行く。これからは民主主義、その民主主義的な価値というものが、部活動に与えられた。これが戦後の出発点だったのではないかというふうに思っています。

そうして始まった部活ですが、その次にさきほど 64 年がターニングポイントだとお話しました。64 年、第 1 回目の東京オリンピックがありました。日本中が熱狂した。僕はまだ生まれていませんが、父親や母親からよく話を聞いています。この時に部活がどうだったのかという話ですが、64 年東京オリンピックの前と後で比較したいと思います。64年の前、部活は選手中心主義になってしまっていました。オリンピック招致決定したのが59年ですが、その辺から大会で勝つために部活を変えていこうという動きが強くなりました。技術レベルを向上させよう、生徒の体力を増強させよう、オリンピック競技の成績を上げるために競技連盟に協力しよう、中学校にいい選手がいたら中体連に繋げ、高校生は高体連に繋いで体育協会に繋いで JOC に繋いでそして金メダルをとろう、と部活動のあり方が非常に選手中心主義になっていきました。そうするとあまり競技が上手くない生徒が参加しづらくなったり、さらに下手な生徒は立ち見でもしとけ！という風に排除されたりしていく、という問題が起きました。するとオリンピックが終わったあとに、あれで良かったのかな？という反省が起きました。スポーツを大衆化していくべきではないか、選手中心主義はやっぱり良くない、みんなで平等にスポーツをやる必要がある、部活は平等主義的でなければならない、という転換が東京オリンピックの反動として行われたと思っています。こうすると民主主義的な価値を持った部活を平等主義的に展開しようとする。どんどん部活が拡大していくわけですね。拡大していくともちろん教師がそれを支えるのが大変になってきます。でも、そんな教師も部活動は大変だけどやっぱり部活動を手放せないと思った。なぜか。その次の時代はこんな時代でしたね。

スクールウォーズ、スラムダンク、ろくでなしブルース、ルーキーズと怖い兄ちゃん達が部活で頑張る物語が流行すると共に、部活を非行生徒の更生に使おう、生徒指導を通じて非行予防しようという実践が展開して行ったのです。ここでは実は部活×不良生徒＝感動の物語みたいなのがメディアを席巻して、僕らはそれを享受しました。ああやっぱり部活いいね、教師になって部活指導したいな、生徒もあれくらいやんちゃ坊主でも部活動で頑張る、部活にはそうした素晴らしい側面があると強調されました。この背景には生徒の非行問題というのがありました。これはもちろん教育的には良くない、だからスポーツを非行防止に活用しようという流れです。当時の教師の手記などを見ると非行防止に部活が大変に役立つとの記述が多く、毎日夜遅くまでずっと部活動をしていいのだという管理主義の側面が出てきました。だから部活の拡大は止まらなかったのです。

戦後史をまとめておくと、こういう風に整理が出来

るのではないかと思っています。戦後教育改革を背景に自由と自主のシンボルとして部活は民主主義的な価値を得ました。東京オリンピックを背景に選手中心主義から平等主義に舵を切りましたが、生徒の非行防止、生徒指導の手段として部活を使う管理主義が広まってきました。民主主義と管理主義、真逆で矛盾しているのではないか思います。しかしそういった矛盾を抱きしめながら進んできたのが戦後の部活の歴史だったのではないかと思っています。

部活動の重要課題

最後に、駆け足で今どうなっているかも含めて部活の重要課題を指摘していきたいと思います。部活をしなさいとは、実は法的にどこにも書いてないのです。学習指導要領というところでは自主的・自発的な参加という文言があります。つまり部活は自主的な課外活動ということです。これは大前提ですね。確かにケガの補償だったり、教員への手当て、都市伝説がてらに内申書と推薦への影響があると言われるのですが、それでも部活をしなさいとは言っていません。部活に関連する制度があっても、直接的に部活をしなさいと言う法律はなく、あくまで部活は自主的な課外活動です。

でも、本当に生徒は自主的なのかと見てみると、僕なんかは疑っています。中学生９割、高校生７割が部活で頑張っていることになっているのですが、中学生に悩みを聞いてみると半分以上は悩んでいます。高校生もやっぱり半分以上は悩んでいます。部活動が忙しいなか学業との両立が大変だな、身体だるいな、という中高生がいるのです。生徒の部活動への所属を見てみると、全員所属しなさいという学校のルールで強制参加をさせている中学校が全体の３割くらいです。自主的なのに強制参加、おかしくないかと思います。

一方で教師、確かに仕事として教育をするのが教師ですが、部活が職務なのかどうか。教師全員に部活の顧問を命じるという、全員顧問制がとられている学校が９割近くになります。これが教師の労働環境問題として議論される論点になります。教師は大変なんですね。今は９割以上の教師が顧問についていますが、中学・高校で悩みを持っていないという教師はほとんどいません。忙しい、心身疲労、休息不足、もう限界だと悲鳴をあげている教師がいます。

こうした状況を踏まえて、本発表では喫緊の課題として２点指摘します。ひとつは生徒の命を守るということです。死亡事故や暴力、部活で看過できない死亡事故が起こり続けています。柔道事故など取り上げられました。桜宮高校の生徒はなんで僕はあんなにシバキ回されなきゃいけないんですかという、結果的に遺書になった手紙を残して自殺を選びました。子どもの命を守らないといけません。もう１つは教師の生活を守ると言うことですね。過酷な勤務状況で苦しんでいる教師がいます。OECD の調査でも日本の教師は非常に働きすぎだということが明らかになっていて、ネットで、ブログで、Twitter で、教師の悲鳴があげられています。「真由子先生」の名前で部活動の顧問制度は絶対違法だと苦痛の声がネットで叫ばれているのです。

部活動のこれから

最後にまとめとして部活動のこれからの論点を踏まえたいと思います。日本のいまの部活は国際的に見て、あるいは歴史的に見て肥大化していて、自主性の建前があるにも関わらず強制の実態がある。だから、部活動が当たり前ではない、このままいくと成り立たなくなってしまうと、システムの持続性を改めていくということを議論すべき論点としてあげたいと思います。その中で僕が重要と思う第１歩は、重要課題を解決することです。子供をまもる、教師をまもる、この辺りが１番大事になるのではないかなと思います。皆さんとこのシンポジウムを通じて色々考えを深めたいと思っています。

こんな話は『そろそろ、部活のこれからを話しませんか』という著書に書いてあるので、もしよければ読んで下さると嬉しく思います。以上です。

中 塚　ありがとうございました。部活動を語ろうというこのシンポジウムのテーマの基礎となる部分を中澤さんにレクチャーして頂きました。
２人目の登壇者、中小路さんは、現場でジャーナリストとして、部活動のことや、近年では「体罰」・暴力の問題なども取材されています。私も家で朝日新聞をとっているので、中小路さんの記事で勉強しています。今日は生の声でレクチャーお願いします。

日大悪質タックルと体操問題から見えるもの

中小路徹

文章も喋りもそんな得意では無いですけど、25 分お話させていただきます。自己紹介致しますと、僕は中学、高校、大学とサッカー部でした。ブラックかブラックじゃないかと言うと高校がかなりブラックでした。殴られるわ、恫喝されるわ、いきなり顧問が怒り出すわで、なんで怒られているのかよく分からなくても、やっぱりその結果顧問の顔色をみてサッカーをしていました。自分も思考停止になって、楽しくない中なんとかやり切ったものです。ただしそのやり切ったことが糧になっている部分もあるから、そういう指導法もありなんだ、という風に、新聞記者になってからも考えていた時期がありました。しかし、こういう取材をするようになって、やはりこれは間違いだと思うようになりました。ですから、今日の話は僕の高校時代を反面教師にしている部分があります。映像・画像は使わないでレジュメに基づいてお話致します。

演題は「日大アメフト部の悪質なタックルと体操の暴力問題から見える部活動の課題」とさせていただきました。もうここにいらっしゃる皆様はご存知かと思いますが、昨今とにかく色々な競技団体で色々な不祥事と言われているものが起こっています。レスリングから始まってアメリカンフットボール、ボクシング、居合道。あと体操、最近は重量挙げと、どこで何が起こっているのかが分からない状態になっています。それぞれ背景はあるのですけど、今日の「部活動を語ろう」というテーマから見た時に、やはりひとつは日大アメフト部の悪質タックル、それからこの前の体操の暴力行為の問題、この 2 つは日本の中学、高校の部活動にも根っこのところですごく結びついている問題だと思います。地続きの問題だと思っていますのでその部分、どう言った現象が起こっていたのかということと、課題は何かということを整理してお話したいと思います。

過度な上意下達=生徒の自主・自治性が弱い環境

まず日大アメフト部の悪質タックルから見える現象というものを 3 つに分けて整理したいと思います。

ひとつは過度な上意下達と言えると思います。これは逆に言うと生徒の自治・自主性が弱い環境が如実に見えたと言えると思います。あの事件、起こったのは 5 月 6 日です。日大と関学の定期戦、皆さん YouTube 等で画像映像をご覧になった方ばかりだと思いますが、関学のクォーターバックがパスをした 2 秒後、横から物凄い勢いで日大のディフェンダーが走ってきて後ろからタックル、それで怪我をさせます。非常に悪質なタックルだったわけですけれども、これがあの映像として一般の目に触れて大問題になりました。日大の監督・コーチが指示をしたかどうかということが焦点になりました。関東学生アメフト連盟と日大の第三者委員会の調査では指示したというふうに断定され、監督は処分されたという経緯を辿っています。これは皆さんも同じかと思うのですが、私がこの映像を見て 1 番最初に思ったのは、もう成人である大学生が明らかに酷い反則であるということが分かっていながら、なんでこんなことをやるのだろうというところでした。その答えは実はタックルした本人が記者会見で説明しています。「監督とは意見を言える関係ではなかった」と言っている部分です。そのチームでは、過度な上意下達、監督の言うことは聞かなければいけない、コーチの言うことも聞かなければいけない、そんな逆らえない空気が思考停止を起こさせていて、冷静な判断が出来ない状態になっていたということが言えると思います。その結果、あの選手はいったん干されていた状態、日大的に言うと「ハマる」という言葉があるらしいのですけど、その状態になっていた中で、試合の出場といわば引換に「潰してこい」と言われま

す。監督やコーチが本当に怪我させろと言ったかどうか、そういうつもりで言ったかどうかは調査でも言い分はバラバラですが、いずれにせよ、それを本当の指示だと受け取って、実際に盲信していたということが事実認定されています。過度な上意下達という言い方をしていますが、これは指導者の側からいうと、厳しい指導と強圧というものの履き違えと言えると思います。スポーツの主役は誰なのかと考えた時に、当然選手だと考えるのが正常な訳ですが、ここはそうではありませんでした。選手に壁を越えさせるため、何か脱皮させるため、そういった意味では厳しい助言というものは必要かも知れません。ただし、何かをしろと一方的に命令すること、それに従わなければもうどうにもならないような雰囲気を作ること、これはまったく違う話で、それは強圧になります。一方、過度な上意下達というものは、率直に言って選手達にも問題があると僕は思っています。どういう問題があるかというと、結局は黙って従っていたのだ、という考え方が出来るわけです。彼ら一人一人の個人的な経緯はよく分かりませんけれども、一般的に言えることは、日本の場合、小学校から、中学校、高校と、指導者の顔色を見ながらプレイしてしまう傾向にあります。そんな中で自己判断力、それから仲間とコミュニケーションをとって自分たちで何か決めていく力であるとか、そもそもそういうふうにしようという発想そのものを喪失してしまいながら、大人のプレイヤーになっていき、その行き着く果てが、残念ながら日大のアメリカンフットボール部だったというふうに僕は見ています。

もう１つ、この過度な上意下達という構造の中で、忘れてはならないのは、実はあのコーチ達もその上意下達のいわば中間管理職的な存在でいたと言うことですね。あのコーチ達は選手達に非常に高圧的にものを言ったり、従わせたりするわけですけど、そのコーチ達も結局、監督、彼は大学の学校法人の幹部でもあったわけですけど、そういう立場の監督から何か言われた時に、従わざるを得ないと言う構造に取り込まれていたわけです。そういった現実の中で、二重構造の上意下達の中で、がんじがらめになった状態で、起こった事件だというふうに見ることができます。

どうしたらいいのかというところなのですが、部活動一般の話に置き換えた時に、生徒の自治・自主性が弱い環境で起こったことなのですから、逆、つまり自治・自主性を大事にする指導を広めていくことがひとつの解決法になると思います。この方法では、基本的

には監督と生徒、もしくは生徒同士のコミュニケーションが勝負になります。もうほとんど言葉が勝負となります。そういった中で生徒の意見などを寄せあっていくというような実践が必要です。

実際に、こういう実践例が沢山あります。有名な所では広島の畑喜美夫先生、名前をお聞きになったことがある方も多いかも知れませんけれども、今は安芸南高校サッカー部で、監督をやっています。その前は広島観音高校で監督をやって、インターハイで優勝しています。どういうやり方かというと、練習内容もメンバー選考も、キャプテンを誰にするかも、それぞれの役割なども全部生徒達に決めさせるというようなやり方です。そういった中で自己判断力をつけさせ、コミュニケーションを取りながら勝利に向かって、何をどうすればいいのかをひたすら話し合わせることで、生徒達が自己参加していくという構造を作って、チームを作っていくやり方です。上意下達とはまるで反対のやり方です。

他に私が見聞きしている中では、その畑先生のやり方と似ているのですが、例えば先生の役割と部員の役割をどうするか、部員と先生が話し合って決めるという部もあります。広島観音高校の場合は全部生徒にやらせることを原則としているのですが、山梨英和中学・高校の剣道部は必ずしもそうではありません。例えばメンバー選考はやっぱり一部最終的に先生に判断してもらいたいと、その年の部員が話し合って決めれば、それは先生が介入してもいいとか、団体戦に出る5人のメンバーは自分たちで決めるけど順番だけは先生の順序に従いたいという年もあったとか、練習内容も自分たちで決めるという年もあれば、ある程度アドバイスが欲しいという年もあったりとか、そういったようなことを生徒と先生が話し合って決めるといったような部活動もあります。これはそういう意味では上意下達から脱している部活動だと思います。こういう実践例は草の根で出てきています。

勝利至上主義

日大アメフト部悪質タックルから見える2つ目の現象、これは勝利至上主義です。これは新聞報道でたくさん出ていますが、タックルをしたディフェンスの選手が何を言われたかというと、怪我をさせてもいい、怪我をさせたら秋の大会が楽になるだろう、というようなことを言われているわけです。簡単に言えば相手を怪我させても勝てばいいという、相手へのリスペクトの不在ともいえるような、スポーツマンシップに完全に反するような言葉だと思います。こういった勝利至上主義というのは、汚いことをしてでも勝てばいいということだけではなく、勝つためにはどんな練習をやってもいいのだとか、どんなに長い練習をやってもいいのだとか、そういった所に結びついてくると思います。ひいては暴力行為であっても勝っているからいいではないかと言うように結論づけられることも無きにしも非らず、です。

勝利至上主義が起きる背景として、絶対に無視できない現実には、進学との関係があります。結局どういう指導をされても中学で結果が出て、高校へ進学する時の特別活動の記録、内申書に結果が反映されること

で進学に有利、もしくはスポーツ推薦がとりやすい、という考えがあります。高校も一緒だと思います。大学へのスポーツ推薦を取るにあたってやはり全国大会に出ると出ないとでは全然違う、例を上げると高校野球、甲子園に出るのと出ないとでは全然違うし、全国大会に出てもベスト4に行ったのか、ベスト8に行ったのかで大きく変わってくるということです。そんなところが現実にあって、結果的にまあどんな指導でも、勝たせてくれればいいですと、勝利至上主義によるちょっとおかしな指導でも生徒や親がそれを受け入れてしまうという土壌があるのを、否定できません。

それと逆側になるのですけれども、学校側もこういった指導を結果的に容認している部分があります。それはスポーツを広告塔として捉えている現実があるからです。正直どこの大学の先生でもそれはそうだよねと認めるのが箱根駅伝です。正月の2日と3日に4、5時間、視聴率30%、40%、ずっと大学の名前が出るわけです。これが本当に受験者数の増加に繋がるのかどうかまで実証できているのかわかりませんが、かなりの広告効果があるというふうに皆さん認めているわけです。やっぱり箱根まず予選通りたいよね、という話になってくると思うのです。これはどのスポーツも同じで、高校野球、やっぱり甲子園、NHKで2時間半ずっとその学校の名前が出る。やはり広告塔としての価値がある。そういった中でこの勝利至上主義を学校も認めてしまうわけです。

こういったところをどうするのかですけれども、結局は部活動のあり方としてはプロセスを大事にするという価値観の浸透が求められると思います。もちろんスポーツですから勝つためにするというのが大原則ではあります。もちろんそれが無ければ面白くもなんともありません。ただ、やはり進学するにあたっては、どういうふうに頑張ったかなど、そういった方向に評価の比重を高めていくような仕組みが求められるのではないかと思います。

閉ざされた世界

悪質タックルの問題点の3つめ、これはキーワードとして「閉ざされた世界」と言わせて頂きます。スポーツは選手選考が絡みますので、みんな上の言うことを聞きます。選手は指導者の言うことを聞きますし、指導者は代表選手を送り込むかどうかという点で見ると、競技団体のいうことを聞きます。そうなってくるとやはり選手も指導者も結局上に対してものが言えない雰囲気になってきます。それがカリスマ化、独裁というものを生んでいくことになるわけです。日大がはっきりそういう構造でした。

最近の一連の不祥事ですけれども、これは発生としたということではなくて、ずっと発生していたものが発覚したというふうに見ています。これまで起こっていたものが、今までは声を挙げられなかった選手達がSNSとかインターネットで声をあげ始めることによって、社会がそれを後押しすることで発覚し始めているのだと思います。逆に言うと閉鎖されたスポーツが社会の流れについて行ってなかったと言えるかと思います。

こういったものが明るみに出ていること自体が、それを改善する方向になるとは思うのですけれども、部活動に関連付けて考えると、長時間部活を解消することがこのスポーツの閉鎖性の壁を取り払うことに繋がっていくと思います。長時間部活を無くす、イコール生徒にゆとりが出ます。色々なことをやるゆとりが出ます。家庭での生活、勉強もそうですし、例えば地域で何らかの活動に参加する、あるいは友達同士遊ぶ。そうすると部活に入ってない人と付き合って、なんかお前の部おかしいよ、みたいな話になって、自分でも気づく機会にもなっていくわけです。それはスポーツさえやっていればいいという考え方の転換にも繋がります。

それともう1つ制度的には部活動のあり方に第三者の目が入る、開放性というものをとり入れた方がいいと思います。今現在、色々な競技団体とか自治体の教育委員会等にも、内部通報制度というものがあります。それから暴力指導を受けた時の相談窓口もあるにはあるのですけれども、これが有効に使われていません。なぜ使われないかと言うと、指導者たちが所属している組織の中にあるからです。例えば、あるスポーツをやっていて、そこのスポーツ指導者から暴力を受けている、あるいはハラスメントを受けているとします。これを訴えたいと思った時に同じその競技団体の窓口に相談しても結局その中で黙殺されてしまうのではないか、あるいは、こんなやつがこんな相談してきてるぞと広まってしまって、かえって自分が不利な目にあうのではないか、というような懸念が生じます。そういった意味ではスポーツ界から距離を置いた第三者の相談機関、そういったものを構築することは必要だと思います。JOCにもあるのですけれども、選手から見るとJOCもその中の1つ、その競技団体の中というような捉え方になってしまいますので、もう少

し外側でそういったものをつくり、その存在を広く知らしめることが大事だと思います。

なぜ、暴力指導が生まれるのか

最後に、暴力指導の問題に言及したいと思います。体操の方は、今塚原夫婦のハラスメントが問題になっているのですが、実際にはあのハラスメントがあったかどうかという問題と、体操の宮川選手が暴力をふるわれた速見コーチ、この前記者会見されていましたけれども、あの方が犯した暴力行為は、また別の問題と考えてよいと思います。速見コーチが記者会見で「自分も叩かれる指導を受けて、それに感謝していました」と言っています。最初記者会見に出てきて速見コーチを擁護した宮川選手も同じようなことを言っていました。そういうことをされて、自分は暴力だと思っていないという様な言い方をしています。これはそういう指導を受けた人はそれを良いと思って、指導者になった時に繰り返してしまうという負の連鎖です。児童虐待と似ています。

それともうひとつ、速見コーチは「良くないと分かっていながらイライラして我慢できず叩いた」と言っています。これは暴力指導は常習性があるということです。他に、最近でてきた日体大の駅伝の渡辺監督の件は日体大が発表しているのですが、やはり会見した時の報道資料によると、渡辺監督は「その行為は認めているが暴力ではない」と言っています。これは一見不可解なのですが、取材してみると、渡部監督はこういう考えだそうです。自分が暴力行為をしながら、自分はそうやって指導する人間であり、選手はそれを分かって入ってきている、と。開き直りとも取れるのですけれども、いわば選手の側と合意があるという考え方でやっているということになります。

暴力問題は、2012 年に大阪の桜宮高校の男子バスケットボール部の主将が、顧問から受けた暴力を理由のひとつに自殺して以降、ずっと根絶に向けた努力というものはされているのですが、いろいろな形で残っています。これを解決するには、先程申しあげた負の連鎖を切断する必要があります。これは今いる指導者にやめろと言うだけではなくて、選手達に「それはダメなんだ」という意識を植え付けるということで、この動きは拡大していくでしょう。それともう 1 つ、児童虐待と同じような常習性の構図がありますので、1 回そういったことをやってしまった指導者というのは一旦スポーツ現場から引き離す必要があると思います。そういった意味では体操の宮川選手がなんと言おうが、速見コーチは 1 回指導現場から引き離す必要があったわけです。その後、いわば禊を済ませてもう 1 回復帰させるということはありだと思います。その時にまたやってしまったらこれはもう完全に引き離す、というようなことが必要だと思います。

すみません、少し各論になってしまいました。部活動の問題は色々ブラックなこともあるのですが、僕の考えは、何がダメなのかという分析と共に、現場でどういう実践が成されているかを共有することが必要だと思っています。宣伝になってしまって申し訳ありませんが、『脱ブラック部活』という著書にそれを書かせて頂いていますので、もし宜しければお手に取って頂きたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

中塚 ありがとうございました。最近次から次へ出てくる暴力問題やスポーツ界の不祥事ですが、メディアの側から色々取材される中で、そういうブラックなところだけでなく、良いところも、良い実践もあるのだということがその本に紹介されておりますので、是非手にとってみてください。

次の演者は嶋崎さんです。ラグビーの指導をずっとされており、今も大学の方で指導されています。ここでは暴力問題とはちょっと違う視点－少子化問題を取り上げ、どうやってこの大きな問題に取り組むか、そのあたりを中心にお願いします。 S

少子化時代の部活動

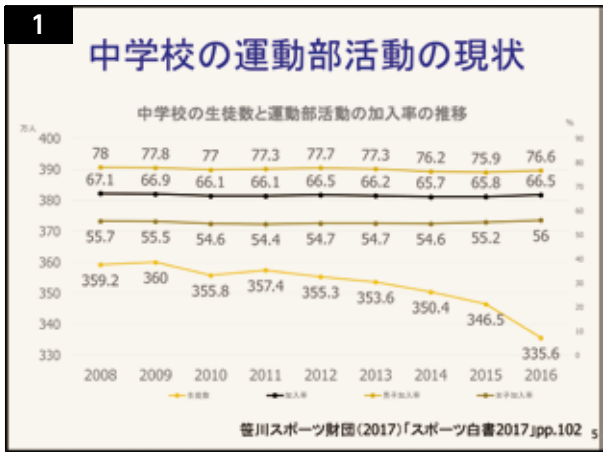
嶋崎雅規

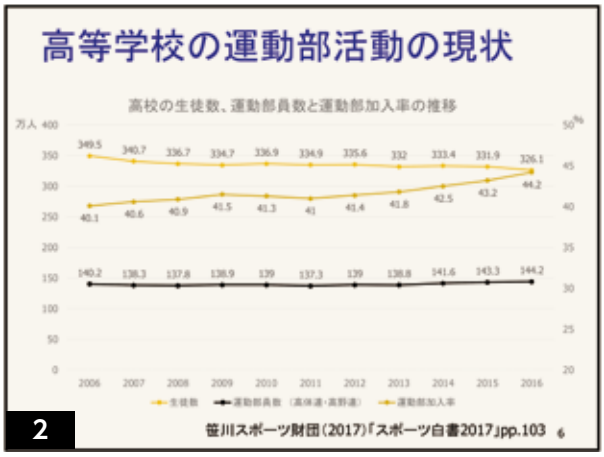
こんにちは。ＮＰＯ法人サロン 2002 で理事を務めます国際武道大学の嶋崎と申します。どうぞよろしくお願いします。まずはこのような機会をいただけましたこと非常に感謝しております。まず、簡単に自己紹介をしたいのですが、私ちょっと変わった経歴を持っていまして、大学は文学部日本文学科の卒業です。帝京高校で教員をしておりましたけれども、国語科の教員です。古典文学を専攻しておりましたので、源氏物語とか伊勢物語とかを教えていました。そういう人間が部活どっぷりになるわけです。帝京高校で 29 年間ラグビー部の指導に当たってきました。帝京高校はスポーツで全国的に名前を売った学校の一つです。そんな学校の中にいて、自分も最初は威圧的な指導をしていました。しかし、これでいいのかと疑問を持ちました。そこで、2000 年から 2 年間筑波大学の大学院に通い、体育経営学研究室で修士論文を書きました。そのときのテーマが「数校合同運動部活動を検証する」です。そういう経緯がありまして、2015 年から現在おります国際武道大学の体育学部で教鞭をとっております。高校の教員をしていたときには、中塚先生と一緒に全国高体連の研究部とか東京都高体連の研究部といったところで研究活動を一緒にやらせていただいておりました。こうしたちょっと変わった経歴を持った人間だということをご承知の上で、今からお話を聞いて頂ければと思います。

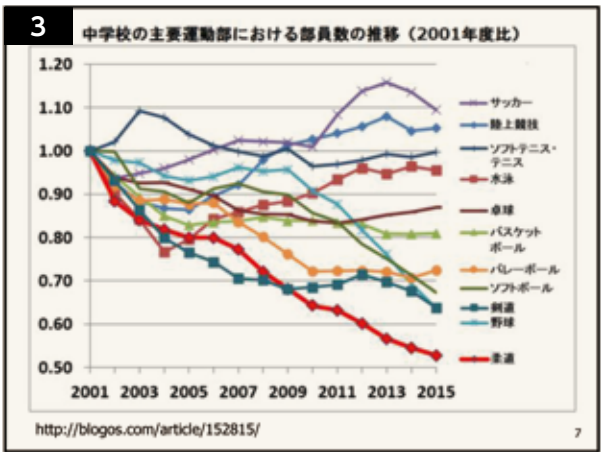
少子化と部活動への参加生徒数の減少

では、本題に入ります。ブラック部活動というのは勝利至上的な活動とか、休みもなく毎日活動するといったことです。それも問題なのですが、実はこの陰には、少子化で生徒数が減って、部活に参加する生徒の数も減って、なかなか部活が成り立たないという問題、あるいは生徒の数が減れば当然教員の数も減らされて、顧問のなり手がいないとか、顧問の先生が高齢化していくとか、専門の指導力がない、その競技を経験したことのない先生が顧問になっているという問題があります。

＜資料 1，2＞まずは、中学校の運動部活動の加入率（中体連に加盟している競技）ですが、だいたい 66.5％、中学生が 335 万人ほどいるのでそのうち 230 万人くらいの中学生が運動部に入っています。高校生は 44.2％、高野連・高体連の加入人数で 144 万人くらいの高校生が運動部に所属している、ということになります。＜資料 3＞これは競技によって、極端に差があります。2001 年から 2015 年の 15 年間で、例えば柔道は中体連の加盟部員数が半分に、剣道・野球は 60％、ソフトボール・バレーボールは



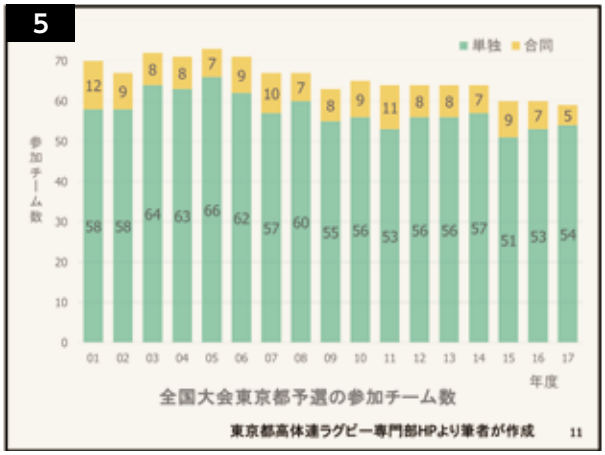


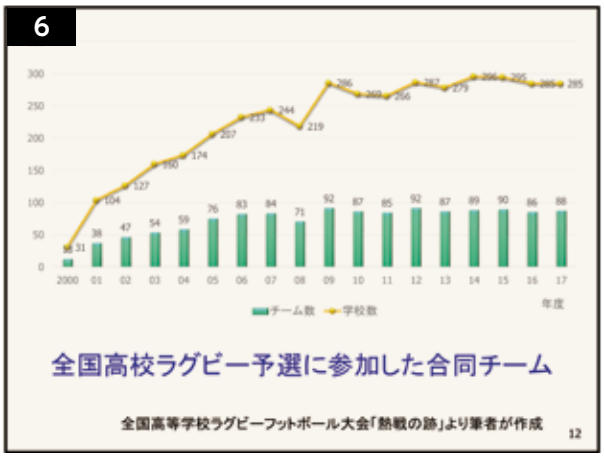


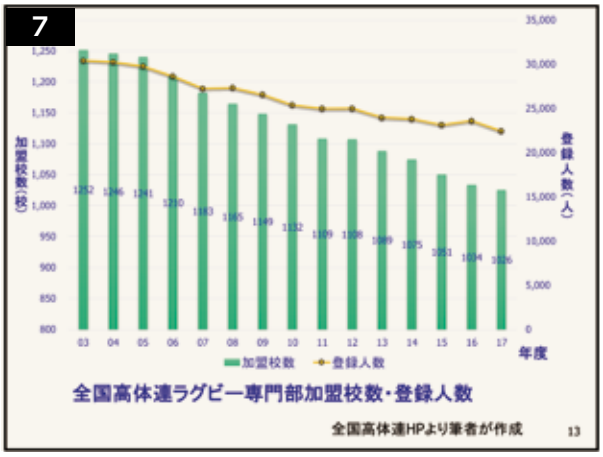
70％に減っています。一方で、サッカー・陸上は全然減っていない、むしろ増えているという状況にあります。部活動に入る生徒は少ないと言うけれども競技によってかなり差があることを認識しておく必要があります。

複数校運動部活動の現状と課題

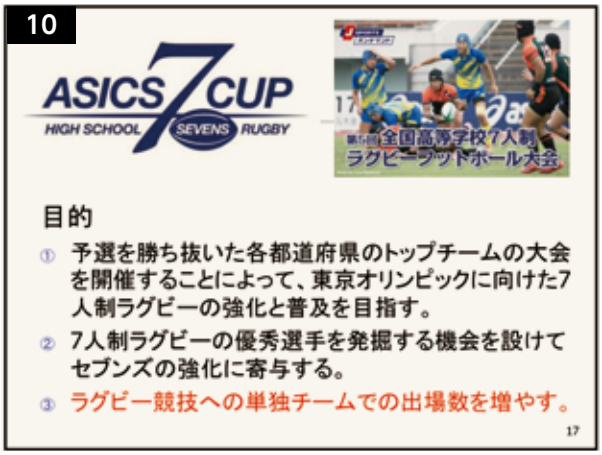
＜資料 4＞全国高校ラグビーの東京都予選に参加した学校数（チーム数）は 1991 年が 134 校、10 年後の 2000 年は 44 校と、3 分の 1 になっています。15 人を揃えることが難しいため、急激に落ち込んでいます。2001 年からチーム数が増えているのは合同チームで参加しても良いと言うことになったからです。東京都高体連がラグビー専門部で 1995 年から 10 人制大会を行い、その大会に 99 年度から合同チームの参加を認めました。2001 年度には全国大会予選にも合同チームの参加を認めました。何とか参加チーム数を確保しようとやってきています。＜資料 5＞昨年は 54 校が単独チームで出ていて、20 校が 5 チームに分かれて、合計 59 チームで全国大会予選を行いました。こういうことをして部員数が減らずに済んでいるのかというと、そんなことはありません。加盟校数は 91 から 80 に、部員数も東京都の登録人数は 2000 人越えから現状 1800 人くらいまでに減りました。これは全国的な傾向です。＜資料 6＞全国でどれくらいかというと、285 校が 88 チームに分かれて各都道府県の大会に出場しています。＜資料 7＞それでも現在加盟校数は 1026 校で 200 校減っています。登録人数も 3 万人くらいいたけれども、現状 2 万 2 千人くらい。非常に大きな勢いで減っていて、歯止めはかかっていません。＜資料 8＞それに対応して KOBELCO CUP 2018（全校高等学校合同チーム





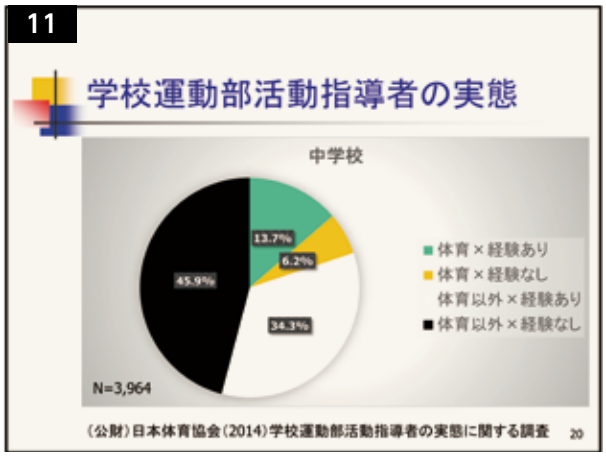


ラグビーフットボール大会)、要は 15 人揃わないチームの選抜を各都道府県でつくり、ブロックで予選を行います。関東ブロック代表としてオール東京アンダー 18 が出ました。この大会は 14 回目で非常にメジャーになっています。＜資料 9＞そして、2009 年 1 月 7 日から、ここに出た選手達の中で東西の代表を選んで、花園の全国大会の決勝の前座で、U 18 合同チーム東西対抗戦を行っています。ラグビーは 15 人に満たないチームに対して非常に手厚いことをしているのですが、それでも部員数の減少が止まらないのが現状です。これは私の修論の研究ですけれども、合同部活をやってもうまくいかないという例ばかり。移動に時間や費用がかかり帰宅時間も遅くなる、学校行事の関係により合同練習の日程調整が難しく十分な練習時間や練習回数が確保できない、部員間のコミュニケーションが上手く取れない、これは学校の生徒の気質によっては上手くいかないことがある。例えば工業高校と進学校では生徒の雰囲気が違って上手く合わなかったりする。上手くいった例もあります。例えば麻布高校と開成高校で合同チームを組んだら非常に上手くいってとても強くなった，そういう話もあります。そういうところも非常に難しいところです。それから、運営組織がしっかりしていないため組織的な活動にならない。これは大会ごとに 15 人に満たないチームをくっつけますから、なかなか継続的に活動することができないといった難しさもあります。最近は、まず東京オリンピックがありますから、7 人制ラグビーがオリンピック種目になって、高校生も ASICS CUP といって 7 人制の全国大会をやっております。＜資料 10＞当然これは東京オリンピックに向けてというところですが、7 人いれば大会に参加出来るので何とかして単独チームを増やそうという取組にもなっています。ここで面白いのは、学校教育法で定めた高等学校のチームというのが、高体連主催の大会の参加基準なのですが、この大会にはラグビーフットボール協会に加盟している高校のラグビー部の他に、クラブチームも参加出来ます。ただ、残念ながら高校生の参加クラブは全国でもほとんどないので、現在は活用できていませんが、今後こういうところが活きてくると思っております。まず少子化を背景にした問題を、ラグビーをテーマに取り上げました。

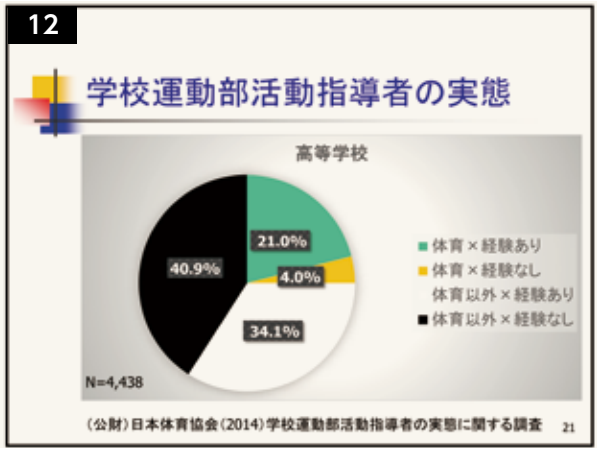


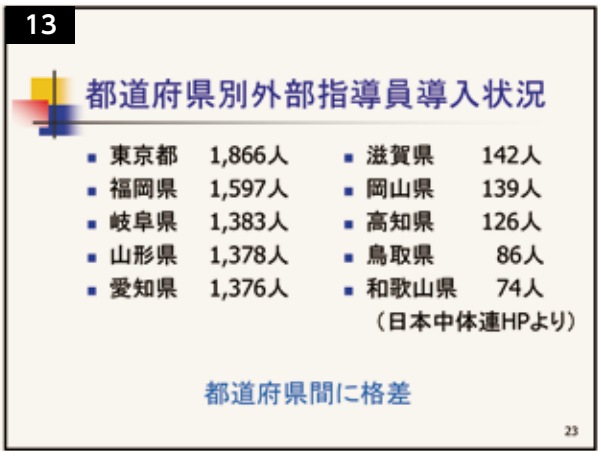
顧問の不足と外部指導員

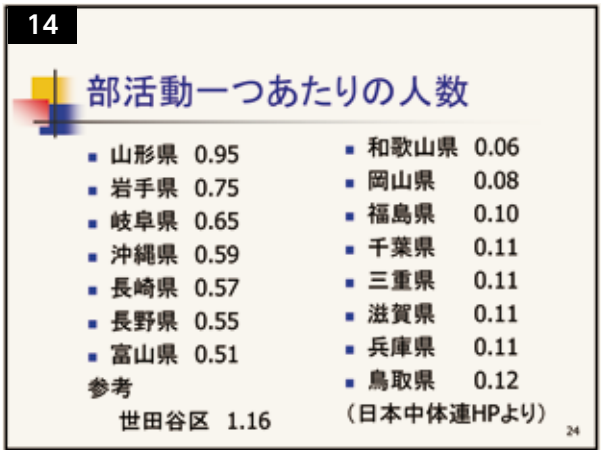
次にもう一つの問題です。先生の問題、指導者の問題



についてもお話します。＜資料 11＞これは中学校の部活の指導者です。体育の先生でその競技の経験がある方、競技経験はないが体育の先生、体育の先生ではないけれどもその競技の経験がある方、ここまでは良いのですけれども、問題はここからです。黒の部分は 45.9%、保健体育の教員でもないし、その競技の経験もない人がこの割合で顧問になっているということです。実際実技指導が出来るかどうかかなり疑問なのです。＜資料 12＞高校でも、40.9%の顧問の先生は保健体育以外でその種目の経験はない。こういう人達が何を考えているかというと、自分自身の専門的指導力の不足なのです。自分ではなかなか専門的な指導は出来ないと思っているわけです。そこで導入されるのが外部指導者です。日本中体連では加盟約 1 万校で約 3 万人の外部指導員が導入されています。色々な競技で数多く導入されています。これもおもしろくて、各都道府県でこんなにも差があります。＜資料 13,14＞鳥取、和歌山では二桁です。かたや多いところは 1000 人代。都市部は分かるのですけど、山形県は不思議ですね。山形県は部活動 1 つあたりの外部指導員の数が 0.95 人。どの部活にもほぼほぼ 1 人は外部指導者がいるということです。山形県中体連に話を聞いたところ、山形県はスポーツ少年団の活





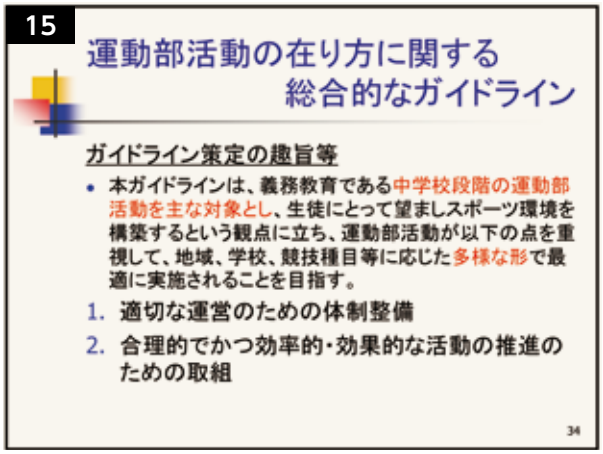


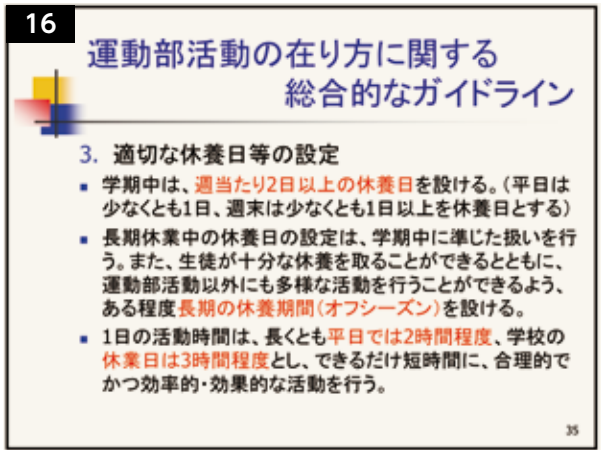
動が非常に盛んで、その指導者が、生徒が中学生になるときに一緒に中学校に外部指導者として入ってくるということでした。ちなみに，世田谷区は 1.16 人。かたや和歌山県は 0.06 人と、ほぼいません。各都道府県によって大きなばらつきがあります。そして、2017 年からは部活動指導員という形で、部活動の指導や大会に引率する人を、学校職員に位置づけて雇用できるようになりました。何がいままでと大きく異なるかというと、学校の先生と一緒ではなくても、大会等へ単独で引率できるようになりました。部活動指導員は、指導もするし、引率にもいけるということです。顧問の先生は協力するだけという形になっているわけです。でもこれは本当に救世主になるのか、これをまた考えなければなりません。まず、部活動指導員に求められる資質能力が今ははっきりしていません。次に、どのように人材を確保するのかというリクルートの問題。また、待遇面では人件費を誰が負担するのか。いちおう、国が 1/3、都道府県が 1/3、市区町村が 1/3 という負担割合になっており、予算化もされています。ちなみに国は平成 30 年度概算要求では 15 億円、7100 人分の供給を考えております。東京都では 700 人分くらいの部活動指導員のための予算を取っていたそうですが、4 月の時点で実際に部

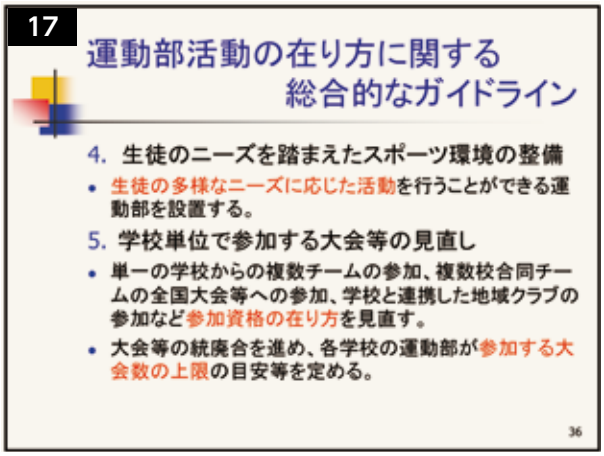
活動指導員として学校に入っているのは約300人と聞いています。実際にはなかなかそういう人材が見つからないのです。平日の夕方指導ができる、かつ単独で引率ができるとなると、学生はやはり問題があります。未成年では無理です。また、待遇面でも、それだけで生活できる状況にはありません。となると、実際なかなか人材が見つかりません。他にもいろいろな問題があるわけですけれども、1番大きいのはここかなと思っています。導入事例を見てみると、世田谷区では2006年から部活動支援制度があって保護者や大学生らが時給1000円程度で雇われています。岡山県では2016年度から運動部活動支援派遣事業として、市町村が人を探して県が雇用するという形で時給2740円、原則1週間7時間以内。だいたい週に2万円で、月8万。やはり生活できないですよね。横浜市でも、外部指導者を市の非常勤職員として雇用して、1回2時間程度の報酬が3000円。月5回ですから1万5千円。これもまた生活できないですよね。ということで、なかなかそういう人は見つからない。それでは、民間業者に委託するという方法もあります。杉並区は古くからこれをやっておりまして、昔は1回500円を参加する生徒が支払う制度でしたが、今は部活動活性化事業で、予算は区の予算で16校、32部活動で専門のコーチを雇っています。大阪市でも委託団体活用モデル事業として、2015年度から8校をモデル校に指定して民間委託をして2500万円の予算でやっています。こういう例もあるけれども、やはり予算措置の問題でなかなか難しくなっていると思います。また、総合型地域スポーツクラブと連携しようという話もあります。2000年に出されたスポーツ振興基本計画で、全国各市区町村に1つは総合型地域スポーツクラブを育成しようということで、現在3550くらいのクラブが地域にあるのですが、そこと連携したらどうかというものです。黒須先生なども「緩やかに活動自体を学校から地域社会に移していくことが望ましい」と言っています。どうでしょう皆さん。皆さんの地域に地域のスポーツクラブと連携した部活動ありますか？なかなかないのです。現在の部活動は学校教育の一貫として位置づけたいということですけれども、学校のみで運営するのは限界です。だから、学校外との連携、地域との関係構築は必要とされているのですが、実際にはその関係構築に至っていないというのが問題です。

持続可能な部活動に向けて…総量規制と多様性

では、これをこれからどう持続可能なものにしていくのかということで、今年出されたのが「運動部活動のあり方に関する総合的なガイドライン」です。＜資料15,16,17＞ よく注目されているのは、週2日の休養日を設けて、平日は少なくとも1日、週末は少なくとも1日以上休養日とする、また1日の活動時間は長くとも平日では2時間程度、学校の休業日は3時間程度という、要は総量規制です。総量を規制し



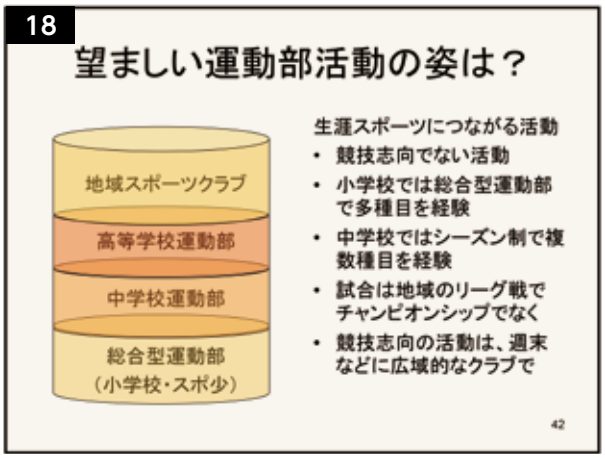




たら学校の先生でなんとか保っていけるのではないかということです。もう１つは、生徒の多様なニーズに応じた活動を行う。これも重要だと思います。それから、学校単位で参加する大会の見直し。つまり、参加資格のあり方を見直し、単独校じゃないと出られないというのをやめようよというもの。それから、参加する大会の数の上限を絞った方がいいのではないのかというようなこと。この辺の議論が大事なのかなと思うわけです。いろいろな問題が出てくるのは、多様性が認められないからです。だから毎日やって、土日も活動するということになるのです。シーズン制の部活とか、いろいろな競技をやる総合型の運動部とか。週に 3.4 日で良いじゃないという話はあるけれど、なかなかそうならないのは、大会のあり方が負けたら終わりのノックアウト方式、常に勝つことが求められるということで、どうしても緩やかな部活動になっていかないからです。実際には、緩やかな部活動の例もあります。例えば世田谷区立の東深沢中学校の体力向上部では活動は平日週４日、朝の 45 分間だけ。目標は体を動かすことです。また、勝沼中学校のラグビー部、山梨県や岩手県のラグビー部の多くは季節限定の部活動です。夏までは他の競技（サッカーや野球、剣道）をやっていた生徒たちが、秋のラグビーの大会にラグビー部として参加するというようなこともあります。ただ、まだまだ少ないというのが現状です。このためには対外試合基準の見直しが１番重要だと思います。中学校はブロック大会、小学校は都道府県内くらいでよいのではないか。高校も基本は地域のリーグ戦、選手権というのは伝統ある大会ですからこれをなくすのは無理だと思いますけれども、基本は地域のリーグ戦、サッカーではＴリーグ、DUO リーグなどが盛んに行われていますが、みんなが日本一を目指すという状況を改革することが必要だと思っています。

望ましい部活動のあり方

＜資料 18＞ 最後に、私の考える望ましい部活動のあり方です。まずは競技志向でない部活動でいいのではないか。小学校では総合型部活動で多種目を経験してもらう。中学校ではシーズン制で２つまたは３つの複数種目を経験。高校になったら種目は１つに絞っても良いけれど、試合は地域のリーグ戦でチャンピオンシップではない形でやっていく方がいい。最終的には生涯スポーツに繋がる活動であるべきではないかと思います。では、今行っている競技者の育成、競技力



の向上はどこでやるのかといったら、週末に広域的なところで、地域の中で選抜した人間を対象にする、オリンピックを目指したいとかプロ選手になりたいという子は、例えばＪリーグの下部組織がやっているようなところへ行って、お金を払ってでもやってもらうということが必要なのかなと個人的に考えています。発表は以上です。ありがとうございました。

中 塚　ありがとうございました。少子化という非常に大きな問題、それから今動いている部活動指導のガイドラインをめぐるテーマ、このあたりを取り上げてもらいました。中澤さんが最初のところで、喫緊の重要課題ということを提起され、その中の重要課題の１つ、生徒の生命を守るという部分を中小路さんのところで話して頂きました。さらに教師の生活を守るという部分は嶋崎さんのところで言及して頂きました。ここから私も話題提供させてください。

ユースリーグとU-18フットサルから見えるもの

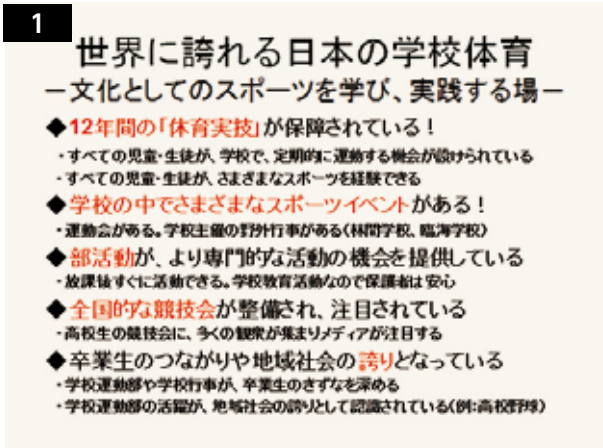
中塚義実

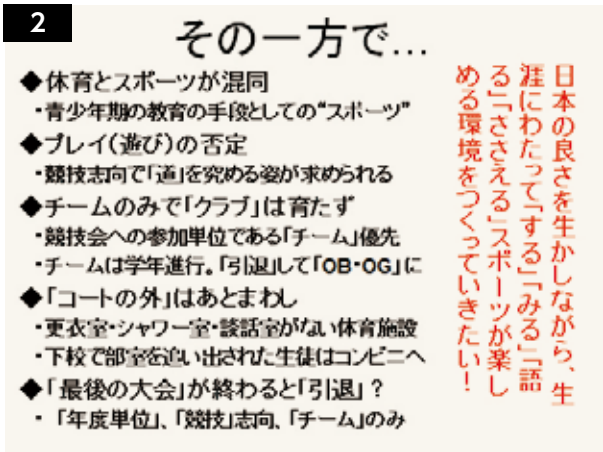
「高校サッカーの現場から」ということで、いまも話が出ましたが、ＤＵＯリーグの話です。サッカーではリーグ戦やってるよという話がありましたが、必ずしもいい話ばかりではありません。ユースサッカーリーグとU 18 フットサルから見えるもの、現場で格闘しながら感じていることをお話させて頂きたいと思います。

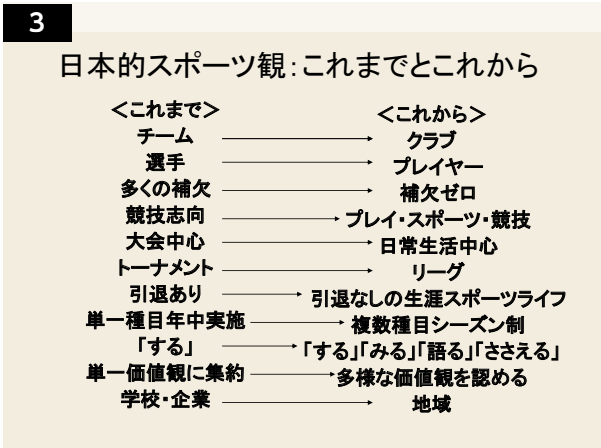
補足資料（P.53）に中塚の与太話として、部活動と私自身の小中高の思い出を載せました。ざっくり言うと、中学のころは熱血根性サッカー部でした。体育大出のばりばりの先生のもと、典型的な部活動です。それが高校時代になると、顧問はいるけど出てこない、部員主導の民主的な部活動となります。これももう一つの典型的な部活動だと思います。高校生だけでいろいろ決めるので、それはそれで大変でしたが、よい経験になりました。大学は筑波大蹴球部で日本一を争う伝統的運動部です。100 人の大規模な組織でもありました。院生の時は、バイト代稼ぎでもあったのですが、今で言う外部指導員なんでしょうか、大学の近くの高校でサッカー部のコーチをやったり、いろいろしていました。そしてこの学校に着任して 32 年、ずっとサッカー部の顧問です。今日は卒業生も何人か来てくれています。おそらく高校時代は相当びびっていたのではないかと思いますが・・・。

学校体育の素晴らしさと限界

現場でいろいろやりながら、もう一方でスポーツ社会学の勉強をしている中ですごいなと思ったのが、日本の学校体育です＜資料１＞。12 年間の体育実技、学校の中でのイベント、部活動の仕組み、全国的な競技会等々。やはりこういったことは最初にも申し上げましたが、嘉納治五郎から始まる戦前の日本の学校スポーツの展開がなせる技だろう、素晴らしいなと思っています。ただその一方で体育とスポーツが混同、プ







レイ (遊び) が否定、チームのみでクラブが育たず、コートの外は後回し、最後の試合が終われば引退と、おかしなことだらけです＜資料 2 ＞。日本的なスポーツ観を「これまで」のものから「これから」に改めていかなくてはならない＜資料 3 ＞。そしていくつかの具体的なアクションを開始しました。

筑波大附属高校蹴球部のことは、お手元の資料に書きました（P.54 ～ 56）。毎年年度末と夏にこういうのをつくって保護者とＯＢＯＧに配っているんですけど、けっこうおもしろい部活です。後でみておいてください。この話は今日はしません。

DUO リーグの誕生と広がり

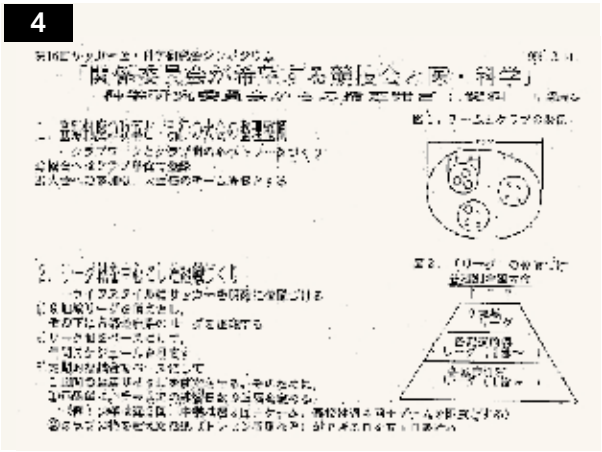
まずはＤＵＯリーグを全国展開していったときに直面した問題の話をします。＜資料 4、5 ＞ちょっと古びた資料が出てきていますが、22 年も前のものです。私がずっと関わっていたサッカー医科学研究会でこういうテーマのシンポジウムがあり、科学研究委員会の一員として 10 分間の発言時間をいただき、当時考えていたことをまとめて発表したときのものです。

リーグ戦のことはもちろん書いてありますが、その前に「登録制度の改革と現行の大会の整理整頓、クラブワークとクラブ間のネットワークづくり」が書かれています。リーグ構想を唱える一方で、皆さんにお伝えしたかったのはこういうことなのですが、はっきりいってこの部分はまだ実現していません。5 番目にある「組織されていないサッカー人口を大切に」ということは、今、サッカー協会のグラスルーツのプロジェクトで取り扱っています。

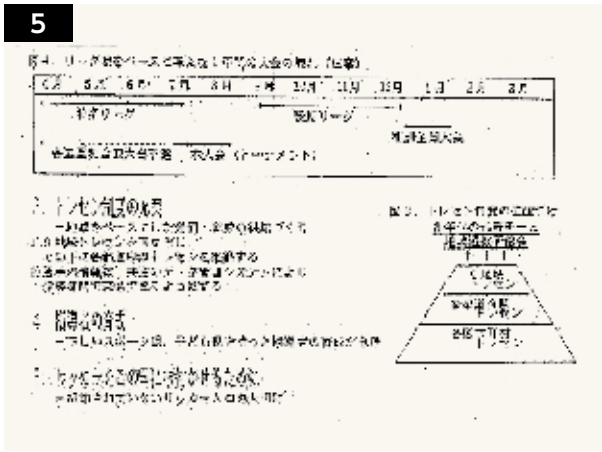
リーグ戦とカップ戦について、大事なのは、リーグ戦は当事者による自主運営であって、選手だけではなく、それを支える人材も、そこに関わるクラブが育てていかなければいけないということです＜資料 6 ＞。こういうメッセージを周囲に伝えるために、「DUO リーグの理念」という形にまとめて、ユース年代のリーグ戦を始めたわけです＜資料 7 ＞。

＜資料 8 ＞ 2 月のサッカー医科学研究会で示した構想を、近所の高校サッカー部やクラブユースの仲間、しょっちゅう飲み食いしている仲間ですが、「やるで！」ということで話をしました。そして 6 クラブ 10 チームで開幕しました。小石川（2）というのは小石川高校から 2 チーム出るということですね。三菱養和というクラブも同志です。いざやってみると、始めれば始まるということがわかりました。9 月の後期リーグ以降、この DUO リーグに入れてくれ

4



5



6

リーグ戦とカップ戦の違い

カップ戦	リーグ戦
ノックアウト方式 （負ければ終わり）	総当り方式 （負けても次がある）
短期間	長期間
シーズン中の単発イベント	シーズンそのものを形成
非日常的な行事	日常生活の一部
移動をともなう	生活圏で行なわれる
主催者が運営	当事者による自主運営

7

DUOリーグの理念

ー文化としてのサッカーのあり方ー

1.「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
サッカーの生活化
2.「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成
チームからクラブへ
3. 強いチームとたくましい個の育成
レベルアップ
4. サッカーをささえる人材の育成
自主運営と受益者負担

8

DUOリーグの誕生（1996）

○2月のサッカー医科学研究会で示した構想を、文京区と豊島区の高校サッカー部、クラブユースの“同志”に伝え、具体化。

○4～7月に6クラブ10チームで開幕

都小石川(2)、都向丘、筑波大附(2)、京華、昭和一(3)、三菱養和

この構想を面白がる、“遊び心”ある大人たちが、“Face to Face”であ

「はじめればはじまる」あたこうだ言いながら作り上げた。

○DUOリーグに「入れてほしい」と言ってくるところには、理念とビジョンを伝え、“同志”であることを確認した上で加盟承認

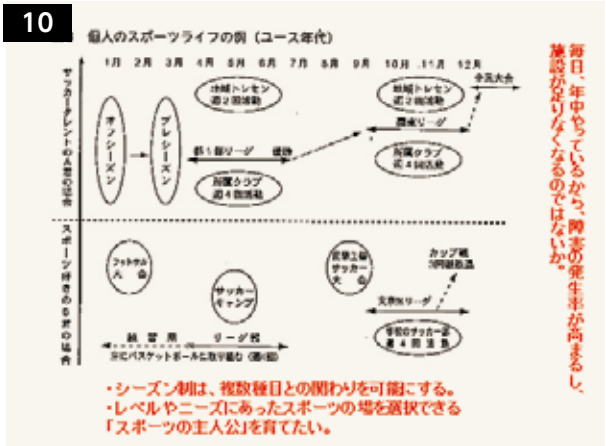
「小さく立ち上げ、大きく育てる」

というところが増えてきたわけですが、無条件では受け入れません。ただ試合が出来るだけではなく、こういう理念に賛同して本気でやろうとするものだけが仲間になれることとしました。参加希望クラブに渡す冊子も作り、ちゃんと読んで理解してから参加してもらう、そういう形で広げていきました。小さく立ち上げ、大きく育てるということです。しかしそんなに難しいことではなくて、この構想を面白がる、遊び心ある大人達が face to face で作り上げました。試合が終わってからどこかに飲みにいって、このリーグの名前何にしようか～と決まったのが「DUO リーグ」です。そんな感じで進めています。

このムーブメントを広げていくにあたって、高体連の教員による研究会で紹介すると、世田谷区や目黒区のあたりでも始まりました。「SM リーグ」です。足立区は高体連では我々と同じ地区なので「入れて」と言われましたが、「あんたらはだめ。足立区でやりなさい。リーグの作り方はこうです」と伝えました。すると「セリエ A（足立）」ができました。こうして、都内各地に広まっていきました。幸いサッカー協会の機関誌に連載する機会を得たり、指導者養成講習会で話をする機会を持つこともできました。＜資料 9、10 ＞サッカー協会の機関誌への連載最終回に、「これからのユースサッカー」というのを書きました。そのときこんなことも構想していました。リーグ戦構想を他のスポーツにも広げ、例えばスポーツ好きのＢ君は、前期はバスケットのリーグに取り組んで、後期はサッカーのリーグ戦に臨む。リーグが整備されていれば、複数のスポーツに関わることも出来るだろうといった構想です。しかしなかなか他のスポーツには広がっていかないのが現状です。

9

10



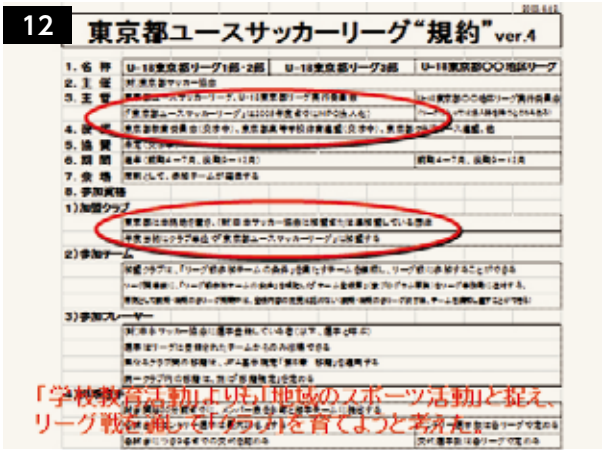
DUO リーグ公認化に立ちふさがった壁

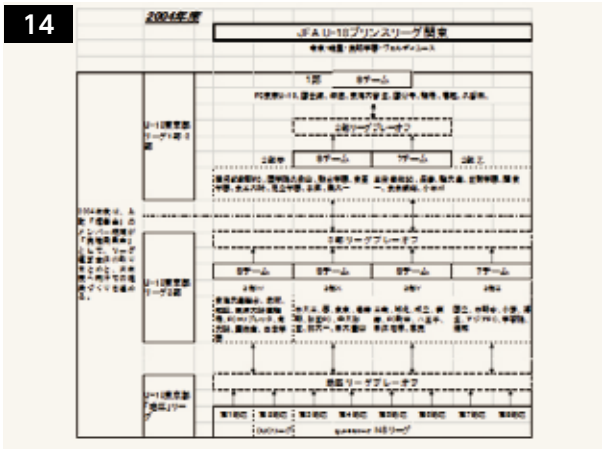
さて、DUO リーグはあくまでもプライベートリーグだったのですが、これを公認化していこうという働きかけを少しずつ行い、高体連、そして東京都サッカー協会へ議論の場を広げていきました＜資料 11 ＞。私はすべて準備委員長として関わり、2004 年の 2 月に「さあやるで！」ということで、暁星高校の講堂に 200 いくつのクラブの代表が集まって総会を開きました。＜資料 12、13、14 ＞このような提案です。当初、「加盟クラブ」という言葉で、年度当初にクラブ単位でリーグに加盟する。リーグそのも

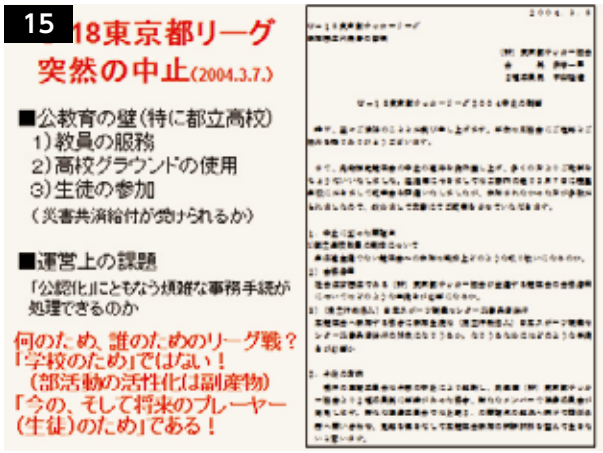
11

公認（U-18東京都）リーグ準備過程

2000年6月 TFA理事会でユースリーグ創設の方向性
2001年4月 都高体連サッカー部ユースリーグ検討委員会発足
（都高体連サッカー科学研究会と同時開催）
2001年度 後期：各地区でプレリーグ実施
2002年度 前後期：各地区でプレリーグ実施
TFA第2種委員会内にユースリーグ準備委員会発足
2003年度 前期：プレ上位リーグ（PJリーグ）
4月12日 東京都ユースリーグ説明会→参加意志確認
7月4日 東京都ユースリーグ全体会
後期：1~3部プレリーグ＆地区リーグ
2004年2月22日 クラブ代表者会議（総会）





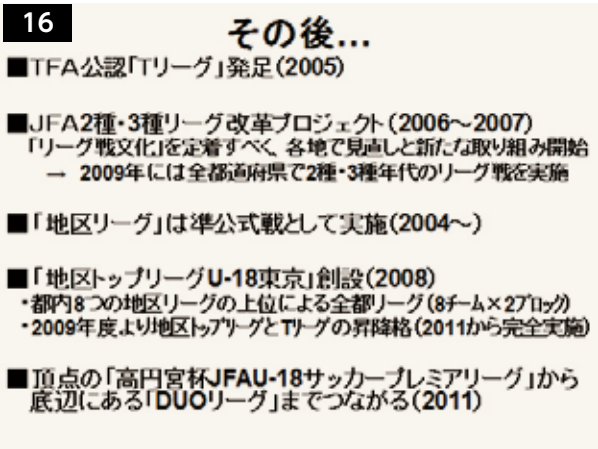


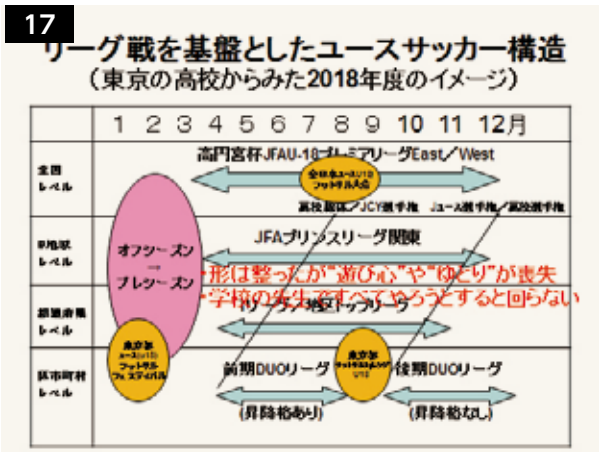
のは法人格を持つ自立した組織となる。つまり高体連でもないし、自分たちで主体的に動ける組織を作って運営していくことを考えていました。つまり学校教育活動というよりも地域のスポーツ活動と捉え、リーグ戦を通してクラブを育てようという考えです。

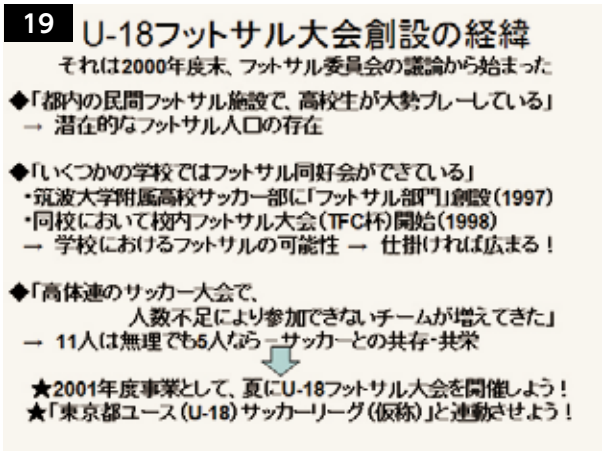
資料 13 の右下にチームとクラブの考え方があります。しかし、実際いろいろ話をしていく中で、「クラブ」という概念がなかなか伝わりません。最終的に仕上がった大会要項では「団体」という言い方になりました。日本サッカー協会 2 種というのは高校生年代ですが、そこに「加盟または準加盟しているクラブ、高校サッカー部、その他」という言い方になり、こちらとしては妥協ですが、高校のサッカー部が高校の教育活動としてこれに参加するような形になりました。2004 年度、割り振りも全て済み、さあやるで！となったのですが、3 月 7 日に突然の中止。＜資料 15 ＞そのための説明会を開き、翌日こういう文書を出さざるを得ませんでした。運営上、オフィシャル化するから難しくなるというのはありますが、それよりも問題は、特に都立高校がこのリーグ戦に参加し、教員が引率する際に、どのような身分で引率できるのかという点です。学校教育活動だったら先生として行けるけれど、このリーグの位置づけは何なのだと。それから、学校のグラウンドはサッカー部だけじゃなくていろいろな部活も使っているのに、サッカーのリーグばかりで使ったらおかしいじゃないかと。また、1 学期で 7 試合位やるわけですが、それは生徒にとっては過重負担ではないかというクレームがつき、中止にせざるを得ませんでした。こちらとしては学校のためにやっているわけじゃない、むしろ地域のスポーツ活動のつもりでスタートしたのですけれども、学校教育活動のお墨付きが求められたときにこういうことが起きるわけです。非常に悔しい思いをしました。

＜資料 16、17 ＞その後、私はこの東京都のプロジェクトからは離れたのですけど、日本協会のプロジェクトのメンバーとしてはこれに関わり続け、全国各地にリーグ構想を広げていくような流れになりました。2011 年からは東日本・西日本の「プレミアリーグ」から 1 番下の DUO リーグまで、サッカー界ではこういう形ができあがって、「サッカーって進んでるね、すごいね」ってよく言われるわけです。

ただ、形は整ったが遊び心やゆとりが喪失しているとすごく感じます。これを学校の先生で全てやろうとすると手一杯です。例えば DUO リーグでも 4 ～ 7 月でリーグ戦を終えようとしているけど、7 月に入っ







てからまとめて試合をやるところが多くあるわけです。4月、5月、6月のところで日程が全然取れません。これが本来のリーグ戦だと言えるのかどうか。

それから“遊び心”がなくなったと思います。最初の講演で中澤さんも DUO リーガーだったという話がありました。大学生がなんで高校生のリーグに入っているかというと、文京区の大学で施設も持っている。うちの高校や巣鴨高校からも何人か行ってるし、リーグに入ってくれたら面白いんじゃない？ということで当時のコーチに話をして入ってもらったのですが、オフィシャル化していく中でそういう遊びの部分は残っていかないわけです。そのタイミングで東京大学も外れてしまいました。「教育」が前面に出てくると、なんかやっぱり、方向性が変わっていきますね。

U-18 フットサル大会の創設

もう一つの話はフットサルです。＜資料 18 ＞これはうちの高校でサッカー部主催の昼休みフットサル大会をやっている光景です。＜資料 19 ＞これは 2001 年度に東京都サッカー協会主催のU 18 フットサル大会を立ち上げるに至った話です。当時、都内の高校生が民間フットサル施設で多くプレイしている、だいたいサッカー部をやめた生徒がやっているという話。いくつかの学校でフットサル同好会が出来ている、うちの学校でもそうでした。それから高体連の大会、先程ラグビーの話がありましたけれども、サッカーでも同様に 11 人揃わなくて大会に出場出来ない、けれど 5 人なら出来るのでは、というようなことで 2001 年度、東京都サッカー協会の事業として U-18 フットサル大会を始めることにしました。＜資料 20 ＞チーム名が個性的で、なんかよく分からないですよね。「エスペランサ東京」はクラブユース連盟に加盟しているサッカーチームです。「はやぶさ」というのは中学の時のサッカー部の同級生でつくったチームで、大会ごとの登録制度だったので仲間とチームを作って大会に出てきました。「南海老名」というのは神奈川のチームなので本来東京都サッカー協会の公式大会に参加資格はないのですが、当時我々も杜撰だったのでチェック漏れです。それから「農林高校」、これもおかしくて、体育の授業でサッカーを選択した生徒がチームを作って参加してきました。施設を借りるのが難しかったのですが、「社会を明るくする運動」、ラジオ体操を進めているところに冠に入ってもらい、小金井市の体育館を借りることが出来ました。こんな感じで第 1 回大会が手作りでスタートです。

20

2001年度　夏

第1回東京都ユース(U-18)フットサル大会

初のU-18フットサル大会開催（11クラブ、12チーム）

優 勝 エスペランサ東京A
第2位 隼
第3位 南海老名PUTA
第4位 農林高校

◆初心者でも参加でき、最後まで楽しめる競技会に！
・初日午前にクリニック。午後から競技会（現在に至る）
・4チーム3グループの1次リーグ。2日目も最後までゲームができる
◆フェアプレー賞を設ける！
・初代フェアプレー賞は「学習院フットサルクラブ白衣軍」
◆「第51回 社会を明るくする運動」事業として開催
・小金井市総合体育館が借りやすくなった
（この頃はフットサルのできる体育館が限られていた）
・クリニック講師は、日本フットサル連盟から派遣（須田芳正氏）

21

2001年度　冬

第1回東京都フットサルチャレンジ(U-18)

夏の大会よりも「競技」を志向（9クラブ、12チーム）

優 勝 府中アスレティックFCコレッド
第2位 GALO FUTSALCLUB TOKYO YOUTH
第3位 エスペランサ東京A、エスペランサ東京B

◆サッカークラブも、オフシーズンのトレーニングとして参加
将来的には、真のフットサル東京一を決する競技会へ
◆スケジュール問題と会場確保の問題
・学校の日程＆サッカー大会（高体連＆CY連）との日程調整
・学校体育館への進出＝筑波大学附属高校での開催！
マナー向上が不可欠 → しかし → ガラス割れ事件！
※同年開催の第1回東京都女子大会でも使用

22

2002年度　夏

第2回東京都フットサルチャレンジ(U-18)

夏の大会は「フットサルへのチャレンジ！」（6クラブ、9チーム）

優 勝 府中アスレティックU-18
第2位 エスペランサ東京FC・B
第3位 SEISHIN FS
第4位 筑附FC・A

◆名称と大会の趣旨を合致させる
・夏の大会は啓蒙的な"チャレンジ"大会（だからクリニックも行う）、
冬の大会はチャンピオンを決する大会
◆参加チーム数は増えず
・告知と日程調整に課題あり
・9チームとコンパクトな大会だったので、密度濃くできた
◆サッカーのリーグ構想と並行しながら
・4～7月、9～12月にサッカーリーグ。8月は各連盟の競技会。
8月のフットサルは、フットサル仲間のチャレンジ大会

23

2002年度　冬

第2回東京都ユース(U-18)フットサル大会

U-15と同時に開催（17クラブ、20チーム）

優 勝 府中アスレティックコレッド
第2位 FC VIVA
第3位 Appeals BOTSWANA、FCイコラーズ

◆U-15、U-18同時開催により、ユース年代の交流促進！
・会場確保にも好都合。その一方で引率問題もあり
◆判定に対するトラブル発生！
・ルールの理解が不十分
・プレーヤーを過剰に興奮させるベンチの態度にも問題あり
◆学校教育活動か、地域のスポーツ活動か…
・学校運動部が増加 → 引率問題
・主催者としては、「責任能力のある大人」の引率が条件
責任能力があるかどうかは、参加者の自己責任！

なかなかおもしろいぞ、ということで冬もやりました。＜資料 21 ＞府中アスレティックフットサルクラブやガロといったフットサルクラブのユースチームが参加しました。筑波大附属高校の体育館を使ったのですが、控室としていた 1 階の小アリーナでは「絶対ボールを使うなよ」と言っていたのに使ってガラスを割ったやつがいて・・・。こういうことの連続です。＜資料 22、23 ＞夏と冬に開催し、夏をチャレンジ大会という形にしました。そして 2002 年度、サッカーのリーグ構想と平行しながら、サッカーのリーグ戦をやっていないときにフットサルのリーグ戦をやろうという考えで展開しました。それで、学校の同好会など学校のチームが参加するようになり、またまた引率問題が出てくるわけです。だけどこちらとしては、参加しているチームには「責任能力のある大人」が引率することを求めているだけで、「責任能力のある大人」が誰なのかはそれぞれのチームでちゃんと考えてくれればいいことです。別に先生じゃなくてもかまいません。主催者としてはこのように言ってるのですが、学校が出てくるとややこしくなってしまいます。

U-18 フットサル大会がもたらした変化

これは「東洋の魔女」の体育館です＜資料 24 ＞。今はもっときれいになっています。うちの学校の体育館でもやってます＜資料 25 ＞。今年の 6 月は全国大会の決勝をここでやりました。お客さんもいっぱい入ります。＜資料 26 ＞

U-18 大会を始めてどうなったかを振り返ります。＜資料 27、28 ＞。やんちゃな奴らが多様なチームに参加してただけでしたが、もっとやりたいという者が増えてきて、自主運営のフットサルリーグが生まれます。最初の 10 年は都内でいくつかの大会を立ち上げ、育てていったのですが、それを横と縦に広げていこうと動き出し、民間主導の全国大会を始めました。日本サッカー協会が取り組む前の話です。

実はサロン 2002 がここに大きく関わっているわけです。名古屋のオーシャンアリーナで、これは第 1 回大会の様子。そして第 2 回大会をやったときに、オーシャンアリーナのフロアで、サロン 2002 の公開シンポジウム「U 18 フットサルを語ろう」を行い、協会や連盟の方にも来ていただきました＜資料 29 ＞。そしてこのシンポジウムがきっかけとなり、高校生世代のフットサル全国大会がオフィシャル大会

24

25

26

として始まりました。一つは日本サッカー協会主催の全日本ユースフットサル大会。それと日本フットサル連盟主催の選抜大会であるGAViC Cupです。高体連主催ではありません。先ほど紹介したサロン2002が関わってきた大会が前身です。

高校生年代の公認大会としてオフィシャルな競技団体が担ってくれるようになったので、我々NPO法人サロン2002は違うところに力を注ぐことにします。各地域に出来つつあるフットサルリーグのチャンピオンを集めたリーグチャンピオンズカップです。totoの助成金を頂き、NPO法人サロン2002主催でやらせてもらっています。今年度で3回目となりま

27

U-18大会をはじめてどうなったか？

・はじめの頃は「やんちゃな奴ら」が「多様なチーム」で参加
・「責任能力のある大人」の帯同を求める（今でも）

↓

・学校のフットサル部・同好会、地域のフットサルクラブが増え、レベルが上がってきた。
・この大会のために編成された「多様なチーム」も参加。
冬の大会にはサッカー部、サッカークラブも参加。
・「もっとやりたい者」「もっとやらせたい者」が増えてきた

↓

・東京の取り組みを全国に発信しよう！
・発信しながら、今後の方向性をさぐろう！

28

はじまりの10年間（2001～2010）」と、「次の10年間（2011～2020）」の位置づけ

◆「はじまりの10年（創設期）」は、"都内"で立ち上げ、育てた期間
立ち上げ、育てたのは、
①普及目的の夏の大会
②競技志向の冬の大会
③フットサルリーグ

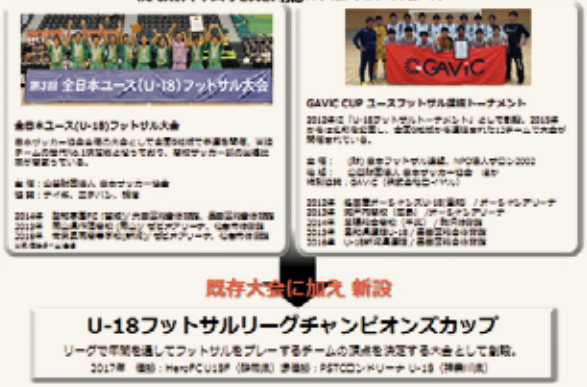
◆「次の10年」は「横と縦への広がり」を志向する
①横への広がり … "関東"そして"全国"への拡大
→ 隣県との交流から全国大会の開催へ
②縦への広がり … "底辺"から"頂点"までの拡大
→ 多様なレベル・ニーズに応じた事業

29

30

高校生世代のフットサル大会について

（NPO法人サロン2002常務理事：太田宗戸氏より）



す。＜資料 30 ＞

このように少しずつ整備されてきましたが、先ほどの GAViC Cup は昨年度いっぱいで終わってしまいました。フットサル連盟自体が、どちらかというと社会人を中心とする連盟となっており、アンダーカテゴリーに手が回らない。予算問題もあって継続することが出来ないということとなり、せっかくオフィシャルなところに委ねたのに長続きしないもどかしさを感じます。

“遊び心” を取り戻せ!

そろそろまとめです。高校サッカーの現場から見える、部活動のこれからを、「“遊び” を続けるにはどうするか」として整理しました＜資料 31 ＞。添付資料にあるとおりですが、学校教育活動であれば、保護者は安心、生徒は出やすい、施設も使いやすい。その代わり教師の負担が増えている。地域のスポーツ活動であれば、もっと自然に出来るはず。だけど、学校だから教育的？あるいは地域クラブ、外部指導者だから競技志向？

そんなことは全くない！で切ろうと思ったけど、「はず」とつけてしまいました。青少年の活動に対しては、学校だろうが地域だろうが教育的な視点・配慮は当たり前です。学校では真面目が協調され遊びが否定される傾向にあるけど、私に言わせれば「ちゃんと遊べ」ということです。このような観点から部活動を見直すことが必要ではないかと思っています。自分たちの遊びは自分たちで形作って、それをＯＢになっても支えていけるような仕組みを作ってもらいたいということです。

我々サロン 2002 では「スポーツを通じたゆたかなくらしづくり」を志に掲げていますけど、最近は「“遊び心” を取り戻せ」というのをいろいろなところで言っています。「本気の遊びが人を育て、社会を育てる」と。サロン 2002 では、やはり toto の助成を受けて、我々のメッセージを皆さんにお伝えしようと思って広報誌を作っています。毎年作るようにした広報誌の名前は『游』です。敢えて「さんずい」の游、波間をゆらゆらと漂うようなイメージで遊びをしっかりやっていこうという意味を表しています。ぜひ皆さんお手にとっていただければと思います＜資料 32 ＞。ありがとうございました。

31

高校サッカーの現場から
ユースサッカーリーグとU-18フットサルからみえるもの

■部活動のこれから－“遊び” を続けるには

・「学校教育活動」（＝まじめ？）であれば、保護者は安心、生徒は出やすい、施設も使いやすい。その代わり、教師の負担が増える
・「地域のスポーツ活動（＝遊び？）」であれば、もっと自然にできるはず（本来のスポーツはこちら）。その代わり、自分のことは自分で！（⇒「ちゃんと遊べ！」）
・学校であっても地域であっても、青少年の活動に教育的な視点・配慮が必要なのは「当たり前！」

学校だから教育的？
地域クラブ（外部指導者）だから非教育的？（競技志向？）

そんなことはまったくない（はず）！
青少年の活動に教育的な視点・配慮は「当たり前」（のはず）！

学校だと“まじめ”が強調され、“遊び”が否定される傾向にあるが、
「ちゃんと遊べ！」
このような観点から、部活動を見直すことが必要

32

スポーツで“ゆたかなくらし”を！
“遊び心”を取り戻せ！

本気の “遊び” が
人を育て
社会を育てる

第２部　ディスカッション

中塚 それでは第２部を始めたいと思います。この休憩時間に皆さんから多数のご質問、ご意見を頂きました。手元に皆さんの貴重な書き物が残るということは大きな財産となりますので、感謝しております。休憩中に何人かの方と話した中でも感じているのですが、やはり部活動問題には様々な切り口があって、だから質問やご意見も多岐に渡るのだと思います。答えやすそうな質問が嶋崎さん中小路さんあてに一通ずつ来ていますので、まず中小路さんからお願いします。

ハラスメントの判断基準

鈴木崇正さん

中小路さんのさまざまな取材のご経験から、スポーツの現場においてハラスメントを判断する基準のようなものがあればお聞きしたいです。いま報じられている日大アメフト部や、体操界、レスリング界などの競技団体のハラスメントの不祥事では、一方の当事者はハラスメントを否定しています。朝日新聞の 15 日付けの朝刊で、ムラ社会を脱しないといけないといったご趣旨の記事をお書きになっていますが、第三者的な機関がチェック機能を果たすことが大事であると同時に、当事者たちが何がハラスメントなのかを共通認識として持つことがまず大切ではないかとも感じます。それらに共通する課題、通底する原因のようなものを感じていらっしゃれば教えてください。

中小路 ご質問ありがとうございます。中塚先生は答えやすい質問とおっしゃいましたけど、実は難しいなと思っていまして・・・。確かに暴力やハラスメントという言い方をするわけですけれども、暴力はもちろん暴力でこれは分かりやすい話だと思います。ハラスメントの定義、判断基準というのは、ひとつひとつの事例がそれにあたるのかどうかということを、今よく実施されている第三者委員会がどういう風に認定するのか、という事に基本的に委ねられていると思います。なので、どういう判断基準なのかということ

は個々の事例によって違うと思いますので、私からは一概に申し上げられないというのがひとつと、更には、正直言って、そういう定義は難しいのではないかと思っています。最近の事例で言うと、一番わかりやすくハラスメントが認定されたのが、レスリングの栄さんによる伊調馨選手へのハラスメントです。強化幹部の地位を利用して選手に練習させなかったというのがハラスメントに当たったわけですけれども、これは自分の立場を利用して選手ファーストであることを侵したという意味で非常に分かりやすいハラスメントかと思います。一方、今まだ結論が出ていない体操の方は、本当にハラスメントに認定されるかどうか、僕はかなり微妙なところがあると思っています。塚原夫婦の主張がどこまで認められるかどうかではあるのですけれども、あれは代表選手を選ぶ過程の中で、一定の理由を説明したというようなところが本当に認められるならば、あれはハラスメントではないという考えもできますので、ちょっと微妙になると思います。

というふうに考えていくと、個々の事例でどういう言い方をしたかとか、それが選手にどのように伝わったのかとか、そういうことによって変わってくると思いますので、一概に言えないというのが正直なところです。各競技団体等のハラスメントを禁止する条項を見ても、何がハラスメントなのかということは、明解に書いてはいない競技団体がほとんどだと思います。そういう点からも、個々の事例の判断に委ねるしかないといった見解になるのではないかと思います。
答えるのが正直難しいようなところもございます。

中塚 ありがとうございます。すみません、答えやすいというのは間違いで、中小路さんに答えてもらいたいと書いてあったので、振るのが簡単だという意味でした。今のことに関連して、ハラスメントや暴力的指導について、会場の方からご意見なりご質問がありましたらお願いします。

白井久明さん 弁護士の白井です。先日も内閣府の女性に対する暴力の関係でスポーツにおけるハラスメント報告をしましたので、しばらくすると資料として内閣府のホームページにアップされると思います。どういう行為がハラスメントとなるのか、ならないかという問題は、当該行為が刑事事件に該当する行為から、損害賠償に値する不法行為、安全配慮義務に反する行為で損害賠償責任が生じるものなど多様なものがあります。それからスポーツや教育の現場で望ましくない行為の中でも、降格されたり、コーチを解任されるような行為もあるし、望ましくはないけど、人事処分するほどでもないというものもあるわけです。ですから、そういうふうにグラデーションがある中で、これがハラスメントで、ハラスメントでない、という議論は不毛だと考えています。それより実際にどういう行為が行われて、その行為を指導者側はどう考え、相手側はどういう風に受けとめる行為であったのかを考慮する必要があります。指導者は選手に対してフェアプレーですか、という概念でまず考えて、選手の人格権を侵害しているかどうか、という観点でみるようにしています。その中でもいろいろな側面があるので、ハラスメントかそうでないかと一義的に定義をつくることは思考放棄になってしまうのではないか。まずは、実態を見てほしいと考えています。

学校においても、個々の場面において、指導の限度を超えているか超えていないか、その状況の中で先生の行為が許されるか、許されないか、という風に考えるべきです。別にハラスメントと言われたところでそれは損害賠償には該当するわけではなく、先生は先生の立場でこう言ったのだということに過ぎません。そして、指導を受けた生徒は何か感じるものがあるとは思いますが、すべてがハラスメントとなるとは言えません。「ハラスメント」を安売りしすぎです。今ネットにも出ていますけど、類型化するとハラスメントは32種類もあるそうですが、そうではなくて本当にその行為が許されるか許されないかと、もっと個別に自分で考えて欲しいのです。受ける方もそうです、指導者側もそうです。分からないから定義化してくれ、ガイドラインを作ってくれって、これは教えている側が思考停止している、と私は考えています。

中塚 ありがとうございます。おっしゃる通りで、ハラスメントという言葉がいろんなところで出てきて、指導する側も今まで以上に注意を払うようになりました。けど、だからと言ってビシッと指導出来なくなるのは良くないなと常に感じております。

嶋崎さんへの質問は、明星大学3年生の平井君からです。私は前期だけ明星大学で保健体育科教育法を教えていますが、その授業の受講生です。

部活動法人化のメリットとデメリット

平井悠登さん

先日あるBSの番組を見ている中で東京大学アメフト部が法人化したというのを見ました。その番組内ではただそれだけが紹介されたので、自分は、「なんだ

それは」と色々調べたところ、京大アメフト部も数年前に法人化したという情報も出てきました。メリット・デメリットをサイトで調べたのですけど、書いてあったことがいまひとつ理解ができませんでした。

今日の中澤先生のお話の中でも、部活動が部活動でお金を集めるということが紹介されました。自分も今明星大学の野球部に所属しているのですけれど、ほかの大学の環境と色々比べても、施設などはあまり良くなくて、もっとこうしたいけどお金が無い。そういう問題を、法人化することによって何か金銭的援助が他のところから得られて解決できるのかな、と疑問に思って質問させて頂きました。

嶋崎 この問題は、中小路さんが語られた日大アメフト部問題とも関係しています。法人格を持つ団体ではなく、任意団体だともう何も公開しなくてもいいわけです。閉鎖性がそこに生まれるのです。閉鎖性が生まれて、そこに絶対的な権力者が生まれて、ということになるのです。法人化することによる一番大きな違いは、オープンになるということだと思います。大学運動部で問題になっているのは会計処理の問題です。部費などの会計処理がかなりずさんなクラブが多いようです。裏帳簿の様なものを持っている部もあるなど、色々な問題があります。法人化したら、まず会計をきちんとしなくてはいけない、そしてそれをオープンにしなければいけないということです。我々サロン2002もNPO法人化する時にすごく苦労しました。何を苦労したかというと、きちんと会計処理をするような能力が我々になかったので、会計士の方に理事になっていただいて、色々教わりながら整備しました。それから定款や役員などもしっかりしなければならない、それを公開しなければならないということで、法人化するとしっかりとしたガバナンスが必要になるということが大きいと思います。

もうひとつ、この質問が僕のところに振られてきたのには、日本版NCAAという流れがあると思います。自分は今その準備委員になっているので、色々な関連情報をいただいているのですけれども、やはり大学のスポーツを野放しにしてはいけないというのが今の風潮です。運動部の学生はスポーツだけやっていればいいだろうというのではなくて、しっかりとした学習機会を確保してやらなくてはいけない、単位をしっかりとって、しっかり勉強して、卒業して社会に出ていくようにしなければならない。また、大学運動部のガバナンスをもっとちゃんとやってください、会計処理もちゃんとやってください、そういうような流れです。

それからもう1つは、自分たちでお金を生みだす努力もしていいのではないかということ。そのためには法人格が必要になります。例えば預金の口座を作るとか、クラブハウスを借りるとか、そういうことも、簡単なことですけど法人格が無ければなかなか難しいのです。個人ならばできますけれども、部としてやることはできないと思います。そういう意味できちんと法人格を持つと言うことが必要になってくるのかなぁ、というふうに思います。私は法律的なことは専門ではないので今の流れだけお話をさせていただききました。

中澤 アメリカの部活は金を稼いでいる、と言いましたが、部活でお金稼ぎをしましょう、という風に伝わったとしたら修正して貰いたいです。僕がここで伝えたかったのは、自分たちがしたいことをするということを日本の子供たちは受け止めきれておらず、周りが支えてくれていることに気が付かずに、カッコつきの「幸せ」ばかりを享受しているのではないかということです。野球もお金がかかるので、自分が野球をしたいという希望を可能にする条件を、自分でまず得なければいけない、ということを伝えたくて、反省の意味をこめて、このお話をしたのです。その時にNPO法人もひとつの方策だと思うのですけれども、例えば京大のアメフト部のNPO法人は、支援する団体として法人格を取得していて、もし部活本体が法人格を持とうとすると、国立大学法人京都大学との関係がまず問題になります。法人格というのはひとつの独立した人格なのですが、学校の教育活動と謳っている部活動が、法人格を持つとはどういうことだ、という疑問に直面すると思います。いやいや、独立してやるのだ、とすると、平井さんの野球部が明星大学のグラウンドを優先的に使う理由がいったん消えてしまいま

す。そうするとNPO法人明星大学野球部を作ったあとに、明星大学にどういう関係でのぞむのかというのが議論されると思うので、そういう問題提起として僕のメッセージを受け取って欲しいです。ですから、その方法は実はNPO法人だけではなくて、周りの明星大学の学生の理解を得るとか、そういった仲間集めという方法もあると思うのです。自分たちがしたいことを自分たちでどうやって実現するか、という課題を引き受けて考えて欲しいというのが僕の考えです。

中塚 今日のメインは高校の部活動ですけど、大学の部活動にもさまざまな問題がありますし、一般的に部活動問題というのは中学校で深刻な問題となっています。そのあたりも視野に入れながら議論していかなければならないと思います。

中央大学の重信さんから、私あてに質問を頂いています。明星大学と同じ駅をいつも使っておられますよね。

高校野球へのリーグ戦の導入

重信大和さん

今回はこのような会を開いていただきありがとうございます。自分は高校まで野球をやっていたのですけれども、指導者がいなかった関係で、対外試合があまりできませんでした。リーグ戦を各地域にとり入れることによって試合数も増えて、競技力の向上や、競技者の人数の増加も見込めるのかなと思っています。中塚さんの遊び心からの意見を聞いて高校野球におけるリーグの導入できたらなと思うのですが、何かアドバイスはございますか？

中塚 中小路さん、高校野球の朝日新聞としてはいかがでしょうか？

中小路 今こちらに来るなと思いました。ご質問ありがとうございます。高校野球の問題は熱中症の危険の中でやることなど、本当に色々あるのですが、ひとつ言われているのが、過熱化を招いているのはトーナメント制であるということです。過熱化だけでなく勝利至上主義というものもそこには入ってくるのですが、そういう点からは、リーグ戦を行うというのはひとつの解決策だと思います。しかもサッカー協会でやっているように、各地域でリーグ戦を行い、トップオブトップが全国で戦うという流れを作れば、様々な問題が解決するのは間違いないと思います。

ただ、先程中塚先生の話にもありましたが、実際に高校スポーツ、高校サッカーの現場を取材すると、別の問題も見えてきます。リーグ戦をまず行い、他にインターハイの予選もあり、選手権の予戦もあり、さらに部員数が多い学校になると二軍戦や三軍戦もしなければならないとなると、顧問が忙しすぎて到底1人では回らなくなってしまいます。先程の嶋崎先生の話にあったように、外部指導者だけでは試合に行けないわけですから、結局顧問の先生がついていかなければならず、試合数の多さとその指導現場の現実が両立してない、バランスが悪すぎる、そういう現実に直面している学校がほとんどだという様に見えます。そういう意味で言うと、リーグ戦はひとつの解決策ではあり、また、過熱化は何らかの形で防げるかもしれない、と思いますけど、当然別の問題が起こってくることが予想されます。野球の場合は特に試合ができるグラウンドを持っている高校が実は少ないのです。サッカーも公式戦はきちんとしたグラウンドでやらなければならないのですけれども、野球の場合はおそらく球場が限られている中で、試合がこなせるのかといった場所の問題も出てくると思いますので、そういったことを総合的に考える必要があると思います。

中塚 よろしいですか？いや、よろしくないでしょうね、質問は私に向けられたものだったのですから。私自身は、今の質問に対する明確な答えは持っていません。それは野球をやる人で考えてくださいとしか言いようがありません。やりたい人が、自分たちで考えて行動するのです。ただ、本校のグラウンドでも、こちら側でサッカー部、向こう側で野球部が練習している風景をいつも見ていますが、その立場で言うと、ちゃんとした野球をやりたいのだったら学校の中ではかなり難しいなと感じます。たとえば、マウンドがあると体育の授業では非常に迷惑です。学校の施設は部活のためにあるのではなく、まずカリキュラムに位置付けられた学校の教育活動を全うするためにあるわけです。それから、本校のグラウンドで野球の試合をすると、時々ファールボールが裏の拓殖大学の施設に飛び込んで、1枚100万円もする古い瓦が割れて大変なことになります。そういうことがあるので、いまうちのグラウンドでは高校野球の試合はできなくなりました。すると野球部は、埼玉とか東京の西の方とか、そういうところに行って、野球場のある学校を探して試合をせざるを得ないのです。ちゃんとした野球を学校の中でやろうとすると、このように相当無理が生じます。だから、ちゃんとはしていないかもしれないけど、自分達の背丈にあった遊びを、自分たちでルールを工夫してやってくれたらいいのではないかな

と思います。そういう発想は、今の野球界にはないのでしょうけど・・・。

ちなみに第1回DUOリーグの開幕戦は、ちょうど野球のバックネットの工事をしていてゴールラインを正規の場所に引くことができず、縦の長さを70mでやりました、最初数ヶ月はずっとそれです。ちょっと狭いけど、俺達のサッカーはこれでいいよね、と合意の上でやったわけです。野球が野球であるために譲れないものは何かというところですね。ここは譲ってもいいというところを柔軟に考えて、学校の中で気軽にできる、遊びとしての野球を考えればよいのではないかと思います。

鈴木知幸さん 今度の甲子園大会の参加校が56校で、56校の内100人以上の部員がいる学校が20校、最高は花咲徳栄で部員が163名です。50人以上の部員を抱えているのが5校でした。一方、最低なのが智弁和歌山で34名、それから大阪桐蔭が63名です。ところがこの2校は選抜制で一般の生徒は入れないのです、練習の邪魔になるからと。34人というのは、そうやって部員を制限している訳です。

昔、高体連と高野連を繋げようとしたことが我々にもあるのです。ところが、高野連の方が先にできているので、高体連の方に着くなどとんでもないと、反対されました。高野連は高体連と絶対一緒になりたくないという前提の問題があります。

僕が盛んに言っているのは、甲子園大会を大阪ドームに持っていけということです。そうすると雨天中止が無くなるから予備日が消えるし、熱中症が無くなります。予備日を使わなければ、決勝戦まで試合間に必ず1日空けることができるのです。そうしたら、また大反対を受けました、金は誰が出すのだ、ドーム代はどこが出すのだと。そんなことは後から考えればいいのです。子供を守るためには、何か伝統を消さなければいけないのです。だから大阪ドームに持っていった方がいいと言いたかったです。

中塚 ありがとうございます。どうですか？朝日としては。

中小路 高校野球の話は僕は大歓迎です。これから申し上げることは朝日新聞を代表しての話ではありません。高校野球を部活動のひとつのありかたとして、高校野球をひとつの材料として取材した結果の、記者である僕の見解として申し上げるのですけれども、今鈴木先生が仰ったことは一案だと思います。一定期間の中で、特に投手の肩の負担を無くすために休養日を確保するという意味では、それは一案だと思います。僕はそれに関しては別の案を持っておりまして、甲子園と大阪ドームを併用するべきだと考えています。なんだかんだ言っても出場校の選手は甲子園でやりたいのです。それはやはり重視するべきだと思います。そこで、初戦は皆甲子園でやる、2回戦以降は甲子園とドームを併用する、そういう風に日程を立てていくと結構余裕ができます。今1日4試合やっているのを1日8試合できるようになってくるのです。甲子園でやりたいという生徒の希望と休養日の確保の両方をみたすことができると僕は思っています。

中塚 という新たな案も出てきました。同じようなことがおそらくインターハイでも言えますね。真夏のあの猛暑の中で、なぜ全ての競技を1箇所でやらなければならないのでしょうか。もし1箇所でやらなければならないならば、例えば涼しい北海道で毎年開催するとか…。この案を高体連の中で話したことがあるのですが、いつも同じところで開催すると、請け負った自治体の負担が大変になるという話でした。色々な問題があるようです。

次は、先程の中澤さんの話に関連する質問です。

部活動のあり方…学校と地域、レクリエーションと競技志向

＜質問＞

①茅野英一さん

学校体育と部活との関係をどうとらえておられるか。

とりわけ競技志向ではない、言わば「アソビ」「レク」としてのスポーツ志向の部活との関係について。

このレク志向、競技志向の分別が、地域クラブとの関係を創る上での要素になるのではと考えています。

②田中星詩さん

私自身、ヨーロッパでサッカーをしていたのですが、ヨーロッパではスポーツ（サッカー）はスポーツを楽しむ為にあると考えられていると感じます。育成年代では人としての教育をもちろん大切にしていますが、目的はスポーツを楽しむことです。日本では部活動という存在によって、スポーツが教育の為の手段としてあつかわれ、教師という絶対的存在の前に、枠から飛び出せるような人間がうまれにくいと感じるのですが、先生はどうお考えでしょうか。

③海老島均さん

日本の目指すべき方向性として、ヨーロッパの学校・地域連携が考えられますが、具体的にどのような方策が考えられますでしょうか？

中澤　野球を題材とした質問に対して、中塚先生のコメントでは授業との関係、地域との関係に議論が発展したのでそれを引き取って３人からいただいた質問を紹介しながら僕なりのリプライをします。帝京大学の茅野先生からは、部活と学校体育の関係はどうなっているのか、部活といっても色々で、競技志向とレクリエーション志向をどう分別すればいいかというご質問を頂いています。ヨーロッパでサッカーをした経験がある桐蔭横浜大学の田中さんからは、ヨーロッパだと地域でのスポーツがとても盛んだが、日本だとそれが教育のためとなって教師が絶対的存在として君臨しすぎて窮屈になってしまう、どう考えますかという質問を頂きました。それに関して成城大学の海老島先生からは、ヨーロッパのような地域と学校の連携型、両方型みたいな所に目指すべきところがあるとか、日本の部活どういうところを進めばいいのかといったお話を頂きました。

こうした質問の中で、すぐに答えることができるのは、部活と授業の関係です。部活と授業は制度的には関係ない、部活は授業ではなく教育課程には含まれていない、ということを意識する必要があると思います。もちろん内容的に見ると教科体育で行ったサッカーの授業をより発展させた形で、サッカー部で頑張るというのはあり得るのですが、そこの繋がりを重視しすぎてしまったがゆえに、制度的な区分として課外活動である部活というものの位置づけがグズグズとなってしまったのではないか、挙句の果てに授業を疎かにして部活の顧問だけ頑張る教師など、そうした本末転倒の在り方が出てくるのではないかと僕は思っています。このラインで部活と授業をいっしょくたにしてしまうと、教育行政を相手にする時にまったく話が通じないですね。いくら部活が大事だといっても授業の方が大事なのは国民との約束になっていますので、そうした授業と部活の関係をしっかり区分けして議論するのはまず大前提になると思われます。

その次にヨーロッパの地域スポーツはやはり素晴らしいね、という話、これもその通りかなと思います。そうした地域に開かれた部活の在り方というのも考えられるのではないかという質問だと、これはなかなか答えるのが難しくて、僕がまず答えられるのは、学校側から部活を見渡した場合に、肥大化しすぎて、学校だけでは支えられないくらいに大きくなりすぎているということです。この方策、この問題を解決するためには、すぐに地域に移そうという考えが出るのですが、実はもう１つ解決策があって、学校の部活を学校に留めたまま小さくするということです。それは議論されている総量規制の話ですし、活動日を限定しよう、活動時間を制限しよう、という話です。そうすると部活を蔑ろにするのかと怒られたりもするのです

が、実は部活をこのまま維持していくためにも部活の縮小は避けられないと思っています。学校ができることというのは、実はもうそこまでではないかと諦めている気持ちです。そうすると期待されるのは実は地域の側なのです。本当に地域の側に、魅力的なスポーツクラブを用意する環境を整えることができれば、そちら側に移すことができるかもしれません。しかし、地域の側がその点を学校に甘えてしまうと、学校教育制度は本当にがんじがらめですから、そうしたがんじがらめさも受け止めざるをえなくなって、地域のスポーツも育たなくなってしまっています。だからインディペンデントな関係で学校の部活とはまったく違った地域のスポーツクラブを期待しています。僕は地域スポーツクラブを専門的に研究している研究者でないのでわかりませんが、学校の部活からみるとそうした可能性というものを期待したいと思っています。

部活動へのシーズン制の導

中塚　海老島さんから嶋崎さんに次の質問もあります。

「学校部活にシーズン制を導入することは非常に重要であるが、高体連・中体連・各競技団体の思惑を調整するのはほぼ不可能に近い。これこそスポーツ庁主導で上意下達で行わないと実現性はない。」

嶋崎　今の中澤先生の話を受けてちょっとお話させていただきますと、私は部活動のシステムは非常に優れたシステムだと思っています。学校の仲間たちと授業が終わったらすぐに学校の施設でスポーツが出来る。そして、私は教員の立場でずっと部活に関わっていましたが、教員側にもメリットがあるのです。授業の時はだらだらしている生徒でも、部活になると目を輝かして一所懸命取り組んだりしている。生徒の違う一面が見える、またそういうところを褒めてあげることによって学習の方も伸びていくということがありますから、教員にとっても非常にメリットがあると感じています。ただしこれを示すエビデンスが無いのです。ですから、我々の研究グループでは、なんとか部活の効果を測れる尺度というかエビデンスを出せるような方策はないかと研究活動をしています。

それは置いておいて、システムは非常に優れたシステムだと思います。けれど今の部活動はもう持続不可能です。持続可能な形にするためには、僕は中澤さんと意見がまったく一緒で、縮小するしかないと思います。学校の先生達の意見というのは3つにわかれていて、一つ目は、部活が大事だ、何か仕事があっても放っておいて部活を一所懸命やる、いわゆる部活先生。これはそんなに居ないのです。およそ2割くらいです。二つ目は、部活なんて嫌だ、放課後に部活動の面倒なんて見ていないで早く帰りたい、自分の教科の仕事を一所懸命やりたい。これもそれほど多くなくて2割くらいです。そして中間の人たちはどうかというと、部活動を指導する意味は感じているけれど毎日やるのは勘弁して欲しいとか、土日もずっと出てくるのは家庭もあるし無理だ、という先生が結構多いと思うのです。これは私が現場に居ての感覚です。だからやはりこういう先生達が指導できる、支えていけるレベルの部活動に縮小していけばいいのです。

こういう話をすると必ず言われるのが、それでは競技力はどうなるのだ、選手が育たない、ということです。いやいや、そんなことを学校の部活に求めるのは無理です。テニスの選手はどうです？部活でやっている人居ますか？水泳の選手はどうです？体操はどうです？個人競技は皆民間のクラブが育てているのです。インターハイだって、私がいた高校にも水泳部の名前だけあります。でもみんな民間の水泳クラブで泳いでいる生徒を帝京高校という名前で出しているだけです。体操もそうです。私学だからレスリング、フェンシングもあります。みんなNTCでやっています。在籍だけ帝京高校にして、放課後はNTCで練習して、インターハイには高校の名前で出ています。学校としては宣伝効果も抜群です。

このように、現実には競技選手の養成はもう学校で支えていないのです。多分サッカーも同様だと思いますが、完全にそうではないかもしれません。ただ、野球は今だに高校野球がプロ野球選手の供給源になっています。それでも、多くの競技はもう部活動で選手を育ててないのですから、持続可能なように縮小して、競技力の向上に関しては競技団体を中心にして外で考えてもらうということが、これからの部活動が生き残る道でないかというふうに私は考えています。

中塚　ありがとうございます。この辺りの議論は恐らく嶋崎さんのところでも出たガイドラインとも関係してくると思います。中澤さんへの質問で、そのガイドラインに関するものがありますのでとそれを紹介して頂きながら、中澤さんの見解をお願いします。

「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」について

中澤　弁護士の白井先生からは、ズバリ、ガイドラインは浸透すると思いますか？活動時間の制限を国が決めたけれどちゃんと守られると思いますか？という質問を頂きました。関連して、お名前がありませんが、スポーツ庁の役割、文部科学省とスポーツ庁はどのように関係していて、部活動に影響力があるのか、という質問もいただきました。この方はもう一つ重要な質問をされており、学校や部活の自治権、自分たちで自分たちのことを決めるということは認知されているのかということが議論されています。

まずガイドラインはどの程度浸透するかについては、まさにこれからの関係者と教育委員会と、現場、僕も研究者として関わりますが、その頑張り次第だと思っています。国のガイドラインが 3 月に出て、この半年ぐらいで都道府県のガイドラインがだいたいかたまりました。今、市区町村レベルで作っていて、それから学校現場でガイドラインを作り、来年度本格的にスタートというプロセスになると思います。僕もいくつかの自治体の教育委員会に関与しています。実は、今日横浜市教育委員会の指導主事の方もいらっしゃっていて、そこでどのように浸透させるかという議論をされています。及び腰の自治体の場合はだいたい守れそうなものをガイドラインにしています。ある都道府県だと、平均の部活日数を調べて週に 5.1 日とわかると、それでは国のガイドラインそのままの 5 日として、ちょっと締めればいけるなという解釈でガイドラインを作っています。そのように、できるものをガイドラインにしている、という実態があります。

もうひとつ踏み込もうとすると、例えば中体連の大会や、高体連の大会に参加するための条件にガイドラインを持っているかをチェックしよう、と僕は発言しました。すると少し抵抗を受けました。

そのようにいくつかのレベルにおいて議論が進んでいるのですけど、そこでしっかりガイドラインのチェック性を果たしていかないと、どうなるか分かりません。けれども 20 年前に出た、最後の保体審答申の 97 年のガイドラインはまったく守られなかったんですけど、その頃に比べて今回は、僕は少し楽観的で、5 日のラインは守られるのではないかと希望的な観測を持っています。スポーツ庁がこのガイドライン作って、今は文化庁が文化部ガイドラインを作っています。だいたい同じような形で今年度中に出来上がりそうなのですが、それとは別に、文部科学省の初中局は部活動をどう議論しているか。先日学会で初中局の担当者と議論したところ、部活のことを何も知りませんでした。スポーツ庁に丸投げをしているのです。スポーツ庁の官僚も文部科学省あがりでなくて経済産業省を中心に来ているので、教育のための部活という考えをあまり持っていないかもしれないと、僕は懸念しています。この様に国の行政のあり方が少し混乱しているので、オリパラを目指して競技力向上のためだけの部活になるのを防ぐためには、教育現場を含めた、みなさんの関心というものが非常に重要になってくると思っています。

最後に部活の自治権の話ですが、中小路さんの本のメッセージでも、思考停止に陥らず、自治を取り戻そう、自主性をもう一度認識しようという所が一つの課題として提示されています。一方で僕の歴史の発表で、戦後の始まりの時期に実は自由と自治のシンボルとして部活は期待されたのだという話をしました。戦後 50 年 60 年 70 年ずっと自治、自治、自治、と言葉だけで言われ続けて来たのです。僕はそうした状況に対して、「自主性」というのは嘘くさくないかと疑って見ています。その疑う根拠として、生徒だけでなく、実は苦しんでいる教師も「自主的」と言われながら誤魔化されて働かされすぎている、からです。だから僕は、この「自主性」という言葉自体をカッコをつけて使っています。

しかし、それとは別に自分たちで自分たちのことを決めるというのは、まさに部活でしかできない良さだとも思っています。授業はカリキュラムが決められていて、何を教えるべきか、何を学ぶべきかも決められています。高校生がある日突然「ちょっと微分・積分がしたくなってきたなあ！」と数学の授業を本当に自

主的に受けるなどあり得ないですね。そうではなくて微積をちゃんと教える、学ぶ、そういうことが論理的な思考力を学ぶ基礎になり、その上に数学的思考が育っていくと、大人達が考えてきたから、学ぶべきものを決めてきたわけです。
しかし部活はそうではありません。自分たちで決められる余地というものが予めあるわけです。だから部活の良さは何かと時々聞かれるのですけど、僕自身は、生徒が自己決定の仕方を学ぶことができる、そうした良さがあるのではないかと思っています。だから「自主性」というと、非常に使い古された言葉になるのですけど、それでも生徒が自分たちで自分たちのことを決めて、試行錯誤して、したいことを実現していくという良さは、守るべきところではないかなと思います。

中塚 いかがでしょうか。ガイドラインに関すること、あるいは部活動における自主性、そのあたりについてのコメントでしたが、会場の方からご意見ありましたら、お願いします。

藤原淳治さん 自分は今回初めて参加させて頂きました。大学院で学びながら、公立中学校で非常勤講師をしております。卓球を指導していますが、今自分のいる学校の卓球にはあまり関わっていません。その学校は普通の公立校ですが、卓球は全国区で、練習はほぼ毎日、365日の内360日は活動を行う感覚です。それについてはガイドラインからはるかにかけ離れたレベルであるのですが、間違いなく地元自治体は全力で支援してくれており、学校としても配慮している、地域も推しているといった状況がございます。今回も全中を公立校が優勝していますが、こういった多様な部活動がある中で、ガイドラインのあり方が今後どのように意味を持っていくのか。このような状況の学校だと、生徒もそれを求めて他地域から集まってくる場合があり、ガイドラインが骨抜きになる、あるいはガイドラインに対して地元自治体や学校・地域集団として目を向けない場合もあるのではないかと思うのです。そういった面はどのようにお考えか、ご意見頂ければと思います。

嶋崎 今のご質問に答えさせて頂くと、まずその多様性という話について、厳しくやるのも多様性だと思うのですが、公立中学校ですよね？高校だったらわかります。私立高校で、子どもが学校に行ったらこれだけ練習していて、日本一を目指すならここに行く、これはいいと思います。それはその人の考えですから。けれど公立中学校で、地域の子たちが通って、卓球が好きだから卓球がしたい、そういう学校ではどうなのかなと思います。でもそうなってしまって、そうなったことが評価されて地域の人達や区も応援する。何故なのでしょうか。簡単です。日本一という肩書きがつくからです。だから極端な話、全中などはやめた方がいいのです。やめたら日本一にならない、そういうものに価値がなくなる、そこまで考えないと、良くならないと自分は考えています。

そこで先程のガイドラインですけれども、私が今調査に入っている山形県は、すでにガイドラインと同様のしっかりした取り決めがあって、「NO部活デー」などを各学校で作っています。基本的にきちんと守られています。ただ、守られているというのは表面的な話で、実は裏で保護者会主催の自主練習などが行われていて、そういうことを影でこっそりやっているチームが県大会で優勝してしまうのです。それで、「それはどうよ？」という話になっています。一等賞、勝ち負けを争うのは当然なのですけれども、日本一を争うというシステムそのものが問題です。さっき申し上げたように、ピラミッド型のノックダウンでやっていくシステムではなくて、勝ったり負けたりを楽しめるような、そういう心をもったスポーツというふうに変えていかないと、少なくとも中学の部活動まではそうでないと、スポーツを楽しめるような環境はできないのではないかなというのが私の考えです。

中塚 私の方からも申し上げます。そういうほぼ365日やっている部活の話や、スポーツの話を結構聞くのですけど、何故そんなやり方になってしまうのかというのが逆に不思議です。要するに休みなしでやってしまっているということですよね。本来であれば、トレーニングをしたら栄養と休養をしっかりとる。このサイクルでトレーニングの成果が得られ、発達していくということです。トレーニングばかりやっていて強くなるわけがありません。ちなみにうちの学校は、質が違いますけど、部活動は週4日以内とルール化されています。サッカー部は平日3日練習し、土日のいずれかでリーグ戦などが入ってくる形です。私自身も高校時代、もともとサッカー部はほぼ毎日やっていましたけど、部員が自分たちで決めていく部ですから、自分がキャプテンになった時、オフを平日に2日とることにしました。自主練をやりたいからです。全体練習はもちろん大事だから週何回かはやるけど、全体練習を削ってでも自主練習の時間を確保したいという理由だったのです。休みをきちんとと取るというのが当たり前になるような感覚が必要だと思

います。

もう１つだけ、働き方改革の質問がありますのでそのトピックを取り上げて全体をしめたいと思います。

部活動と教員の働き方改革

＜質問＞

無記名

・社会的な変化を背景として部活動が拡大・加熱化してきたことは理解できましたが、教員達が部活動に対する不満・限界感を持ちながら、それを維持してきたのは何故でしょうか。本当に不満があるのであれば、部活をやめる、縮小するといった方法をとることも可能だと思います。にもかかわらず教員達が部活を維持・拡大してきたのには社会背景以外の理由は考えられないでしょうか。そしてお考えがありましたらお聞かせください。

・なぜ教員はスポーツコーチのような関わり方へと変化していったのでしょうか。

中澤　教師の負担のために部活動をどう改革して行くかというお話が書かれていて、でもやりたがっているのは教師自身ではないか、教師が自分で自分の首をしめているのではないか、といったご質問を頂きました。先程の公立中学校で７日間ずっと部活をやっているという話しを聞いても、教員の働き方改革と言いながら、顧問の先生がめちゃめちゃ頑張って、その先生がやりたくてやっている、そんな話なのかもしれないと思います。しかし、やりすぎて、そのままずっと続けられるか危ぶまれているのが今の状況です。

リアルな話をすると、僕が大学で教職を目指す大学生を相手に話していると、「先生になろうと思っていたけど、大変だから辞めようかな」という話を聞きます。僕は、部活の大変さばかり言っているつもりはないのですが、そうした大変さを聞くと、教師にはやはりなりたくないと思ってしまう。そうすると、各教育委員会の教員採用倍率が下がるので、教育行政関係者は非常に敏感になってきます。このままだと教育が成り立たないと。そういうような、部活というものを教育全体のバランスの中で見直すべき時期だと思っています。そこには、教師自身が部活の教育的意義を語りすぎてしまったことで、ここまで窮屈になってしまったという経緯もあります。日本教職員組合の見解を研究したこともあるのですが、「部活は大変だけどやっぱり大事だ」との思いが強く、地域に投げ出すことは教育的な責任を放棄してしまうのではないかいうと懸念を教師自身が抱いてしまう傾向があります。そうしたジレンマを抱えて部活がここまで大きくなりすぎてしまったので、部活にかける教育的期待というものがあまり大きくなり過ぎないように、授業の方が大事であること、部活だけではなくて、教育とのバランスをとらないと部活は成り立たないということを見直す時期に来ていると思います。だからガイドラインはそのきっかけとして、きちんと守って欲しいし、その１歩を踏み出してから多様性の部分を議論してほしいと思います。

中塚　ありがとうございます。この件についても、教員志望の方が何人かいらっしゃいますのでディスカッションしたいところですが、あいにく終了時刻が迫っております。他にもたくさんご質問やご意見を頂いていますが、こちらで処理する力がありませんでした。このあと懇親会、更に二次会も予定されておりますので、そちらでフェイス・トゥ・フェイスで議論出来ればと思います。

最後に演者の皆様から、全体を通して言い残したことも含め、嶋崎さん、中小路さん、中澤さんの順で、一言ずつお願いいたします。

シンポジウムを振り返って

嶋崎　本日は本当にどうもありがとうございました。言い残したことではありませんが、最後に働き方改革の話を少しだけさせていただきます。問題は評価なのです。部活で勝つというのは世の中に対して一番わかりやすい評価です。だからよく学校の校舎に【柔道部全国大会出場】などと垂れ幕が出ます。しかし、学校の先生の評価は本当は部活だけではないのです。授業がとても面白い先生もいるし、毎日学級通信を発行している先生もいるし、あるいは、学校の中では時間割を組むのがとても大変ですけど、こういう能力に長けた先生もいます。そういういろいろな先生がいて学校は成り立っているのに、世間の評価で一番わかりやすいのは部活で勝つ、これなんです。そうするとどうしても評価を受けたいという教員がそこにハマっていくのです。そして部活中毒になってどんどん部活にのめり込んでいく、というのがひとつの事象だと思っています。

高校の現場で部活動の指導を長くやってきたので、本当にいろいろな指導者を見てきましたし、自分もいろいろな経験をしてきました。私はこういう自分の経

験を発信する機会を持ちたいと思って、大学に籍を移しましたので、今後も発信させていただききたいと思っております。是非ご協力ください。本日は本当にありがとうございました。

中小路 今日はありがとうございました。一つ言い残したことがあるとすれば、先ほどの私の発表は今の部活のブラックさをぐっと引き出したような内容になってしまったので、部活動をすごく否定的に見ていると捉えられてしまったかもしれません。しかし、基本的には僕は部活動を一所懸命やってきてそれがすごく意味があったと思っていますので、やはり基本的には部活動の大切さというのはすごくあると思っています。

それをより良くするという意味合いで語らせて頂いたので、その辺は誤解なきようお願いしたいと思います。

もう１つ、こうした議論の時間とか意見交換の場というのはとても大切です。新聞の記事は、いろいろな方の意見とか、思いであるとか、普段の生活に根ざした中から出てくる話だとか、そういうものに支えられていますので、また機会があったらこうして色々お聞かせ頂きたいと思います。今日はありがとうございました。

中澤 どうもありがとうございました。言い残したことは本に色々書いてあるので是非読んでほしいと思っているのですが、僕自身はアカデミズムの立場から部活について考えて調べたことを書いて皆さんに伝える仕事ですので、本のタイトルを、『そろそろ部活のこれからを話しませんか』として、みなさん部活について話しましょうよということを１番のメッセージにしました。それは部活には、確かにいいところもあるし、一方で悪いところもある。良いか悪いか丸ごと含めていろいろな人と話さないと部活の解決に進みません。

実は僕のチビ達も何年後かに部活に巻き込まれていくのですが、やはり素晴らしい部活に出会って欲しいと思っており、親としても市民としても部活のこれからを作る、そういう父親になりたいという思いを日々強くしています。そんな中、こういう場で皆さんに直接話すことが出来たのですが、皆さんもやはり部活の話しになると止まらないですね。これだけたくさんコメントがくるのですから。そうしたことを１番の力にしながら未来を作っていきたい、本当に今日参加してくださったみなさん一人一人のお力を借りて部活のこれからを一緒に作っていきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

中塚 どうもありがとうございました。私からは言い残したことだらけというか、言いたいことがたくさんあるのですが、それはまた後でお酒を飲みながら部活話が出来ればいいなと思います。一つだけ言っておくと、働き方改革というのは自分自身の問題でもあります。教師をずっとやってきて、部活の顧問をずっとやってきました。今日のシンポジウムでも、支えてくれているスタッフの中に、本校サッカー部の卒業生が何人かいます。部活の絆には強いものがありますが、私と部活の関わり方は少しずつ変わってきています。東京教員の現役プレーヤーだった頃、部活に出ることは自分のトレーニングでもありました。その後東京教員チームを離れ、自分のトレーニングではなくなった時に、部活との関わり方を少し変えました。タイミングでいうとちょうどDUOリーグを始めたころです。少しずつピッチの外の部分の仕事が増え、更に４月からは高校三年生の学年主任ということになると、ほとんど部活には出られなくなりました。こういう状況の中で、生徒達も危機感を感じたのかラッキーと思ったのか、自分たちで色々考えてやるようになりました。面白い状況になってきたと思います。お手許の【筑波大学附属高校蹴球部活動報告】には生の状況が書かれています。ご一読ください（P.54～56）。

ただ、実際はジレンマだらけです。現場ではなかなか良い結論、スパッとした結論は出せないのですけど、試行錯誤しながら残りの教員人生をしっかりやっていきたいと思っております。

約３時間にわたりお付き合い頂きどうもありがとうございました。最後にこの３人の演者にもう一度拍手をお願いいたします。

年表：高校サッカー 100 年

前　史

1863 年　FA 創設（近代スポーツとしてのサッカー誕生）
1871 年　FA カップはじまる／RFU 創設（ラグビー誕生）
1868 年　YC＆AC 創設　　1871 年　KR＆AC 創設
1873 年　築地の海軍兵学寮にてサッカー実施
1886 年　帝国大学運動会（部活動の始まり）
1896 年　東京高師運動会（嘉納治五郎校長）
1903 年　中村覚之助『アッソシエーション・フットボール』
1904 年　東京高師 0-9YC＆AC（日本人初の公式試合）
1907 年　東京高師 vs 青山師範（日本人同士の初試合）
1915 年　全国中等学校優勝野球大会（大阪朝日新聞）
1917 年　極東選手権　日本● 0-5 中国、● 2-15 フィリピン

野球を迎へて其技の妙を探り之を體育の上に善用せる我學生がフート・ボールに無關心なるべき筈なし、果然フート・ボールの技は今や漸く我運動界に其頭を擡んとしつゝあり、然れどもフート・ボール
アッソシエーション式
第一回
日本フートボール優勝大會
ラグビー式
一月十二十三兩日
豐中運動場に於て
ポピュラライズし見之に對する感興を高興せしめんが爲には第一段の努力を要す、本社が茲に日本フート・ボール優勝大會を主催せんとする即ち此要せられたる努力の一端たらんとするに外ならず

大戦前

1918 年 1 ～ 2 月　東京・名古屋・大阪にて蹴球大会
・日本フートボール大会　ア式・ラ式（主催：大阪毎日新聞社）
・東海蹴球大会（主催：新愛知新聞社）
・関東蹴球大会（主催：東京蹴球団、後援：東京朝日新聞社）
1926 年　大毎の大会が「全国中等学校蹴球大会」に
1932 年　野球統制令
1934 年　全国大会を大毎の大会に統合。JFA が主催に加わる
1941 年　橿原神宮大会、明治神宮大会
1943 年　すべてのスポーツ活動が禁止

大戦後

1946 年 5 月　全日本選手権前座で東西対抗／国体実施
1947 年 1 月　西宮球技場で大毎大会復活
1948 年　学制改革（4 月）。全国高体連創設（6 月）
1962 年　日本スポーツ少年団設立　　1970 年 12 月　社団法人神戸フットボールクラブ設立
1963 年　高校総体はじまる
1966 年　高校総体にサッカー競技が加わる／毎日新聞社撤退
1970 年　国体少年の部が選抜チームの大会に
1971 年　選手権を民放が放送開始。高体連が選手権の主催に戻る　　1972 年　選手権を民放が後援
1977 年 1 月　選手権を関西から首都圏へ。浦和南 5-4 静岡学園
1992 年　全日本高校女子選手権（JFA 主催）
1993 年　J リーグ開幕
1996 年　東京都内で「DUO リーグ」はじまる　　1995 静岡県ユースリーグ　　1997 関東スーパーリーグ
2001 年　東京都内で公認 U-18 フットサル大会はじまる
2006 年　国体少年の部が U-16 大会となる
2008 年　全国高体連サッカー専門部内に女子部門創設
2011 年　高円宮杯 U-18 サッカーリーグ－プレミアリーグを頂点とするリーグ構造完成
2012 年　高校総体に女子サッカーが加わる
2014 年 8 月　JFA 全日本 U-18 フットサル選手権大会（JFA 主催）
2017 年 1 月　U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップはじまる（NPO 法人サロン 2002 主催）

180917 公開シンポジウム補足資料

各年代競技会（主なもの） 歴代優勝チーム

(天皇杯)全日本選手権大会

回	年 度		優 勝	準優勝
1	大10	1921	東京蹴球団	御影蹴球団
2	大11	1922	名古屋蹴球団	広島高師
3	大12	1923	アストラ・クラブ	名古屋蹴球団
4	大13	1924	鯉城クラブ	全御影師範クラブ
5	大14	1925	鯉城蹴球団	東京帝大学
6	大15/昭元	1926	※大正天皇崩御のため中止	
7	昭2	1927	神戸一中クラブ	鯉城クラブ
8	昭3	1928	早大WMW	京都帝大学
9	昭4	1929	関学クラブ	法政大学
10	昭5	1930	関学クラブ	慶応BRB
11	昭6	1931	東京帝大LB	興文中学
12	昭7	1932	慶応クラブ	芳野クラブ
13	昭8	1933	東京OBクラブ	仙台サッカークラブ
14	昭9	1934	※極東選手権準備のため中止	
15	昭10	1935	全京城蹴球団	東京文理大学
16	昭11	1936	慶応BRB	普成専門
17	昭12	1937	慶応大学	神戸商大学
18	昭13	1938	早稲田大学	慶応大学
19	昭14	1939	慶応BRB	早稲田大学
20	昭15	1940	慶応BRB	早大WMW
21	昭16	1941	※戦争のため諸行事中止	
22	昭17	1942	※戦争のため諸行事中止	
23	昭18	1943	※戦争のため諸行事中止	
24	昭19	1944	※戦争のため諸行事中止	
25	昭20	1945	※戦争のため諸行事中止	
26	昭21	1946	東大LB	神経大クラブ
27	昭22	1947	※世情不安のため中止	
28	昭23	1948	※世情不安のため中止	
29	昭24	1949	東大LB	関大クラブ
30	昭25	1950	全関学	慶応大学
31	昭26	1951	慶応BRB	大阪クラブ
32	昭27	1952	全慶応	大阪クラブ
33	昭28	1953	全関学	大阪クラブ
34	昭29	1954	慶応BRB	東洋工業
35	昭30	1955	全関学	中大クラブ
36	昭31	1956	慶応BRB	八幡製鉄
37	昭32	1957	中大クラブ	東洋工業
38	昭33	1958	関学クラブ	八幡製鉄
39	昭34	1959	関学クラブ	中央大学
40	昭35	1960	古河電工	慶応BRB
41	昭36	1961	古河電工	中央大学
42	昭37	1962	中央大学	古河電工
43	昭38	1963	早稲田大学	日立本社
44	昭39	1964	八幡製鉄・古河電工	
45	昭40	1965	東洋工業	八幡製鉄
46	昭41	1966	早稲田大学	東洋工業
47	昭42	1967	東洋工業	三菱重工
48	昭43	1968	ヤンマー	三菱重工
49	昭44	1969	東洋工業	立教大学

関東大学リーグ

回	優 勝	筑波大(含前身)の成績
1	早稲田大	3位/6校
2	東京高師	優勝
3	東京帝大	4位
4	東京帝大	5位
5	東京帝大	5位
6	東京帝大	5位
7	東京帝大	5位/5校→降格
8	東京帝大	【2部優勝】
9	慶應義塾	4位/6校
10	早稲田大	4位
11	早稲田大・慶應義塾	4位→最下位決定戦
12	早稲田大	3位
13	早稲田大	3位
14	慶應義塾	4位
15	慶應義塾	6位→降格
16	慶應義塾	【2部優勝】
17	慶應義塾	5位
18	早稲田大・東京帝大	6位→降格
19	東京帝大	【2部優勝】
幻大会	（東京帝大）	4位（春開催）
―	中 止	
―	中 止	
20	早稲田大	3位
21	早稲田大	4位
22	東京帝大	2位
23	早稲田大	4位
24	早稲田大	3位
25	早稲田大	7位/7校→7-1東工大
26	慶應義塾	6位/7校
27	東京教育大	優勝
28	立教大	3位
29	早稲田大	2位
30	早稲田大	7位/8校
31	早稲田大	6位
32	早稲田大	4位
33	立教大	4位→下位決定戦
34	早稲田大	6位
35	中央大	6位
36	中央大	4位
37	早稲田大	6位
38	明治大	4位
39	早稲田大	3位
40	早稲田大・中央大	3位
41	早稲田大	4位
42	東京教育大	優勝
43	東京教育大	優勝

全国高校選手権大会

回	年 度	優 勝	準優勝
1	1917	御影師	明星商
2	1918	御影師	明星商
3	1919	御影師	姫路師
4	1920	御影師	姫路師
5	1921	御影師	神戸一中
6	1922	御影師	姫路師
7	1923	御影師	京都師
8	1924	神戸一中	御影師
9	1925	御影師	広島一中
―	1926	中 止	
10	1927	崇実	広島一中
11	1928	御影師	平壌高
12	1929	神戸一中	広島師
13	1930	御影師	広島一中
14	1931	御影師	愛知一師
15	1932	神戸一中	青山師
16	1933	岐阜師	明星商
―	1934	中 止	
17	1935	神戸一中	天王寺師
18	1936	広島一中	韮崎中
19	1937	埼玉師	神戸一中
20	1938	神戸一中	滋賀師
21	1939	広島一中	聖峰中
22	1940	普成中	神戸三中
23	1941	※戦争のため中止	
24	1942	※戦争のため中止	
―	1943	中 止	
―	1944	中 止	
―	1945	中 止	
25	1946	※8月末に招待大会	
26	1947	広島高師付中	尼崎中
27	1948	鯉城	上野北
28	1949	池田	宇都宮
29	1950	宇都宮	小田原
30	1951	浦和	三国丘
31	1952	修道	韮崎
32	1953	東千田・岸和田	
33	1954	浦和	刈谷
34	1955	浦和	秋田商
35	1956	浦和西	日立第一
36	1957	秋田商	刈谷
37	1958	山城	広大附
38	1959	浦和市立	明星
39	1960	浦和市立	遠野
40	1961	修道	山城
41	1962	藤枝東	浦和市立
42	1963	藤枝東	明星
43	1964	浦和市立	宇都宮学園
44	1965	習志野・明星	
45	1966	秋田商・藤枝東	
46	1967	山陽・洛北	
47	1968	初芝	山陽
48	1969	浦和南	初芝

50	昭45	1970	ヤンマー	東洋工業	44	立教大	4位	49	1970	藤枝東	浜名
51	昭46	1971	三菱重工	ヤンマー	45	早稲田大	4位	50	1971	習志野	壬生川工
52	昭47	1972	日立製作所	ヤンマー	46	早稲田大	8位→2-1東農大	51	1972	浦和市立	藤枝東
53	昭48	1973	三菱重工	日立製作所	47	法政大	5位	52	1973	北陽	藤枝東
54	昭49	1974	ヤンマー	永大産業	48	中央大	6位	53	1974	帝京	清水東
55	昭50	1975	日立製作所	フジタ工業	49	早稲田大	6位	54	1975	浦和南	静岡工
56	昭51	1976	古河電工	ヤンマー	50	早稲田大	4位	55	1976	浦和南	静岡学園
57	昭52	1977	フジタ工業	ヤンマー	51	法政大	2位	56	1977	帝京	四日市中央工
58	昭53	1978	三菱重工	東洋工業	52	中央大	5位	57	1978	古河一	室蘭大谷
59	昭54	1979	フジタ工業	三菱重工	53	法政大	2位	58	1979	帝京	韮崎
60	昭55	1980	三菱重工	田辺製薬	54	筑波大	優勝	59	1980	古河一	清水東
61	昭56	1981	日本鋼管	読売クラブ	55	日本体育大	4位	60	1981	武南	韮崎
62	昭57	1982	ヤマハ発動機	フジタ工業クラブ	56	国士舘大	4位	61	1982	清水東	韮崎
63	昭58	1983	日産自動車	ヤンマー	57	筑波大	優勝	62	1983	帝京	清水東
64	昭59	1984	読売クラブ	古河電工	58	国士舘大	3位	63	1984	帝京・島原商	
65	昭60	1985	日産自動車	フジタ工業	59	国士舘大	7位→0-0青学大	64	1985	清水市商	四日市中央工
66	昭61	1986	読売クラブ	日本鋼管	60	東海大	5位	65	1986	東海大一	国見
67	昭62	1987	読売クラブ	マツダSC	61	筑波大	優勝	66	1987	国見	東海大第一
68	昭63	1988	日産自動車	フジタ工業	62	筑波大	優勝	67	1988	清水市商	市立船橋
69	昭64/平元	1989	日産自動車	ヤマハ発動機	63	国士舘大	3位	68	1989	南宇和	武南
70	平2	1990	松下電器	日産自動車	64	順天堂大	8位→1-0法政大	69	1990	国見	鹿児島実
71	平3	1991	日産自動車	読売クラブ	65	国士舘大	4位	70	1991	四日市中央工・帝京	
72	平4	1992	日産FC横浜マリノス	読売ヴェルディ	66	筑波大	優勝	71	1992	国見	山城
73	平5	1993	横浜フリューゲルス	鹿島アントラーズ	67	筑波大	優勝	72	1993	清水市商	国見
74	平6	1994	ベルマーレ平塚	セレッソ大阪	68	筑波大	優勝	73	1994	市立船橋	帝京
75	平7	1995	名古屋グランパスエイト	サンフレッチェ広島	69	国士舘大	2位	74	1995	静岡学園・鹿児島実	
76	平8	1996	ヴェルディ川崎	サンフレッチェ広島	70	早稲田大	6位	75	1996	市立船橋	桐光学園
77	平9	1997	鹿島アントラーズ	横浜フリューゲルス	71	国士舘大	4位	76	1997	東福岡	帝京
78	平10	1998	横浜フリューゲルス	清水エスパルス	72	国士舘大	6位	77	1998	東福岡	帝京
79	平11	1999	名古屋グランパスエイト	サンフレッチェ広島	73	筑波大	優勝	78	1999	市立船橋	鹿児島実
80	平12	2000	鹿島アントラーズ	清水エスパルス	74	筑波大	優勝	79	2000	国見	草津東
81	平13	2001	清水エスパルス	セレッソ大阪	75	国士舘大	2位	80	2001	国見	岐阜工
82	平14	2002	京都パープルサンガ	鹿島アントラーズ	76	駒澤大	2位	81	2002	市立船橋	国見
83	平15	2003	ジュビロ磐田	セレッソ大阪	77	駒澤大	2位	82	2003	国見	筑陽学園
84	平16	2004	東京ヴェルディ1969	ジュビロ磐田	78	筑波大	優勝	83	2004	鹿児島実	市立船橋
85	平17	2005	浦和レッズ	清水エスパルス	79	駒澤大	3位/12校	84	2005	野洲	鹿児島実
86	平18	2006	浦和レッズ	ガンバ大阪	80	流通経済大	9位	85	2006	盛岡商業	作陽
87	平19	2007	鹿島アントラーズ	サンフレッチェ広島	81	明治大	10位	86	2007	流通経済大付柏	藤枝東
88	平20	2008	ガンバ大阪	柏レイソル	82	流通経済大	3位	87	2008	広島皆実	鹿児島城西
89	平21	2009	ガンバ大阪	名古屋グランパス	83	流通経済大	9位	88	2009	山梨学院	青森山田
90	平22	2010	鹿島アントラーズ	清水エスパルス	84	明治大	2位	89	2010	滝川第二	久御山
91	平23	2011	FC東京	京都サンガF.C.	85	専修大	4位	90	2011	市立船橋	四日市中央工
92	平24	2012	柏レイソル	ガンバ大阪	86	専修大	6位	91	2012	鵬翔	京都橘
93	平25	2013	横浜F・マリノス	サンフレッチェ広島	87	専修大	6位	92	2013	富山第一	星稜
94	平26	2014	ガンバ大阪	モンテディオ山形	88	専修大	11位→降格	93	2014	星稜	前橋育英
95	平27	2015	ガンバ大阪	浦和レッズ	89	早稲田大	【2部2位・昇格】	94	2015	東福岡	國學院久我山
96	平28	2016	鹿島アントラーズ	川崎フロンターレ	90	明治大	2位	95	2016	青森山田	前橋育英
97	平29	2017	セレッソ大阪	横浜F・マリノス	91	筑波大	1位	96	2017	前橋育英	流通経済大付柏
98	平30	2018			92			97	2018		

＜JFA全日本U-18フットサル選手権大会＞

回	年	優勝	準優勝	第3位
1	2014	聖和学園FC （東北／宮城県）	名古屋オーシャンズU-18 （東海／愛知県）	藤井学園寒川高等学校サッカー部 （四国／香川県）
2	2015	岡山県作陽高等学校 （中国／岡山県）	北海道釧路北陽高等学校 （北海道／北海道）	PSTCロンドリーナU-18 （関東／神奈川県）
3	2016	帝京長岡高等学校 （北信越／新潟県）	フットボウズ・フットサル U-18 （関東／東京都）	香川県立高松商業高等学校 （四国／香川県）
4	2017	矢板中央高等学校 （関東/栃木県）	新潟県立長岡向陵高等学校 （北信越/新潟県）	フウガドールすみだファルコンズ （関東/東京都）
5	2018	帝京長岡高等学校 （北信越／新潟県）	フウガドールすみだファルコンズ （関東/東京都）	聖和学園FC （東北／宮城県）

180917 公開シンポジウム補足資料

日大アメフト部の悪質タックルと体操の暴力問題からみえる部活動の課題

朝日新聞　中小路 徹

大学の運動部と日本代表クラスの現場で起こった事態ではあるが、中高の運動部活動と地続きの問題。何がブラックかを整理して、解消への道筋を模索したい。

■過度な上意下達＝生徒の自主・自治性が弱い環境

・「監督とは意見を言える関係でなかった」（日大のディフェンス選手）
・逆らえない空気が思考を停止させ、試合出場と引き換えに「潰してこい」の指示に盲従
・厳しさと強圧のはき違え＝主役は誰なのか
・小中高と指導者の顔色をみながらプレーする生徒たち→自己判断の喪失
・コーチたちも上意下達の構図の中にいた現実
・自主・自治性を大事にする指導を＝コミュニケーションが勝負になる

■勝利至上主義

・「けがをさせてでも勝てばいい」の発想＝相手へのリスペクトの不在
・無視できない「進学との関係」→親、生徒もブラックさを受け入れる土壌
・学校がスポーツを広告塔としている現実
・プロセスを大事にする価値観の浸透を

■閉ざされた世界

・カリスマ化、独裁を生む→干されたくない選手も周りも、物言えぬ雰囲気に
・社会の流れにスポーツ界がついていっていなかった→ＳＮＳを通じ、顕在化
・長時間部活の解消は、視野を広げる契機に
・「スポーツさえやっていればいい」からの転換を
・第三者の目が入る開放性を

■なぜ、暴力指導が生まれるのか

・「自分もたたかれる指導を受け、感謝していた」（体操の速見コーチ）
・「良くないとわかっていながら、いらいらして我慢できずたたいた」（同上）
・「行為は認めるが、暴力ではない」（駅伝の渡辺監督）
・児童虐待と同じ構図の常習性
・される側（保護者を含む）がそれを肯定する「負の連鎖」の切断を

＊拙著「脱ブラック部活」（洋泉社新書）もご参考ください！

180917 公開シンポジウム補足資料

少子化時代の部活動～これからの望ましい部活動のあり方を考える～

国際武道大学　嶋崎 雅規

「ブラック部活動」と揶揄される「やりすぎ部活」がある半面、少子化の影響で「好きな部活が思い切りできない」という問題も起こっている。そのような部活動の現状を明らかにしたうえで、「これからの部活動のあり方」を提言していきたい。

■運動部活動における課題

・顧問主導型の勝利至上主義的活動
・休日もない過度の活動
・少子化による生徒数の減少
・運動部活動への参加生徒数の減少
・教職員数の減少と顧問不足
・指導者の高齢化や実技指導力不足

■運動部活動の現状

・中学生の加入率：66.5%（日本中体連、2016）
・高校生の加入率：44.2%（全国高体連＋日本高野連、2016）
・ただし、種目によっては大幅に減少
　2001 年から 15 年間で柔道は半減、野球 / 剣道は約 6 割、ｿﾌﾄﾎﾞｰﾙ / ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙは約 7 割に（中体連）

■複数校合同運動部活動の取組み（ラグビーの事例）

・全国大会東京都予選の参加校数は、1991 年の 134 校から 2000 年には 44 校に
・東京都高体連ラグビー専門部では、2001 年から合同チームによる大会参加を認める
　2017 年は、54 校が単独で 20 校は 5 つの合同チームとして参加（加盟校 80 校）
・しかし、加盟校数・登録人数は年々減少（これは全国的な傾向）
・KOBELCO CUP（合同チームの全国大会）や U18 合同チーム東西対抗戦
・ASSICS CUP（全国高校 7 人制大会）では、クラブチームの参加も認める

■複数校合同運動部活動の課題

・移動に時間がかかり、帰宅時間も遅くなる
・学校行事等の関係により、合同練習の日程調整が難しく、十分な練習時間や練習回数が確保できない
・部員間のコミュニケーションがうまく取れない
・運営組織が確立していないので、組織的・継続的な活動にならない

180917 公開シンポジウム補足資料

■学校運動部活動指導者の実態

・中学校で 45.9%、高校で 40.9% が保健体育以外でその種目の経験なし（日本体育協会、2014）
　自分自身の専門的指導力不足に不安
・外部指導員導入状況：29,555 人（日本中体連、2016）
・「部活動指導員」を学校職員に（文部科学省、2017）
　学校外の活動（大会・練習試合等）への単独での引率が可能
・「部活動指導員」は救世主となるか？
　求められる資質・能力、人材確保と待遇面の課題など
・中学校の運動部活動を民間委託
・総合型地域スポーツクラブと連携

■運動部活動のあり方に関する総合的なガイドライン（スポーツ庁、2018）

・適切な運営のための体制整備
・合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組
・適切な休養日等の設定
　週当たり 2 日以上の休養日を設ける（平日は少なくとも 1 日、週末は少なくとも 1 日以上を休　養日とする）
　長期休業中に、ある程度長期の休養期間（オフシーズン）を設ける
　1 日の活動時間は、長くとも平日では 2 時間程度、学校の休業日は 3 時間程度
・生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備
・学校単位で参加する大会等の見直し

■多様性が認められない運動部活動

・これまで…多くの運動部活動が週に 6~7 日、土日も活動（ブラック部活動）
　背景には負けたら終わり（ノックアウト方式）の競技会のあり方
　みんなが頂点（日本一）を目指す構造
・これから…シーズン制
　総合型運動部
　ニュースポーツ
　週 3~4 日、試合のない土日は休み（脱ブラック部活）
　　そのためには対外試合基準の見直しを

■これからの望ましい運動部活動のあり方

・競技志向でない活動
・小学校では総合型運動部で多種目を経験
・中学校ではシーズン制で複数種目を経験
・試合は地域のリーグ戦でチャンピオンシップでなく
・競技志向の活動は、週末などに広域的なクラブで
・生涯スポーツにつながる活動

180917 公開シンポジウム補足資料

ユースリーグと U-18 フットサルからみえるもの

筑波大学附属高校　中塚 義実

高校サッカー百年のうち 40 年以上に“当事者”として関わってきたが、「どこかおかしい」と感じ、高校の指導現場でいくつかの“改革”を試みた。
ユースサッカーリーグと U-18 フットサルの事例を通してみえるものを語りたい。

■ユースサッカーリーグの公認化過程でみえる、教育の論理とスポーツの論理の“壁”

・「スポーツとはどのような文化なのか」との問題意識から DUO リーグが生まれた（1996）
　“理念”を掲げ、大人たちがむきになって楽しみながら“遊び”をつくり上げた
・「小さく立ち上げ、大きく育てる」。文京区・豊島区限定から、都内全域、そして全国へ
・スポーツの論理で進めようとしたが、チームでしかない学校運動部がリーグ参加しようとすると…
　⇒　東京都ユースサッカーリーグの公認化断念（2004）
・いまではサッカー協会主導でユースサッカーリーグが整備されているが…

■ U-18 フットサルの黎明期から今日に至るまでーここにも別の“壁”が

・全国に先駆けて、東京都サッカー協会主催の U-18 フットサル大会が生まれた（2001）
　大会ごとの柔軟な登録制度のおかげで多種多様なチームが集まった
・「もっとやりたい」からリーグを組織（2007）。やりたい人が自分たちで“遊び”をつくり上げた
　⇒　フットサル連盟傘下となり（2016）、かえって混乱が…
・東京都の試みを全国へ発信（2005 ～ 2007）。民間主導で全国プレ大会開催（2012 年 3 月）
・JFF 主催の選抜大会（2013 年 3 月→ 2018 年 3 月で休止）と JFA 主催の選手権大会（2014 年 8 月～）
・U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップを NPO 法人サロン 2002 で主催（2017 年 1 月～）
・競技団体の為すべきことは何か？（“遊び”を続けるにはどうすればよいか）

■部活動のこれから－“遊び”を続けるには

・「学校教育活動」（＝まじめ？）であれば、保護者は安心、生徒は出やすい、施設も使いやすい。
　その代わり、教師の負担が増える
・「地域のスポーツ活動（＝遊び？）」であれば、もっと自然にできるはず（本来のスポーツはこちら）。
　その代わり、自分のことは自分で！（⇒「ちゃんと遊べ！」）
・学校であっても地域であっても、青少年の活動に教育的な視点・配慮が必要なのは「当たり前！」

■おまけ：わたし自身の働き方改革

・部活動とわたし－小中高の思い出
・　　〃　　－大学～大学院
・　　〃　　－教員になってから（競技を続けていた頃　→　競技生活“卒業”後）
・　　〃　　－そしていま

180917 公開シンポジウム補足資料

＜日本部活動学会　会報第２号掲載原稿＞

部活動とわたし－小中高の思い出

筑波大学附属高校保健体育科教諭・蹴球部顧問
NPO 法人サロン 2002 理事長
中塚 義実

1987 年に赴任して以来異動もなく、定点観測は 32 年目に突入した。現場から見える高校部活動について書こうかとも思ったが 1,600 字ではまったく収まらない。そこで今回は自己紹介を兼ねて、自分自身のあゆみを部活動とからめて述べることとする。

私が小学生のころ、子どもの世界には時間・空間・仲間の「サンマ」がたっぷりあった。学校が終わるといつも暗くなるまで外で遊んでいた。遊びの中には野球やサッカーもあったが、ちゃんとしたものではなく、集まった子どもたちで遊び方を考えて楽しむものであった。私はサッカー大好き少年だった。

マンガやアニメの影響は当時も大きかった。「巨人の星」では“汗と涙と根性と”のスポーツ観と、“大リーグボール養成ギプス”や“うさぎ跳び”などの非科学的トレーニング法を学んだ (?!)。高学年になると青春ドラマにも感化された。若い熱血先生が主人公で、高校サッカー部やラグビー部、剣道部が舞台である。金八先生のようなメッセージ性はないが、部活動が青春ドラマに、あるいは青春そのものに欠かせないものであることはわかった。中学生になったら運動部に入りたいと思っていた。

大阪府茨木市立南中学校に入学したのは 1974 年のことである。サッカー部は学校中のワルが集まってくるような部活だった。当時サッカーは、血の気の多い輩が選ぶスポーツだったのかもしれない。その部を率いていたのは体育大出の若い熱血先生だった。怖くて、おもしろくて、何でもやってしまうその先生には、学校中のワルもよくなついていた。青春ドラマでみていた通りの部活動中心の生活である。休日も含め毎日練習。勝つ喜びも味わうことができ、私はますますサッカーの虜になっていく。練習中は水を飲んではならないし、いわゆる「体罰」もふつうにあったが、ネガティブな印象はない。

高校でも迷わずサッカー部に入った。大阪府立三島高校サッカー部は、中学時代の熱血運動部とは異なり、当時のもう一つの流行である民主的運動部であった。顧問の先生は練習には出てこない。日々の練習は主将が進め、試合を組むのもメンバー決めも、主将を中心に部員が決めていく。入学して最初の練習後、当時の主将に「1 年生集合」と呼ばれたときは「振るい落としのしごきがはじまる」と身構えたがそうではなく、主将からの訓話であった。「サッカーにはな、“勝つサッカー”と“楽しむサッカー”があるんや。どちらを選ぶかはお前ら自身やぞ」との話は、当時はあまり意味がわからなかった。約 1 年後、主将になった私は、強くなるために相当厳しい練習を自分にもチームメートにも課していたが、そんなある日、「中塚さんの“勝つサッカー”にはついていけません。ぼくらは“楽しむサッカー”がやりたいんです」と下級生 10 名ほどが私のところに退部届を持ってきた。入学時に主将が言っていたことである。「俺と違う気持ちでサッカーやっている奴がおるんや」ということに初めて気づいたが、その本当の意味がわかったのは、大学でスポーツ社会学を学んでからのことである。

高校時代、大阪でベスト 4 まではいったが、全国大会には出られなかった。その悔しさを胸に筑波大学蹴球部に入部する…。と書いているうちに紙面が尽きてきた。部活ネタを語り出すと止まらない。本題はここからなのだが…。機会があればお伝えしたい。

最後に宣伝を一つ。「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げる NPO 法人サロン 2002 では毎年公開シンポジウムを開いている。今年は 9 月 17 日（月祝）午後、筑波大学附属中高敷地内の桐陰会館にて「部活動を語ろう！－高校サッカー 100 周年を機に（仮題）」を企画しており、中澤篤史氏（早稲田大学）、中小路徹氏（朝日新聞社）を招いて意見交換します。是非ご参加ください。詳細は NPO サロンの HP でご案内します。

2018 年 6 月 16 日（久しぶりの休日の自宅にて。ワールドカップ TV 観戦で時差ボケ中）

蹴球部保護者・卒業生及び関係各位

2018.9.4.

筑波大学附属高校蹴球部・夏の活動報告（抜粋）

サッカー部顧問　中塚義実　（保健体育科）
フットサル部顧問　○○○○
女子蹴球部顧問　○○○○

今年の夏は全国的に、猛暑を通り越して酷暑と言える状況でした。練習時間を早めるなど、学校としてできることはいたしましたが、さすがに蹴球部の合宿地を直撃した台風は避けられませんでした。記憶に残る夏でした。

日頃から蹴球部の活動にご理解とご協力をいただき、まことにありがとうございます。今夏のできごとを中心に、上半期の活動報告をさせていただきます。

１．蹴球部全体

◆蹴球部の概況

「蹴球部」（または「サッカー（フットボール）クラブ」）は、サッカー部、フットサル部、女子蹴球部をあわせた呼称です。部員数は表のとおりです。

筑波大学附属高校サッカークラブ 部員数（2018年度）　2018 8/31時点

	3年生	2年生	1年生	
サッカー部（ﾌﾟﾚｰﾔｰ）	9	12	8	29
サッカー部（ﾏﾈｰｼﾞｬｰ）	2	1	2	5
女子蹴球部	3	13	10	26
フットサル部	6	1	17	24
所属なし	0	0	0	0
合　計	20	27	37	79

フットサル部に１７名もの１年生が入部したのは朗報です。主将とクラブ長を兼ねる原崎君への負担が気になりますが、次につないでくれることでしょう。女子蹴球部も１～２年で２３名もおり、校内で一番の勢力です。サッカー部は３年生が抜けると紅白戦ができずＧＫも一人で、困っています。

以前は当たり前だった「３年の夏の大勝負」に挑んだサッカー部の３年生は、今年は３名でした。再び「ふつう」となるよう、高いレベルでの「勉強とスポーツの両立」に、日頃から取り組んでほしいと思います。「アマチュアに引退なし」です。

◆クラブとして

１２４回生が２年生のときに「運営能力の低下」を理由に途絶えた校内フットサル大会は、今春の卒業生（１２６回生）を中心に復活し、クラブとしての活力も取り戻しつつあると感じていました。クラブ長は、６月の院戦前後に２年生に代替わりし、サッカー部：○○君、女子蹴球部：△△さん、フットサル部：□□君となりました。

しかしその後、クラブの在り方が問われるような事態が次々と生じています。毎週金曜昼休みのクラブ会への無断欠席が多い（とくにサッカー部２年）ことや、TFT と名づけられた校内フットサル大会の運営が再びメチャクチャになっている（ルールを知らないまま審判をやっている。「仕切る」力がない。運営は女子に依存…）などが主な現象です。ほかにも、３部門でそろえていた学年ジャージがつくれなかったこと、クラブ全体で取り組んできた桐陰祭にサッカー部が参加しないことなど、クラブの結束力の低下が気になります。顧問が３名とも担任団に入り、指導が行き届かなくなっていることもありますが、そもそも自分たちで作り上げていくものです。

ワールドカップイヤーです。「なんもやれへんの？」と顧問にそそのかされた（？）生徒たちは、Ｗ杯の宣伝ポスターをつくり、優勝国クイズをはじめました。女子蹴球部を中心に取り組んだようですが、男子もこの“遊び”に加わり、よいムードです。事前アンケートによると、優勝候補一番手はブラジル、続いてスペインだったようですが、それらが敗退した後のフォローがありません。「忙しい（と感じている）」生徒たちには、こうした“遊び”を持続する力が足りません。玄関脇にはいまだに大会前と同じポスターが並んでいます。

９月８～９日の桐陰祭では、女子蹴球部とフットサル部、およびサッカー部の有志でキックターゲットをするようです（かつてやっていましたね）。前庭でやっているので顔を出してみてください。

このような状況下での夏合宿でした。

180917 公開シンポジウム補足資料

◆夏合宿について

夏合宿は今年も３部門合同で実施しました。停滞気味の“クラブ”を活性化させるチャンスです。

蓼科生活との重複をできるだけ避けるため、８月６日（月）からの５泊６日としました。フットサル部は８月11～12日に開かれる「第18回東京都フットサルチャレンジU-18」参加のため、８月９日に帰京します。宿はいつもの「あおの」ではなく、利根川沿いの「あおきや」を借り切りました。３日目までは人数が多く、OB・OGは400mほど先の「ミンションやまざき」に分宿となりました。

合宿前日の準備会は、今年も「サンマ（時間・空間・仲間）を意識せい！」という話から始まりました。子どもたちの遊び環境が「サンマの喪失」により大きく変化し、群れ遊びを経験しないまま高校生になっています。時間（いま何をすべきか／次に～／いつまでに～etc.）、空間（ここは何をするところか／場をどう活用するかetc.）、仲間（チームやクラブのメンバーはいまどういう状態にあるのか／どのような力を持つ仲間がいるのかetc.）を意識して行動することは、サッカーにおいても日常生活においても大切な観点です。「“当たり前”をさりげなく」ということも求めました。「“いま”を大切に。それが“これから”につながる」ことや、「“いま”どうするかを考える上で“これまで”（歴史）を学べ」ということも話をしました。なぜこのクラブがあるのか、なぜ坊主戦やギャル戦があるのかは、“いま”をみただけではわかりません。変えるのなら、“これまで”の経緯・歴史を学んだうえで、合意形成のための準備をし、勇気をもって変えることに挑む必要があります。

サッカー部２年の間で「坊主戦をやりたくないという意見が出ている」という話を耳にしたのは６月ごろです。「そういう問題があるんやったら早めに話をしとけよ」と伝えていたのに、腹を割った話をしないまま合宿に突入したようです。合宿中のミーティングで坊主戦の是非を議論するのはあまりにももったいない。けど、これまでやってきていないのならやらなアカン…。その時間を生むうえで、台風の直撃は有効（？）でした。

８月９日早朝に銚子沖を通過した台風13号は、まさに我々が泊まっていたあたりを直撃しました。

このため８月８日の朝から大雨。午前練は何とかやりくりして行いましたが、午後は宿周辺でトレーニングと勉強。その日の夜から翌日14時までは「外出禁止」として宿にこもることになりました。

その時間を使って、８月９日午前に「クラブ会」を開き、いまクラブが抱えている問題点を共有し、解決策を探る機会となりました。OB・OGの高校時代の話をいろいろお聞きし、生徒たちは“これまで”を踏まえた上で“いま”があることを、少しは理解できたのではないでしょうか。

104回生が坊主戦をはじめた当時といまとでは、“坊主”に対する感覚も、それを“賭け”て試合をすることについても受け止め方は変わってきたはずです。“坊主戦”の話は、私自身もいろんなところでする機会がありますが、「こういう“遊び”にむきになって取り組める高校生は素晴らしい」「坊主をかけて試合することで、眠っていた力が引き出せる。良い方法だ」「自分たちでやっているのがいい」と肯定的に受け止める意見がある一方で、「負ければ坊主頭が強制されるのは“体罰”の一種ではないか」「いやがることをなぜするのか。時代遅れもはなはだしい」など、とらえ方は多様です。

生徒の話しも堂々巡りです。けどようやく、本気で議論していることはわかります。こういう時間が必要なのです。こちらは話し合いを見守るスタンスですが、いつまでたっても決定しないので「このチームのハートは誰や？（この代のできごとに責任と権限を持つ者は誰？との意）」「主将と副将で決断せい！」と伝え、長いこの話を打ち切りました。そして「実施する」ことになりました。

やってみれば、いつもどおりの風景がそこにありました。くじ引きで主将決め。大騒ぎです。くじで負けた１年のX君と２年のY君が主将となり、二人でじゃんけんしてチーム決め（ここは非公開）。台風が通り過ぎた８月９日の午後、20分ハーフで行われました。結果は3-0でXチームの勝利。坊主がかかったX君のハットトリックでした。

もっともなりたくない坊主を賭けて必死にサッカーをやっている男子のすがたをみて「楽しそう」と思い、女子がギャル戦をはじめたのは119回生からです。９月最初の登校日に「ギャル姿」になって全校集会に現れるという、これまた“アホな”企画ですが、続いています。今年は１年のAさんと２年のBさんが主将となりました、Aさんは用があって９日のバスで帰京。「魂を置いていく」ことはしましたが、やはり現場で「魂を表現する」人にはかないません。Bさんチームが2-0の勝利。得点者はいずれもBさんでした。

フットサル部は帰京前日の８日午前に「タンクトップ戦」を行いました。議論の末、「坊主はいやだけど、違うことを賭けよう」「賭けるならできるだけいやなことがいい」「そうだ、９月１日の集会の日にタンクトップを着てくることにしよう」となったようです。いずれも１年２組のC君とD君が率いる試合は5-1でC君チー

ムが勝ちました。全体ミーティングでの勝利報告では「心理的限界の先に生理的限界があることを感じました」と、覚えたばかりの用語を用いて語りました。

９月１日の登校日。派手なギャル姿の女子とタンクトップ姿のおやじ風男子が集会の場にいました。Ｙ君の坊主頭はすでに日常の風景です。

坊主戦（ギャル戦、タンクトップ戦含む）は未来永劫続いていくものではないでしょう。時代の要請、当事者たちの意識の変化を踏まえて、見直していくべきものの一つです。

＜2018「坊主戦・ギャル戦・タンクトップ戦」＞

部　門(試合形式)	／ 開催日	／ 主将と試合結果
サッカー部(８人制サッカー)	／8/9PM	／○Ｘ君(１年) 3-0 ●Ｙ君(２年)
女子部(フットサル)	／8/9PM	／○Ｂさん(２年) 2-0 ●Ａさん(１年)
フットサル部(フットサル)	／8/8AM	／○Ｃ君(１年)5-1●Ｄ君(１年)

※男女の負けチーム主将が「坊主」「ギャル」「タンクトップ」に

しかし、ただ単に「いやだから」ではダメです。なぜこの行事が続いてきたのか。副産物として得られる大きな成果に目を向け、“これまで”を踏まえた上で、“これから”につながる“いま”を大事にしてもらいたいと思います。

「意味なしダッシュ」も同じようなことです。今年の合宿でもしませんでした。罰則を設けてルールを守らせるのがなじまないというのもありますが、残念ながらいまの高校生の「当たり前」レベルが低すぎて、以前設けていた基準だと「意味なしダッシュ」だらけになってしまうというのが、なくなった大きな要因です。

サンマ（時間・空間・仲間）を意識して行動することが年々できなくなっていると感じます。何とかしなくてはなりません。しかしこちらも部活動に顔を出す機会が減っています。あきらめはしませんが、かなりの難題であることは間違いありません。試行錯誤しながら指導を続けます。（以下略）

（中塚義実）

シンポジウム参加者一覧

石崎 万理	伊藤 慧	浦井 智治	浦久保 和哉
海老島 均	大河原 誠二	笠野 英弘	金井 祐樹
岸 卓巨	黒崎 祐一	香西 武彦	小山 基彰
斎藤 芳	齋藤 守弘	榊田 佳文	笹原 勉
三本木 温	重信 大和	柴崎 雛子	柴田 紘希
嶋崎 雅規	白井 久明	鈴木 崇正	鈴木 知幸
関 秀忠	髙橋 正紀	竹中 茂雄	田中 俊也
茅野 英一	塚本 正昭	利倉 加奈子	中小路 徹
中澤 篤史	中島 輝	名方 幸彦	中塚 義実
中屋 晋	平井 悠登	藤 至光	藤原 淳治
松田 薫二	皆川 宥子	三浦 哲治	宮原 翔太朗
村本 宗太郎	森田 岳	森下 雄旭	その他 15名

（敬称略）

参加者のご意見

会場で参加者にご回答いただいたアンケートの感想・自由意見の中から、シンポジウムの内容に関するものをご紹介いたします。

- すばらしい問題提起でした。
- 一方で、教育現場では管理主義や暴力ばかりに課題がフォーカスされ、同様に根深い問題である「放任」による「生徒どうしの関係」の問題が見落とされていると思います。指導者には「教師対生徒」だけでなく、「生徒どうし」の上意下達構造を改善していく必要があると考えます。
- もう少し、今後の部活動のあり方像 (地域への移行など) に焦点化していただけたらと思いました。
- 何より驚いたのは中小路氏の話を聞くことができる機会を得ることができたことです。
- 朝日新聞で時々記事を見るので、そのような視点でスポーツと社会を見ておられるのかを知りたいと思い参加しました。"
- 教員を目指す者として考えさせられることが多く貴重なお話を聞くことができたとても良い機会でした。ありがとうございました。
- 私の高校サッカー部は顧問に競技経験がなく、生徒がすべて決める「自主的」な部だったが、結局キャプテンが一人で決める、あまり自主的でない運営だった。
- シンポジウムを通じて多くの疑問を頂きました。ありがとうございました。またぜひ参加させていただきます。
- 今回は様々、部活について自身が考える課題の整理も含めて、勉強させていただきました。ありがとうございました。
- とても勉強になりました。様々な観点で部活の良い点、悪い点、課題などが整理できた。
- しかし、何をどうアクションすべきかというところまで自分の中では行き着かなかった。
- 部活動自体を学校から切り離すこと。教員が関わらないではなく、希望する教員が教員でない立場で関わる仕組みはできないだろうか。
- 部活動を考えるならば、部としての目的と年度の目標を定め、定期的な休みを取り、生徒も教員も定期・定量的に休むこと。“スポーツ”としての質を高めたいならば民間を含む外部指導を具体的に描くこと。これらが、歴史的に観てもスポーツを輸入し、学校を通じ普及した日本が採る一つの指針ではないか。
- 大坂ナオミがいみじくも語った様に、スポーツはゲーム（＝遊びの一種）であること、そして、ベストを尽くすことが楽しむ為の必須条件であること、これらをスタンダードにしなければならないと考えます。
- 過激なコメントになってしまいますが、運動部活動を廃止することは考えられないでしょうか？

シンポジウムにご支援いただいた方々

賛助団体

大月書店
洋泉社

テープ起こし

柴崎雛子、瓜兼汐里

シンポジウム報告校正・編集

笹原勉、川名紀義、雨水誠治、中塚義実